

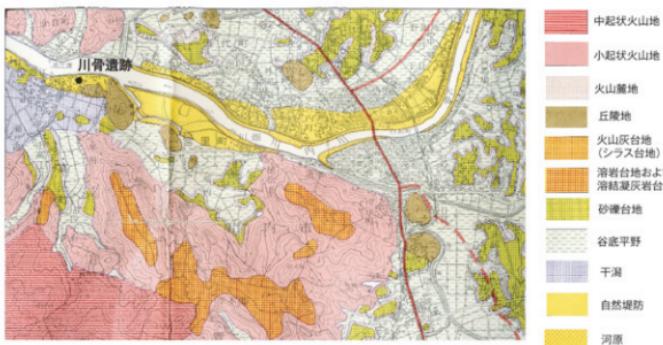
第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置及び地理的環境

川骨遺跡・西之城遺跡・川幡遺跡が所在する薩摩川内市は、薩摩半島の北西部（北緯 $31^{\circ} 46'$ 、東経 $130^{\circ} 18'$ ）に位置する。東シナ海に面し、川内川を有する薩摩川内市は、古くから陸上・水上交通の要所であり、現在でも北薩地域の政治・経済の中心地となっている。薩摩川内市は、北方を出水山地、東を上床山地、南を高江山地に囲まれた盆地状の地形をなし、中央部には本県最大の河川である川内川が流れしており、この川により形成された広い沖積平野を有している。これを川内平野あるいは川内盆地と呼んでいる。山地が多く平野の少ない南九州において大口盆地、出水平野、肝属平野と肩を並べる穀倉地帯である。川内という地名は、古代において薩摩国の設置に伴い薩摩國府が置かれた地域が川内川の内側にあるから「川内」、対岸に属する地域を「川外」と呼んだことに由来すると言われている。

山地の麓には、平野を取り巻くように椎原台地や国分寺台地など低いシラス台地が発達し、宅地や畠地として利用されている。シラス台地は山地から河川によって浸食をうけるため台地の間には狭小な谷底平野が発達すると共に、台地の縁辺部はシラス台地特有の浸食谷が複雑に発達し、急崖をなし、沖積平野へと移行する。これらの台地上では、薩摩国分寺跡や計志加里遺跡など多くの重要な遺跡が発見されている。

川内川の両側には、天辰町から高江町にかけて長さ約8kmにわたって自然堤防が形成される。近年の調査では、自然堤防状で多くの遺構・遺物が発見され、この地が古くから人々の活動の中心地であったことをうかがわせる。川内川は、下流で大きく川幅を広げ、河口の両岸には川内砂丘が発達し、薩摩川内市の特徴的な地形となっている。



第2図 周辺地質図

第2節 歴史的環境

川骨遺跡・西之城遺跡は、薩摩川内市高江町に所在し、川幡遺跡は勝町の宮里町に所在する。

川骨遺跡は、標高約3m～4mの川内川下流左岸の低地に立地、遺跡の東側には猫岳（標高122m）があり、周辺には宅地並びに水田や畠が広がっている。遺跡の所在する高江地区の沖積面は猫岳以西に広がる美田地帯で川内市内でも有数の稻作地帯である。しかし、かつて高江のこの水田地帯は沼沢をなし、かなり奥まで川船の出入りがあった。「又前は大河流れ、末は湖水につづけりといふは、此日暮の地、前に千臺川あり、是より下流二里許を過ぎ、高江邑の内に昔大湾ありて湖の如し、湖とは是を言ふなるべし。貞享年中其湾を墳て開墾し、高江新田と呼ぶ。」（『三国名勝図絵』）この地域では稲作は早くから行われていたようであるが、川内川の増水のたびに氾濫し生産は安定しなかった。この苦境を脱するために薩摩藩の普請奉行小野仙右衛門（千右衛門）による長崎堤防の築堤が九年の歳月をかけて完成された。この堤防は、大正時代の改修工事はあったものの、300年を経た今日までもその姿を残している。

川骨遺跡は、弘化2・3年（1845・1846）の川内川の洪水によって家屋が壊滅的な被害を受けたため、住んでいた人々が現在の峰山地区へ居住地を移したという記録が残っている。川骨遺跡の所在地周辺は、たびたび川内川の氾濫による被害を受けており、薩摩藩は弘化5年（1848）4月から高江町川内川支流の八間川の治水工事に取りかかった。江之口橋はこの工事の一環で、嘉永2年（1849）8月、肥後の名石工・岩永三五郎によって架設された。岩永三五郎はこの架設を最後に肥後に帰ったと伝えられている。薩摩川内市内で三五郎が手がけた橋のうち現存しているのは江之口橋のみであり、貴重な文化財である。

西之城遺跡はシラス台地上に位置する遺跡で、隣接する東之城遺跡と共に中世山城であったと伝えられる場所である。昭和62年（1987）に行われた中世城館跡調査によると、高江町東ノ城、西ノ城に所在する高江城（別名：城山城）は、城自体は消滅しているものの土塁が残存している、として縄張り図（略測）を作成している。

第3節 周辺遺跡

旧石器時代

薩摩川内市には、本県で最初に旧石器時代の尖頭器が発見された楠元町馬立遺跡、ナイフ形石器・細石器が出土した成岡遺跡、剥片尖頭器・ナイフ形石器・細石刃が出土した上野城遺跡がある。成岡遺跡、西ノ平遺跡から出土した石器は、長崎県島原半島の石器と極めて類似しており、直接あるいは密接な交流のあったことを示している。

縄文時代

薩摩川内市の縄文時代の遺跡は、発掘が行われたものが少なく、実態は不明である点が多い。の中でも、1987年に発掘調査が行われた麦之浦貝塚は、市来式土器や鎌崎式土器、北久根山式土器などが出土した縄文時代後期を代表する遺跡である。上野城遺跡でも市来式土器が出土し、川内平野における縄文時代の様相が徐々にわかってきてている。縄文時代晩期の遺跡としては計志加里遺

跡が挙げられる。黒川式土器や晩期の壺形土器が出土している。また、川骨遺跡の川砂堆積層からも縄文時代後期の土器が出土している。

弥生時代

弥生時代になると、川内川下流域の平野部や沼沢地が新たな生産拠点として成立してくる。以前から、外川江遺跡の後期の大甕や内向花文鏡、麦之浦貝塚の後漢鏡、若宮遺跡出土の石包丁・石鎌等は知られ、この地域の重要性については指摘されていたが、楠元遺跡、京田遺跡、大島遺跡、川骨遺跡等の調査成果はその指摘や重要性を具体的に示すこととなった。

楠元遺跡では、弥生時代終末の集落跡と、それに隣接する低地に水田跡が発見されている。また、京田遺跡の下層からは、弥生時代中期後半の水田跡が発見され、黒髪式土器が出土した。この時代の南九州の水田は伝播以来、自然の沼澤地等を利用した湿田が一般的とされる。発見された水田も湿田で、地形に左右され不定型で小規模の水田跡が確認されている。これらの遺構に伴って、京田遺跡と楠元遺跡からは、木製鋤や木製鍬の農具を中心に豊富な木製品が発見されている。柄は、南九州弥生時代の伝統をそのまま継承した曲柄と膝柄である。鍬には、平鍬・三叉鍬・横鍬があり、鋤は組み合わせ式で、未製品もあることから、遺跡内で農具の生産・加工も行われていたと考えられる。また、京田遺跡では、網枠、楠元遺跡では丸木弓・容器も発見され、生産活動の一端を覗かせている。発見された種子のDNA分析の結果、熱帯ジャボニカとコムギが検出され、稲作の起源や生業を解明する手がかりを提供している。これらの弥生時代の遺跡の調査は川内地域における稲作の広がりを示すだけでなく、南九州における稲作文化の解明に繋がる重要な発見となった。大島遺跡からは水田跡は検出されていないが、石包丁が出土しており、水稻稲作を生業とする生活を営んでいたことがわかる。また、弥生時代前期～終末にかけての土器や、須玖式系土器、黒髪式系土器などが出土しており、他地域との活発な交流や川内川流域の弥生土器の型式変化を知ることのできる重要な資料である。

古墳時代

弥生時代に引き続き、楠元遺跡では古墳時代においても水田が造られる。しかし、弥生時代の自然地形利用型の水田とは異なり、灌漑施設を備えた水利管理型水田である。古墳時代の集落については調査例が少ないが、成岡遺跡では19基、麦之浦貝塚では16基の竪穴式住居が発見されている。墓制は、大島遺跡で発掘された大刀・劍・金環が副葬された土坑墓のほか、在地性の強い多様な形態が発見されている。川内川河口の船間島古墳は竪穴式石室構造の円墳、河口5km上流の御釣場古墳では石蓋土坑墓と箱式石棺墓が残されている。横岡古墳は、10基の地下式板石積石室墓群と土坑墓群がある古墳として知られており、地下式板石積石室墓から副葬品として蛇行劍が出土している。また、平成21年には天辰町で竪穴式石室をもつ天辰寺前古墳が発見され注目されている。

古代

大宝元年（701年）に大宝律令が制定され、それに伴って702年には御陵下町・国分寺町に薩摩国府が置かれ、さらに奈良時代末には薩摩国分寺が建立され、この地は薩摩国における政治・文化

の拠点となった。数回にわたる国分寺跡の発掘調査によって、寺域、伽藍配置や平安時代と鎌倉時代の再建を経た事実が判明し、大和川原寺式伽藍配置であることも明らかにされた。また、国分寺跡の北方約1kmの地点で国分寺創建時の瓦などを焼いたロストル式瓦窯の形態をもつ鶴峯窯跡が発見された。

2002年度に発掘調査が行われた京田遺跡は、薩摩國分寺跡が立地する台地に隣接する低湿地に立地している。調査では、告知札と呼ばれている木簡が県内で初めて出土した。木簡には「嘉祥三年」(西暦850年)という年紀が記され、その内容は、郡司から在地の有力者に水田の差し押さえを告知する記述であった。古代の地方行政のあり方や、土地支配を考える上で重要な発見となった。また、川骨遺跡で出土した墨書き土器も9世紀第三四半期に相当するものであると考えられ、同時代における祭祀の様相の一端を垣間見ることができる。

薩摩國分寺跡と川内川の中間に位置する大島遺跡は、越州窯系青磁や緑釉陶器、風字二面鏡、石帯が出土している。また、国分寺台地から谷を一つ挟んだ台地上に立地する計志加里遺跡では、方形周溝墓や道路が発見され、両遺跡とも薩摩國府と関係の深い遺跡であると考えられる。

そのほか、西ノ平遺跡からは、土師器や須恵器のほかに硯・墨書き土器・刻書土器・焼塙土器・帶金具などが出土しており、役所的な性格をもつ遺跡であると考えられる。鍛冶屋馬場遺跡は、10世紀頃に鍛冶を専門に行う人々が生活していた遺跡である。古代に始まった鍛冶は中世～近世にかけて引き継ぎを行われており、川内川を利用した鉄生産の場であった。

墓制としては、土師器製の蔵骨器が出土した屋形原、熔結凝灰岩を掘り込んで埋納施設をつくって須恵器の蔵骨器を埋納した越ノ巣火葬墓がある。

中世

鎌倉時代は、島津氏や渋谷氏等下向した鎌倉武士と在地領主との長く激しい争いが繰り返された争乱の時代である。それらの戦いの結果、1570年の島津氏の三州統一をもって新たな時代が到来する。戦国時代には秀吉軍が薩摩攻めの際に、猫岳をはじめとして周辺の山などに星を染き数万の大軍を配置したと言われており、猫岳や猪子岳の頂上には現在も星跡が残っている。また、上野氏の居城であった上野城跡からは、掘立柱建物跡・方形堅穴建物跡、溝跡・土坑墓・烟跡などが検出されている。また土坑の中からは木の実やオムギ・コムギ・イネが発見されており、当時の人々の食生活の一端を垣間見ることができる。

近世

藩政時代には商業が発達し、中心地の向田町は水陸交通の要衝として賑わった。川内川河口の久見崎には、船手奉行所が置かれ、藩の造船所があった。当地は朝鮮の役の際、薩軍が船出した港として有名である。この役で夫を亡くした婦人によって始められたと伝えられる盆踊り「想夫恋」は、県の無形民俗文化財に指定されている。

天明年間（1781～1788年）には、伊地知団右衛門李甫が天辰町に磁器窯を開いている。平佐焼と呼ばれるこの磁器は、県内各地に流通し隆盛を誇った。近年の調査では作業小屋や石垣、窯の形態が明らかになっている。その他に、近世・近代の鍛冶遺跡として古原遺跡、鍛冶屋馬場遺跡があ

る。このように川内川は、平佐焼や鍛冶などの生産に関わる原料の搬入と製品の搬出に積極的に利用され、古来より商工業の発展に大きな役割を担ってきた。

最後に、ここで紹介できなかった遺跡や詳細については、各遺跡の発掘調査報告書を参考にされたい。

引用参考文献

- | | |
|----------------|---|
| 鹿児島県教育委員会 | 1975 『薩摩国府跡・国分寺跡』 |
| タ | 1983 『成岡遺跡・西ノ平遺跡・上ノ原遺跡』『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』28 |
| タ | 1984 『外川江遺跡・横岡古墳』『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』30 |
| タ | 2005 『先史・古代の鹿児島(資料編)』 |
| タ | 2006 『先史・古代の鹿児島(通史編)』 |
| 鹿児島県立埋蔵文化財センター | 2002 『計志加里遺跡』『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』38 |
| タ | 2002 『鍛冶屋馬場遺跡』『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』39 |
| タ | 2003 『楠元・城下遺跡』『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』57 |
| タ | 2004 『上野城跡』『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』68 |
| タ | 2005 『大島遺跡』『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』80 |
| タ | 2005 『京田遺跡』『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』81 |
| 川内市教育委員会 | 1991 『麦之浦貝塚』 |
| タ | 1991 『御釣場古墳(2号墓)』『川内市埋蔵文化財調査報告書』1 |
| 川内郷土史編纂委員会 | 1975 『川内市史 上巻』 |

表2 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物・遺構	備考
1	川骨	薩摩川内市高江町	自然堤防	弥生～近世	弥生土器、土師器、輸入陶磁器、国産陶磁器	平成19・20年度調査 本報告
2	西之城	薩摩川内市高江町	平地	中世	土師器、陶磁器	平成20年度調査 本報告
3	上高江原	薩摩川内市高江町峯元・ 岩崎・藤花崎・はか	台地	古墳～室町	土器、内黒土師器、染付	
4	安養寺丘古墳	薩摩川内市宮里町安養寺	丘陵	古墳	土器	円墳
5	別府	薩摩川内市五代町別府		古墳～室町		
6	日吉	薩摩川内市宮里町日吉	微高地	古墳	土器、須恵器	
7	宮田	薩摩川内市宮里町宮田	微高地	古墳	土器、須恵器	
8	堀之内	薩摩川内市宮里町堀之内	微高地	古墳～室町	土器、須恵器、青磁、染付	
9	川轆	薩摩川内市宮里町	丘陵斜面	古代・近世	土師器、須恵器、陶磁器	平成20・21年度調査 本報告
10	上新田	薩摩川内市青山町	丘陵端	縄文～中世	磨製石斧、縄文土器、弥生土器、成川式土器、土師器	平成21・22年度調査
11	堀之内	薩摩川内市青山町	丘陵斜面	縄文～中世	剥片尖頭器、石皿、成川式土器、土師器、須恵器、青磁、白磁	平成21・22年度調査
12	山仁田	薩摩川内市青山町	台地	縄文～中世	縄文土器、土師器、青磁、白磁、滑石製石鍋、薩摩燒	平成21・22年度調査
13	山口	薩摩川内市都町	台地	縄文～中世	磨石、石鏟、成川式土器、青磁、白磁	平成21～23年度調査
14	湯之谷	薩摩川内市隈之城町湯之谷	丘陵	平安	土師器	
15	西ノ口	薩摩川内市隈之城町西ノ口	台地	古墳	土器	
16	上ノ原	薩摩川内市中福良町上ノ原	台地	縄文～戦国	土器、須恵器、青磁、染付	昭和55年調査
17	西ノ平	薩摩川内市中福良町西ノ平	台地	旧石器～江戸	土器、土師器、青磁、(細石刃核)	昭和55～59年調査
18	成岡	薩摩川内市中福良町成岡	台地	旧石器～江戸	土器、須恵器、青磁、(縄石刃)	昭和55～59年調査
19	立石A	薩摩川内市中福良町立石	丘陵	縄文～中世	土器、内黒土師器、青磁	
20	立石B	薩摩川内市中福良町立石	段丘	縄文～中世	土器、石鏡、黒曜石	
21	集	薩摩川内市中福良町集	台地	縄文～中世	土器、陶器、黒曜石	
22	床並	薩摩川内市青山町床並・岡峯	台地	古墳～室町	土器、陶器	
23	菌田	薩摩川内市青山町菌田・菌内	丘陵	古墳～室町	土器、青磁、陶器	
24	都原	薩摩川内市都町都原・山口	台地	縄文(早)～近世	藏骨器埋納遺構、溝状遺構、土器、須恵器、陶磁器	平成12・14年調査
25	霜月田	薩摩川内市都町霜月田	台地	旧石器～近世	堅穴建物跡、掘立柱建物跡、土器、土師器、陶磁器	平成12・15年調査
26	四反畠	薩摩川内市尾白江町四反畠	微高地	平安～室町	内黒土師器、青磁、染付	
27	瀬戸山	薩摩川内市木場茶屋町瀬戸山	台地	古墳～近世	土師器、須恵器、青磁	
28	蕨追	薩摩川内市木場茶屋町蕨追	台地	古墳～室町	土器、陶器	
29	木場原A	薩摩川内市木場茶屋町木場原	台地	縄文～平安	石鏡、土器、内黒土師器	
30	木場原B	薩摩川内市木場茶屋町木場原	台地	縄文～室町	石鏡、土器、内黒土師器	
31	麦	薩摩川内市都町麦	低地	縄文～中世		



第3図 周辺遺跡地図

川骨遺跡

第3章 川骨遺跡の調査

第1節 調査の経過(日誌抄)

調査の経過は日誌抄をもって記載する。日単位では煩雑になるため月単位にまとめた。

〈事前調査・一部本調査 平成19年度：平成19年9月3日～10月26日〉

9月

調査施設設営準備及び環境整備を行う。遺跡の層序、遺構・遺物の広がりを確認するための先行トレンチを1～25の番号をつけて設定し、掘り下げを開始。近世の石組み遺構や井戸、時期不明のピットを検出。I a層から中近世の遺物（青磁・薩摩焼・染付・古銭など）が、V層から成川式土器が出土。1～25トレンチの土層断面図作成、写真撮影、平板実測、遺物の取り上げを行う。

10月

26トレンチ、南北ロングトレンチ（C～1～5区）、東西ロングトレンチ（F・E～5区）を設定し掘り下げを行う。ピット、石組み遺構、溝状遺構を検出。それぞれ写真撮影・平板実測を行う。14トレンチで木製品と思われる遺物が出土したため、写真撮影、平板実測を行った後、発泡ウレタンを使用して取り上げる。トレンチにおける調査を終了し、C～G～1～5区の全面調査を行う。ピット、井戸跡を検出。薩摩焼や染付、肥前陶器、管状土錐などが出土。26日、機材の撤収・遺跡の保護作業を行い、平成19年度の調査を終了する。

〈本調査 平成20年度：平成20年5月7日～平成21年3月19日〉

5月

高速道路建設の為の基礎工事を行うため、橋脚建設予定部分（E～G～2～5区、G～I～6～12区）から発掘調査を開始する。重機による表土剥ぎの後、山鋤、ジョレン、ねじり鎌等で掘り下げを行う。G～3区にて布基礎検出。I～7区にて石組み検出。それぞれ写真撮影、実測を行う。I a層からは、薩摩焼や青磁、染付、管状土錐などが出土。F～5区の下層確認トレンチIV b層から16世紀初頭～半頃に相当する完形の蓮弁文の青磁碗が出土。G・H～9区V層上面にて掘立柱建物跡の柱跡になると思われるピットを13基検出。G～9区、H～9区V層上面にてそれぞれ土器集中遺構1・2を検出。

職場体験学習で松元中学校から生徒2名来跡、発掘作業を行う。

6月

調査区内湧水の為、排水溝を設置する。また土のうによる調査区の補強、ポンプによる排水を行う。日差しが強くなってきたため、遮光ネットの準備をする。G・H～6・7区の調査が終了したため、重機による埋め戻し。H～17・18区に30・31トレンチを設定。H～11区にてかまど状遺構検出。G・H～14区にて溝状遺構、石列の検出。F～8区V層上面にて土器集中遺構3を検出。H・I～22～24区において溝状遺構検出。G～22・23区にて溝状遺構検出。G～18区自然堤防際のI a層にて墨書き土器出土。G～19区にて溝状遺構検出。薩摩川内市教育委員会前氏・藤井氏来跡。

7月

C～E－23～25区I a層掘り下げ。C～E－25区V層上面にて溝状遺構検出、写真撮影、実測を行ったのち、下層確認トレンチを設定し掘り下げ、土層断面図、V層上面でのコンタ図作成。F・G－6～9区I a～IV b層掘り下げ、V層上面を検出しコンタ図を作成。土器集中1・2の写真撮影、実測の後取り上げる。H－9・10区で検出されたピットの半裁を行い、埋土状況を確認する。E・F－18・19区のV層上面コンタ図を作成。F・G－6・7区、G－15・16区の調査が終了したため、重機による埋め戻しを行う。H－10・11区においてピットを検出、半裁、断面図作成、写真撮影、全掘、記録を行う。C～E－6～9区I a層、IV a層、IV b層掘り下げ。C～E－1～9区I a層、IV a層、IV b層掘り下げ。C－6・7区V層上面にて土器集中遺構4を検出。写真撮影、実測、取り上げを行う。E－12～16区I a層にて石列検出。C～E－12・13区、D・E－14・15区、重機による表土剥ぎ。F・G－12～15区I a層掘り下げ。F・G－14区I a層にて石列検出、写真撮影、平板実測。C～F－6・7区V層上面コンタ図を作成。ラ・サール学園永山修一教諭、黎明館東氏来跡。

8月

作業員の定期健康診断を実施。D・E－13区I a層にて石垣検出。写真撮影、平板実測を行う。C－6区V層上面で土器集中遺構4を検出。写真撮影、実測、取り上げを行う。F・G－12～16区、I a層、III層、IV層、V層掘り下げ。C・D－8・9区IV c層～V層にて土器集中遺構5を検出。D・E－7区、H－10区V層上面で土器集中遺構6・7を検出。写真撮影後、平板実測を行い取り上げる。F・G－12・13区V層上面で溝状遺構を検出、写真撮影後掘り下げ、実測を行う。C・E－12～15区、I a層、III層掘り下げ。H・I－10・11区調査終了、埋め戻し。D・E－9区V層にて土器集中遺構8を検出、写真撮影後遺物取り上げ。琉球大学池田榮史教授、権原考古学研究所山澤節子氏、川内歴史資料館吉本明弘氏来跡。

9月

F・G－14～16区V層にて土器集中遺構9を検出。写真撮影後実測を行い、取り上げる。低湿地部分から木片、石礫出土。木片をギネステープにより取り上げ。排水対策のため、調査が終了したD～G－1～5区に重機で貯水池を掘る。土器集中遺構5の掘り下げ、実測。

10月

C～F－12・13区、溝状遺構検出。E－13区にて鍛冶炉検出、写真撮影、実測。D・E－10区V層上面にて土器集中遺構10・11を検出。写真撮影後、実測、取り上げ。C～F－10・11区I a層～IV層掘り下げ。D～F－9～11区I a層～IV層掘り下げ。D・E－14・15区掘り下げ。E－6～9区、ピット掘り下げ。E－13区、鍛冶炉跡検出、写真撮影、実測。三重大学八賀晋名誉教授現地指導。現場の排水（泥水）処理に薬品（パック）を使用。

11月

調査を終了した遺跡の一部を国土交通省へ引き渡す。空中写真撮影。G－12・13区、重機による表土剥ぎ、I a層掘り下げ。D－9区にて土器集中遺構12を検出。C－9区V層上面にて土器集中遺構13を検出。写真撮影後、実測、遺物取り上げ。C～F－12～17区、C～E－19～21区、重機による表土剥ぎ、D・E－13区で水田遺構2を検出、写真撮影。鹿児島大学中村直子准教授

現地指導。

12月

D～F－6～13区遺構検出、掘り下げ。E～G－7・8区ピット掘り下げ。株式会社埋蔵文化財サポートによる土器集中遺構5の実測および調査区全体の遺構実測、コンタ図作成。鍛冶炉跡、水田遺構の科学分析サンプル採取。ラ・サール学園永山修一教諭現地指導。

1月

4地点の掘り下げ。V層上面にてピット、溝状遺構検出。遺構実測、コンタ図作成、写真撮影。

2月

B・C－14～18区、湿地部分の掘り下げ。E・F－21・22区において畝間遺構検出。植物珪酸体分析、花粉分析の為の科学分析サンプル採取。D・F－19～22区ピット掘り下げ。F－20・21区、溝状遺構掘り下げ。遺構実測、写真撮影。

3月

B・C－18区、IV層上面にて水田遺構検出。C・D－19～21区、溝状遺構検出。それぞれ写真撮影を行った後、実測。C～F－19～22区、全景及び遺構近景写真撮影。産廃処理。19日、調査終了。

第2節 発掘調査の方法と成果

川骨遺跡の調査は、道路建設用センター杭のSTA.105とSTA.107を基準に、10m間隔の区画を設定し、東から西へA・B・C・D・・・J列、北から1・2・3・・・28列と名称した。

事前調査では、設定したグリッドラインと地形を考慮して2m×5mのトレンチを合計26か所設定し、遺跡全体における遺物包含層の有無や広がりを把握した。各トレンチは、山鉤・ジョレン・ねじり鎌等で掘り下げた。その結果、弥生時代から近世にかけての遺構・遺物などが発見された。

本調査は、事前調査で判明した旧地形を1～4地点にわけて調査を進めた。川内川近くの自然堤防と思われるところを1地点、自然堤防上で包含層が残存している箇所を2地点、鉄分を含む層があり泥層が堆積している低湿地を3地点、耕作によって自然堤防の上位の包含層が削平されているところを4地点とした。

調査方法は、表土を重機によって除去し、その後山鉤・ジョレン・ねじり鎌等でIa層からIVc層を掘り下げV層を検出した。その結果、事前調査と同様に、弥生時代から近世にかけての遺構・遺物が発見された。一括遺物以外の遺物は番号を付け、出土位置、レベルを記録した。遺構は、検出状況の記録の後、埋土を除去し、写真撮影・図面作成などの記録保存を実施した。

1地点では、表土直下から中・近世の坪地業、布基礎の遺構を検出した。遺物は表土に中世の土器、青磁、白磁、染付、薩摩焼、管状土錐等が混在しており、包含層は確認できなかった。

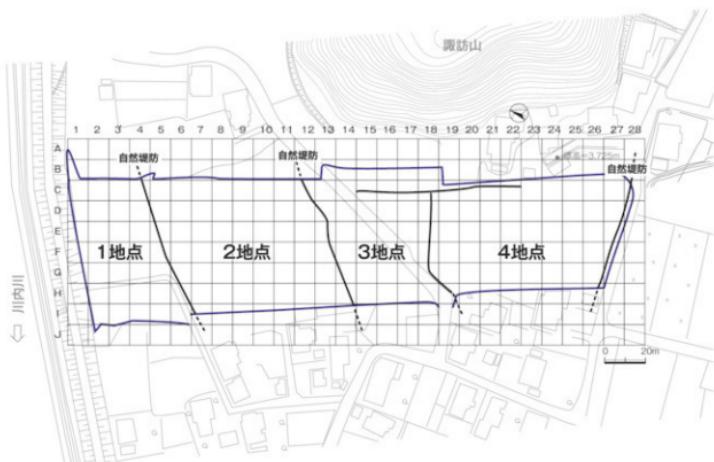
2地点では、弥生時代の土器が出土し、13か所の土器集中箇所が確認された。ここで出土した土器は弥生時代後期後半～古墳時代初頭に位置づけられる。特に土器集中遺構5では、壺、器台、大甕などが多く量に重なり合って出土した。一般的な集落や住居跡から出土する土器は甕の量が多いが、この土器集中遺構は、甕が少なく、壺が多く確認された。鹿児島大学中村直子准教授は、この状況と器台の存在や大甕の煤の付着から、大甕を煮炊きに使用し、なんらかの祭祀に使用したのではな

いかと推定している。また、土器集中遺構7は、他の土器集中遺構にはない小型の器種や高坏、免田式土器の長頸壺が出土した。

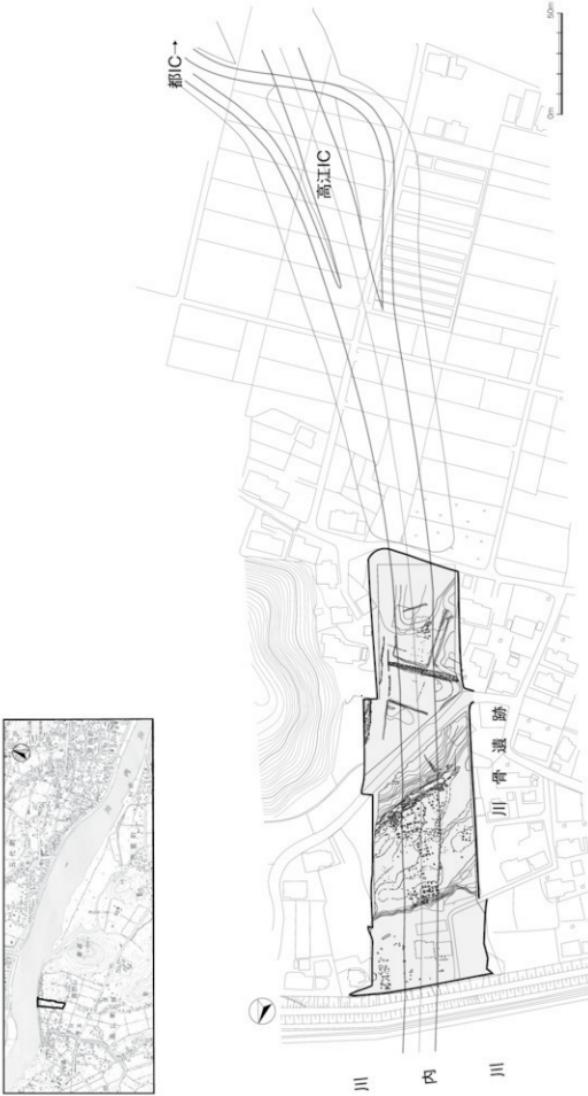
中世～近世の遺構としては、掘立柱建物跡や溝の他に近世の鍛冶炉遺構（八賀晋氏の指導による）が5基検出された。これらの鍛冶炉遺構のC_Hの年代測定では、江戸時代中期から明治時代初頭に相当するという結果が出ている。

3地点の低湿地では土器集中遺構が1か所検出され、自然木が多数出土した。その上位層には数枚の水田層を確認した。

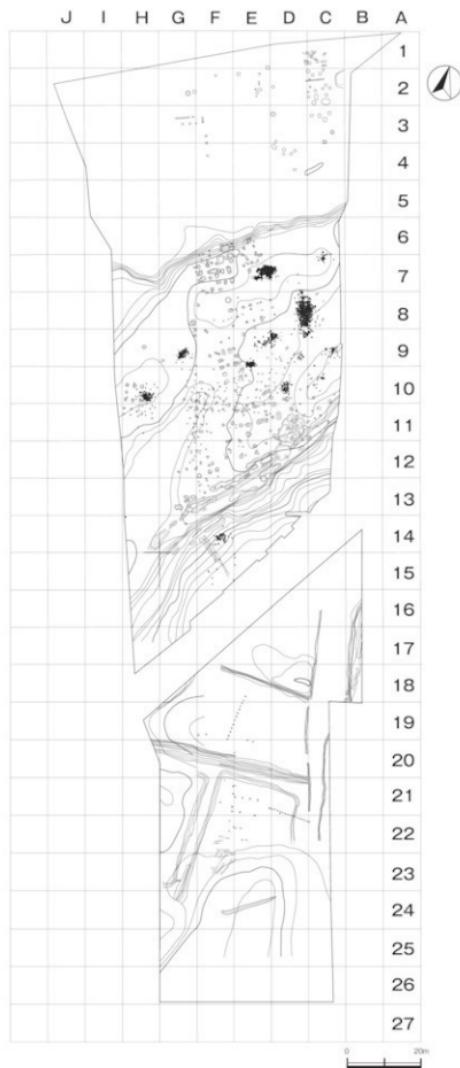
4地点では耕作等による削平があり、表土直下はV層であった。遺物はほとんど出土しなかったが、溝跡や畝間状遺構が検出された。また、墨書き土器（土師坏）が出土した。この墨書き土器には、「御前舎入分家□□□（3文字不明）神郡進出」の文字と2個の「○」印が墨書きしてあり、現地で指導したラ・サール学園高校の永山修一教諭は、これを眼を表現したものと捉え、人面墨書き土器であるとの見解を示した。



第4図 川骨遺跡周辺地形図および地点区分図



第5図 川骨遺跡路線図



第6図 川骨遺跡遺構配置図

第3節 層序

I層は耕作土であり、II層は、厚い部分で約1m堆積し、II層の下位からは弥生時代の土器や中・近世の陶磁器等が同じ層で出土した。II層は長年の川内川の氾濫等による遺物の混在がみられるものである。

III層は、3地点の低湿地のみで確認され、近代から現代の水田層で鉄分を含んでいる。

IVa層、IVb層は、縄文・弥生時代や土器等の流れ込みが確認された砂質土である。

IVb層は、川内川沿いで約60cm、遺跡中心部で約10cmの厚みがあり、堆積の差がある。

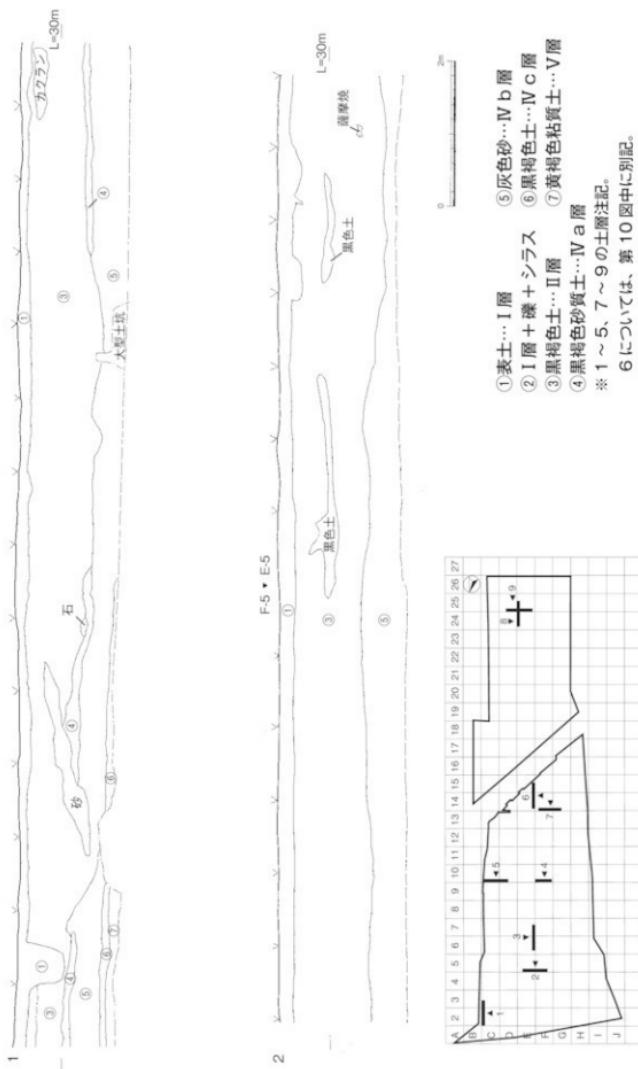
IVb層①、IVb層②は、酸化鉄分やマンガンを含む水田層である。

IVc層は黒褐色土、V層は黄褐色粘質土で、ともに弥生時代～古墳時代の包含層である。低湿地のV層は、グライ化された灰色粘土であり、弥生時代～古墳時代の土器が出土した。

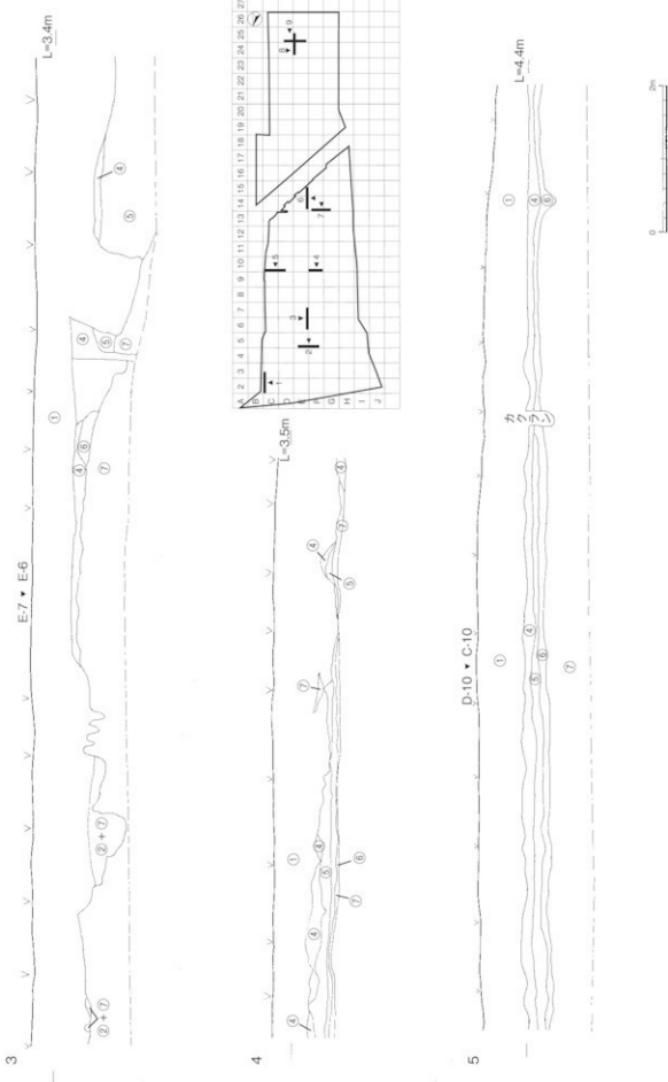
VI層は青灰色砂であり、無遺物層である。

自然堤防状（宅地・旧畑作地）			低湿地		
I層	表土	耕作土	I層	表土	耕作土、シラスの堆積
II層	黒褐色土		II層	黒褐色土	
				黄褐色土	
				明黄褐色土	酸化鉄分を含む
			水田	黄褐色土	マンガンを含む
			1	灰黄褐色土	酸化鉄分を含む
				黒褐色粘質土	
IVa層	黒褐色砂質土				
IVb層	灰色砂		IVb①層	水田	灰色粘質土
			2		灰色砂
			IVb②層	水田	灰黄色土 酸化鉄分を含む
			3		灰色シルト
IVc層	黒褐色土	弥生～古墳の包含層	IVc層		灰黄色粘質土
V層	黄褐色粘質土	タ	Va層		黒褐色粘質土
VI層	青灰色砂		Vb層		黒褐色粘質土
			VI層		灰色砂

第7図 川骨遺跡基本土層図

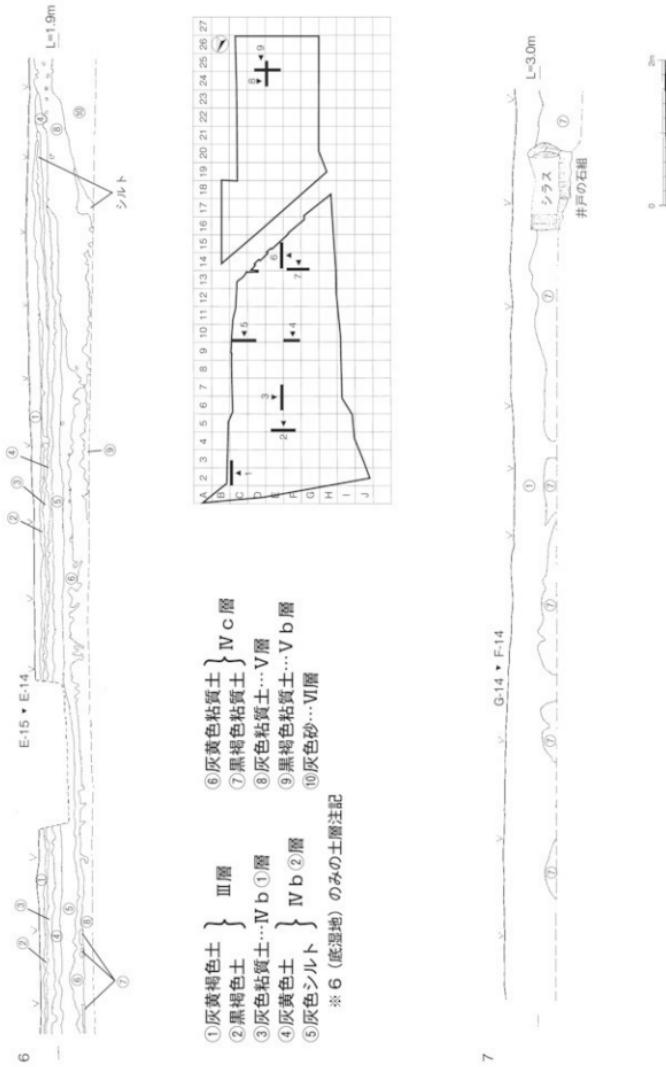


第 8 図 1 地点土層断面図

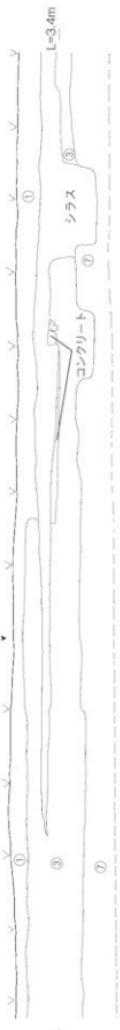


第9図 2 地点土層断面図

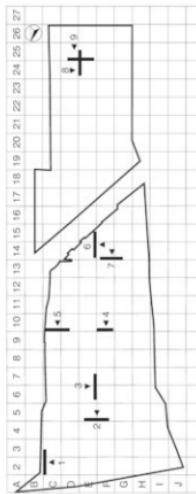
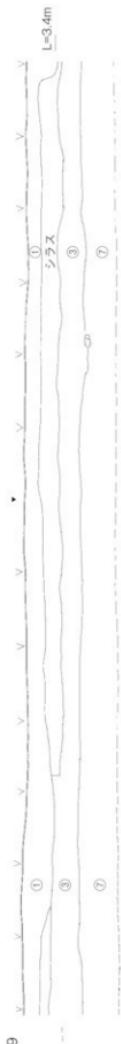
第10図 3地点土層断面図



8



9



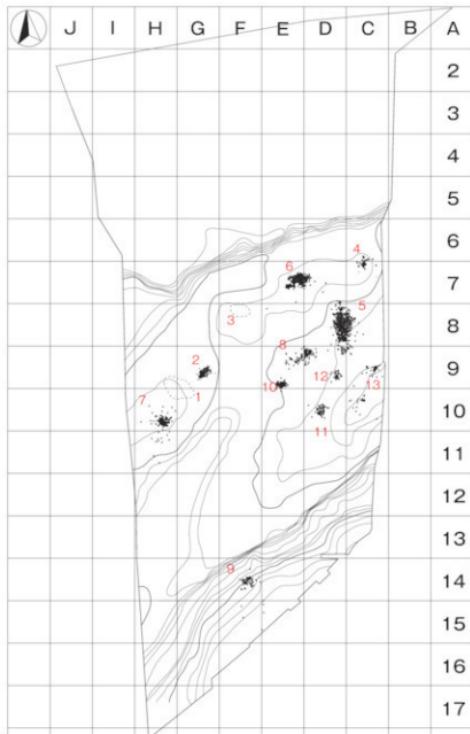
第11図 4地点土層断面図

第4節 調査の成果

1 弥生時代～古墳時代の調査

弥生時代～古墳時代にかけては、自然堤防上の2地点において12か所、低湿地において1か所、計13か所の土器集中遺構が検出された。いずれも、弥生時代後期後半～古墳時代初頭に相当すると考えられる遺構である。IVc層～V層にかけて検出されたが、いずれも掘り込みは確認されなかつた。IVc層・V層において、土器集中遺構以外からは同時期の遺物は出土しなかつた。

土器は、器種ごとに甕・大壺・壺・鉢・高杯・器台・その他に分類し、113点を図化した。以下に、土器集中遺構ごとに出土状況および出土遺物について述べる。なお、調査時は土器集中遺構13か所を土器集中A, B, C …と呼称していたが、今回報告するにあたって土器集中遺構1, 2, 3 …と呼び変えることにする。



第12図 弥生～古墳時代遺構配置図

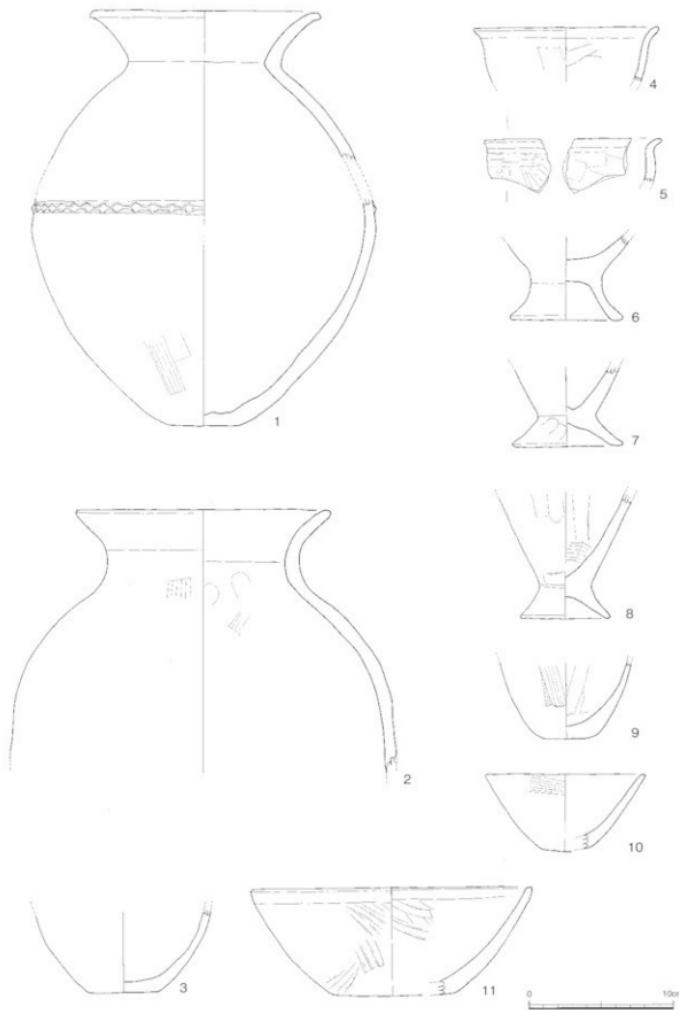
土器集中遺構 1(第 13・14 図)

H・G-9・10 区、V 層上面で検出した。約 7×6 m の範囲に小片が広がっており、中央部の空白部分を囲むように分布している。土器が摩耗しているため、川の洪水などで多少の位置移動はあったと考えられるが、土器の接合状況からおそらくほとんど元の位置を保っているといえる。

1～3 は壺である。1 は、口縁部が「く」の字に大きく外反し、平底の底部をもつ。また、丸みのある胴部に刻目をもつ三角突帯がめぐる。口唇部は平坦である。2 は口縁部の屈曲がやや緩やかな壺で、胴部はほとんど張らず、肩部からまっすぐに底部に向かうと思われる。3 はやや小型の壺の平底の底部である。4～11 は、鉢である。4 の短い口縁部は、ゆるやかに外反する。5 の口縁部は、短いが強く外反し内面にはっきりとした稜をもつ。6 の脚部は、天井部に平坦面をもち脚端部は外反する。7・8 の天井部は山形になっており、脚端部は直線的に開く。9 のやや平底の底部は垂直気



第 13 図 土器集中遺構 1 出土状況



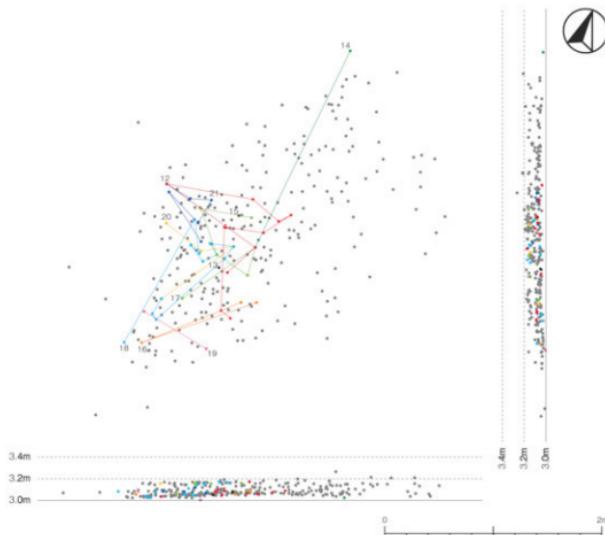
第 14 図 土器集中遺構 1 内出土遺物

味に立ち上がるが、10・11はポウル状の鉢である。10の底部はやや丸みを帯びる。11はやや広めの単位のハケメ調整がなされている。

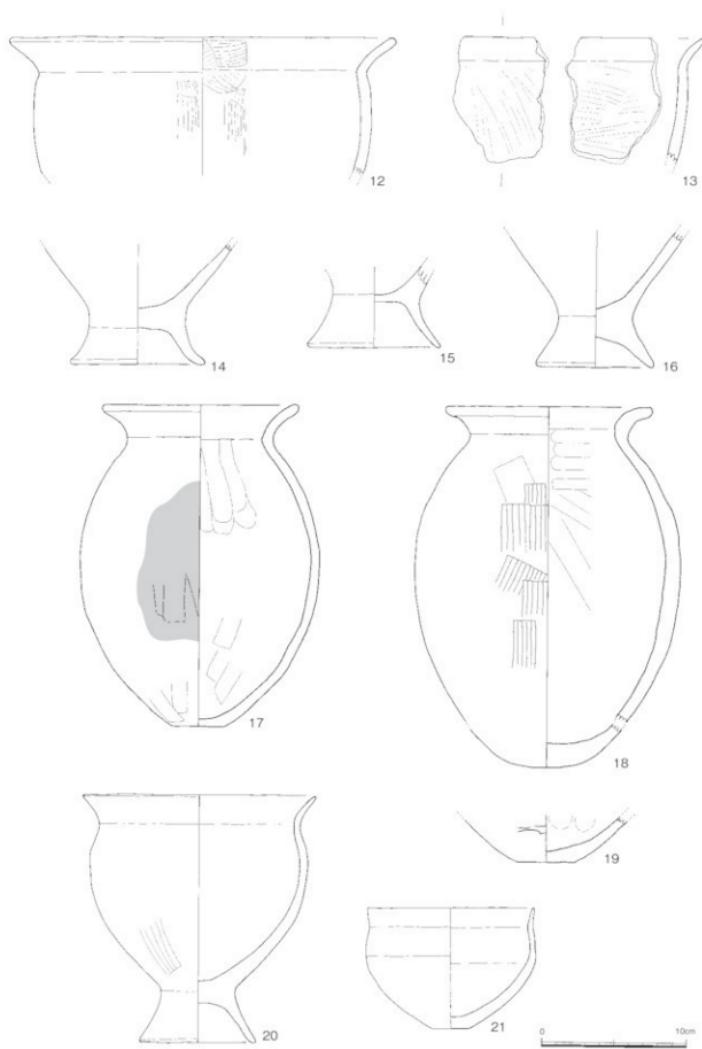
土器集中遺構 2(第 15・16 図)

G - 9 区、V 層上面で検出した。約 3×3 m の範囲に広がっている。

12・13は壺の口縁部～胴部である。12の口縁部は「く」の字に強く外反する。口唇部は平坦で、内外面ともハケメ調整の後ナデている。13は、12に比べると口縁部の屈曲が弱く、口唇部は先細りである。14～16は壺の脚部である。14は脚部内面の天井部が平坦で、脚の端部が外反する。15は、同じく天井部が平坦であるが、器壁が薄く、脚が長く立ち上がる。16の天井部は山形になつておらず、変換点が見られない。脚の端部はやや内側にむく。17～19は壺である。17は口縁部が屈曲する。底部は平底である。18はやや平底の底部をもつ。19は平底の壺である。内面は指押さえによる調整である。20は小型の壺である。内面に後來をもつややゆるやかに外反する口縁部で、胴部がやや張る。脚部の内面の天井部はやや平坦で、脚は「ハ」の字に広がる。21は鉢（小型の壺）として分類した。小さく平坦な底部からやや膨らむ胴部で、いったん内湾したあと口縁部は直線的に立ち上がる。口唇部は先細りである。



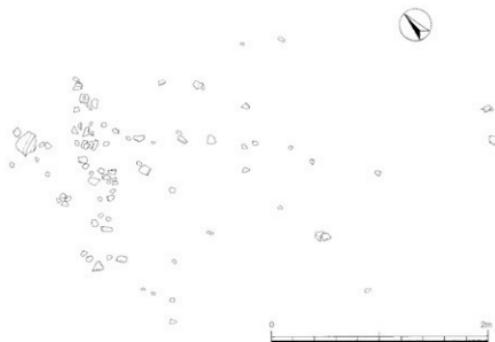
第 15 図 土器集中遺構 2 ドット図



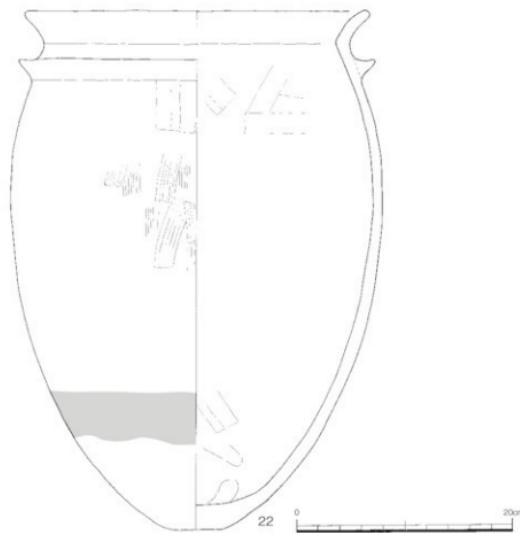
第 16 図 土器集中遺構 2 内出土遺物

土器集中遺構 3(第 17・18 図)

F - 8 区で検出した。約 2.5×3 m の範囲に広がっている。



第 17 図 土器集中遺構 3 出土状況



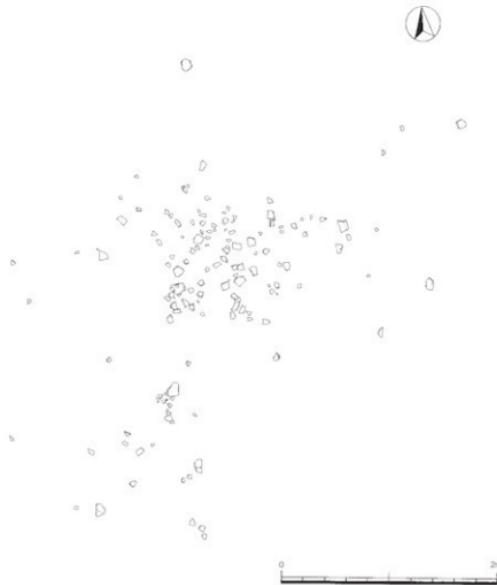
第 18 図 土器集中遺構 3 内出土遺物

出土した土器を接合・復元した結果、大甕と鉢の2点のみであることがわかった。鉢は残存状況が悪かったため、図化し得なかった。大甕は、口径31.6cmで口縁部下に上向きのやや短い鈎がつく。底部はやや平底で胴部下半に煤の付着が見られ、煮炊きに使用されたものと思われる。内外面はハケメ調整であるが、底部付近は指ナデによる調整である。

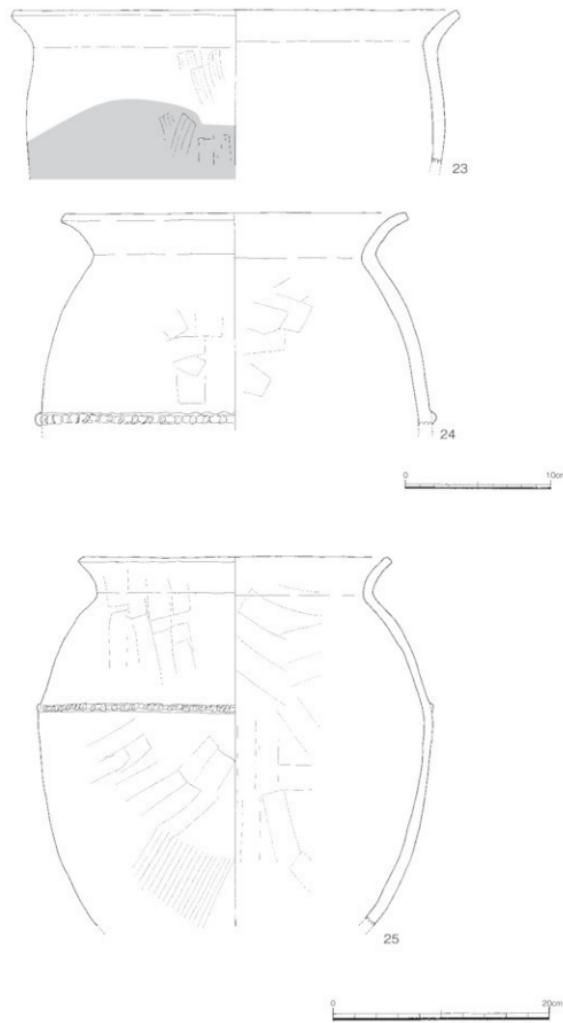
土器集中遺構4(第19～21図)

C-6・7区で検出した。約4.5×5mの範囲に広がっている。

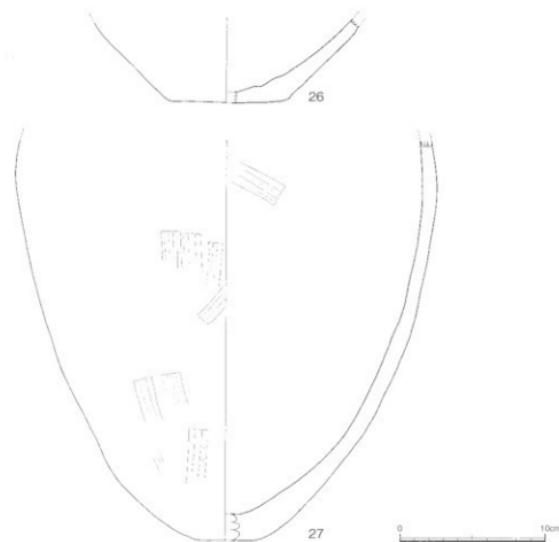
23は甕である。口縁部は「く」の字に外反し、内面の屈曲はやや強い。口唇部は平坦である。胴部はあまり張らず、外面に煤が付着している。24～27は壺である。24の口縁部は強く外反するため、内面にはっきりとした稜がみられる。胴部があまり張らない器形である。25の短い口縁部は、屈曲が24に比べてやや緩やかである。最大径がある胴部上半には一条刻目突帯がめぐる。土師甕に似た器形である。26は平底の壺である。27は壺の胴部～底部である。内外面はハケメ調整の後ナデている。底部は小さく、やや平底である。



第19図 土器集中遺構4出土状況



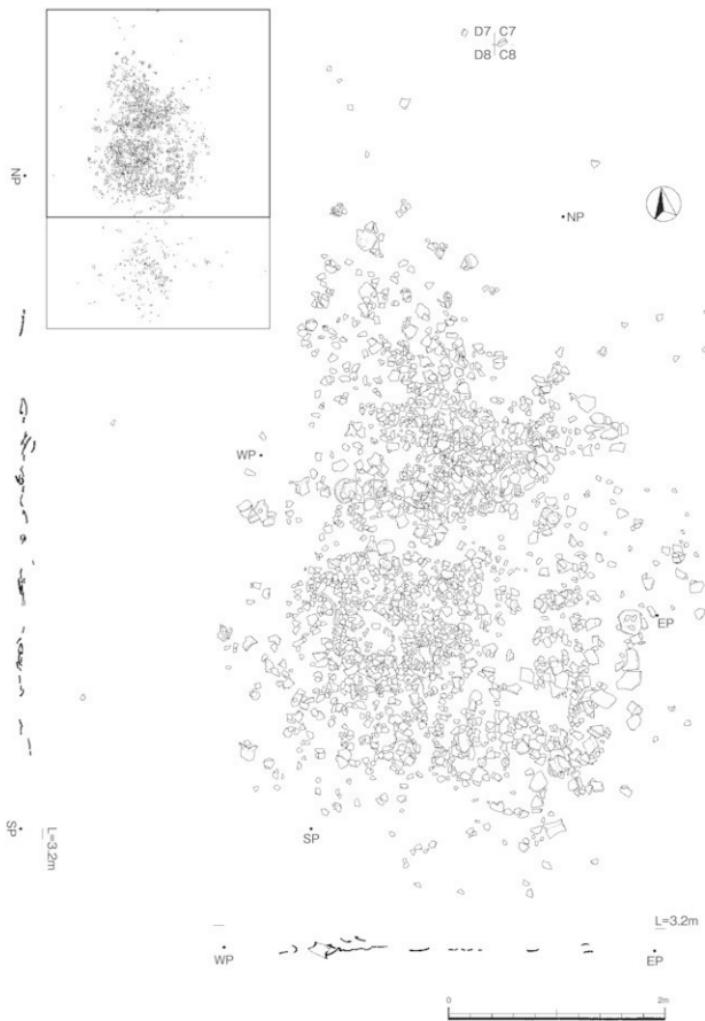
第 20 図 土器集中遺構 4 内出土遺物 1



第 21 図 土器集中遺構 4 内出土遺物 2

土器集中遺構 5(第 22 ~ 41 図)

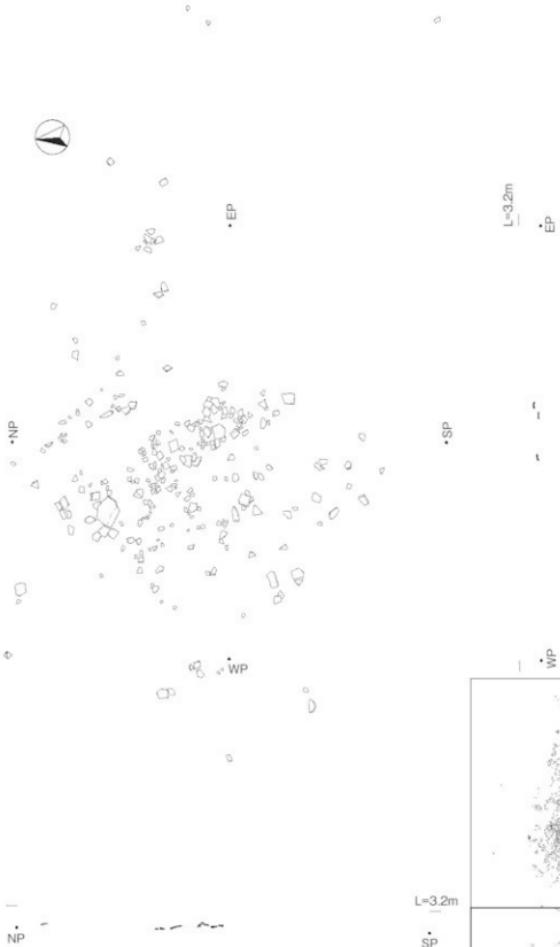
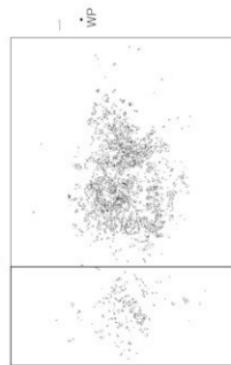
この土器集中遺構は、平成 19 年度の事前調査の 18 トレンチ内で確認されている。本調査では、C・D - 7 ~ 9 区、IV c 層 ~ V 層で検出した。約 12×6 m の広範囲にわたって多くの土器が散在していた。多量に重なって出土する北側の部分と、少量が散布する南側の部分があるが、北側から出土した土器片と南側から出土した土器片が接合したため、同じ遺構として捉えた。IV c 層から小破片が出土しはじめ、V 層上面において大きな破片が重なって出土した。器種は、甕、壺、鉢のはか大甕や器台である。他の土器集中遺構よりも大型のものが多く、甕に比べて壺の個体数が多いことが特徴である。土器の出土状況をみてみると、大甕に煮炊きをしたと思われる煤の付着があるが周囲には炭化物の出土がないこと、壺の底部の多くが正位置で他の土器片の上に乗って出土していること、それぞれの破片が大きいこと、接合して完形に近い形に復元できるものが多いこと、接合できる破片が比較的近くで出土していることなどから、出土した土器はこの土器集中遺構内で実際に使用したのではなく、別の場所で使用した土器を集めて置いた、または集めて割ったものであると考えられる。



第22図 土器集中遺構5出土状況1

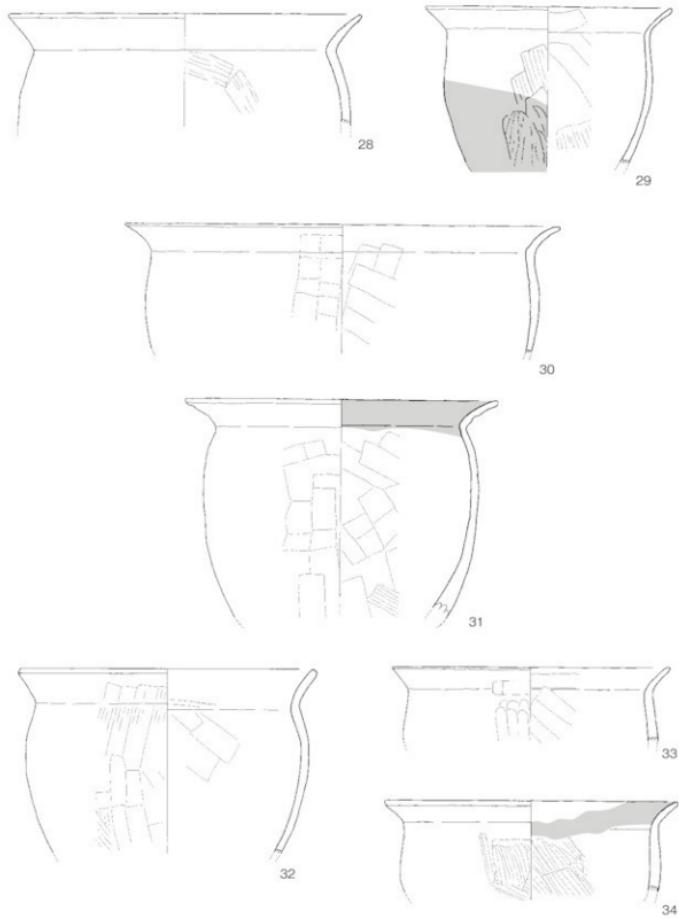
比例尺

第23図 土器集中遺構5出土状況2

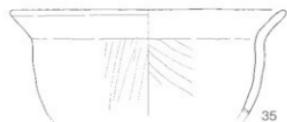




第24図 土器集中遺構 5 ドット図



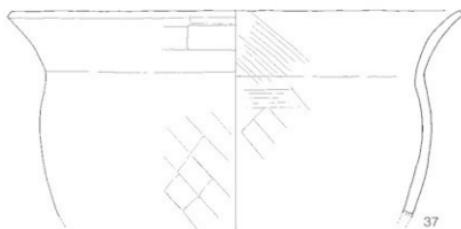
第25図 土器集中遺構5内出土遺物1



35



36



37

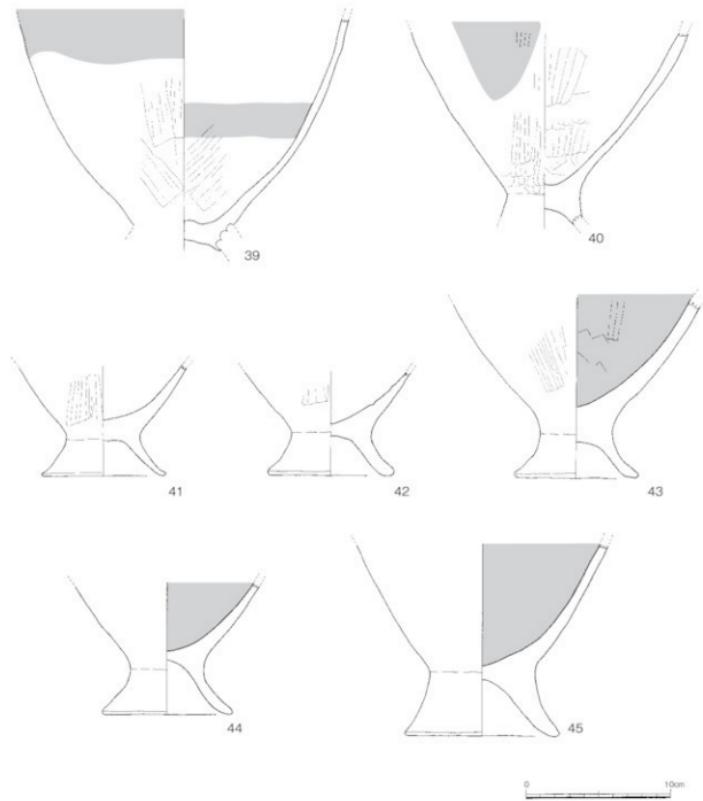


38



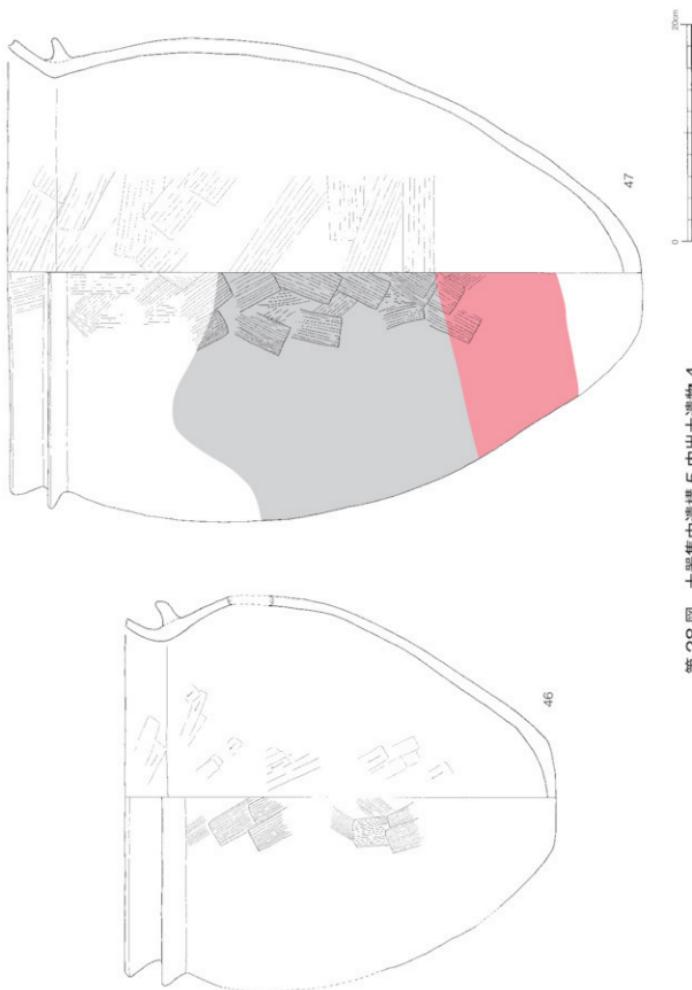
第 26 図 土器集中遺構 5 内出土遺物 2

28～45は壺である。28～31は、長い口縁部が「く」の字に外反するため、内面にはっつきりとした稜をもつ。32～35は、口縁部は外反するが、やや立ち上がり屈曲はゆるやかである。胴部の最大径が胴部上半にある。36は丸みを帯びた胴部をもつ。口縁部は短く外反し、内面には稜をもつ。外面の口唇部と胴部に煤が付着している。37・38は、長くゆるやかに外反する口縁部で、口唇部は平坦である。内外面ともハケメがはっきりと残る。作りは丁寧だが他の壺に比べて胎土が粗い。39～45は、壺の胴部から脚部である。39は36と同一個体の可能性がある。40の口縁部形態は不明だが、脚台内面天井部は丸く、脚部はやや立ち上がる「ハ」の字状になると思われる。41の天



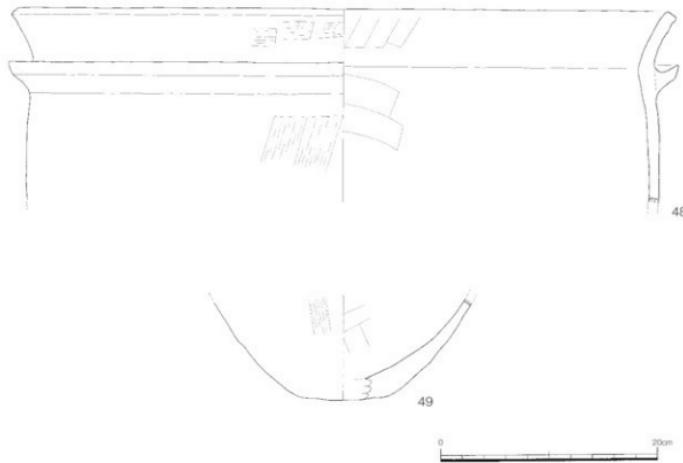
第27図 土器集中遺構5内出土遺物3

第28図 土器集中遺構5内出土遺物4



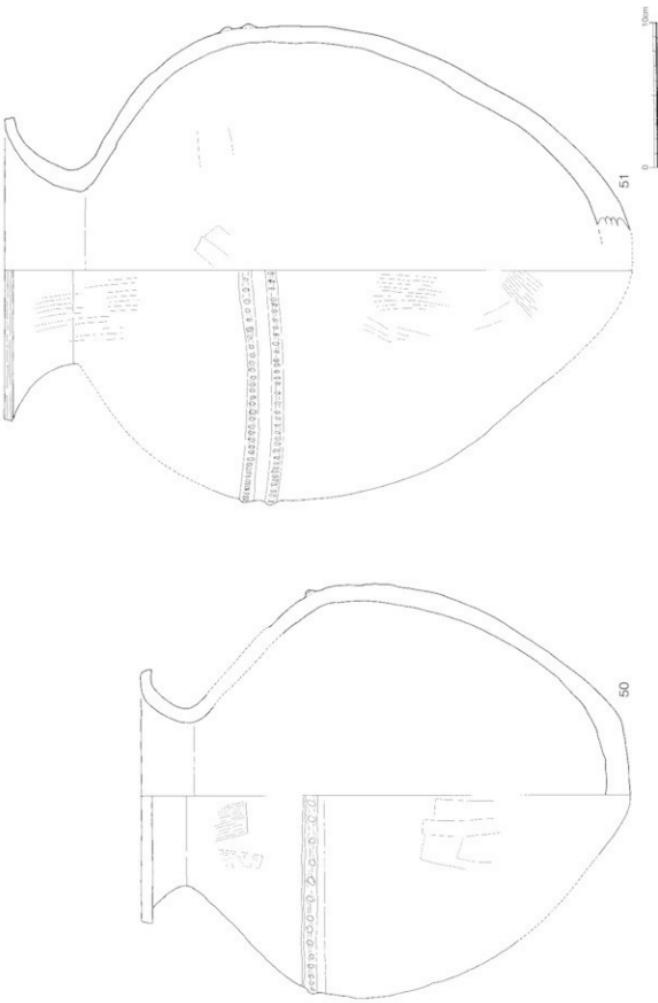
井部は平坦であるが、42・43はやや丸みを帯び、44・45は丸く山形になる。天井部が丸くなるにしたがって、脚部は高くなり、脚の開きが狭く立ち上がる。

46～49は大甕である。土器集中遺構5からは3個体出土した。46はやや小ぶりで、胴部上半に胴部の最大径がある。底部は平底である。内面の稜は緩やかで、口唇部はややくぼむ。口縁部と鈎の長さは同じぐらいである。内外面とも煤の付着は見られない。内面はハケメの後を丁寧にナデで調整している。47は土器集中遺構3から出土した大甕(22)に類似する器形であるが、22よりも大きく、器高58cmの長脛である。底部はやや丸みを帯びた平底である。口縁部は「く」の字に外反しており、内面の稜ははっきりしている。口唇部はややくぼむ。鈎は口縁部よりも短く、やや横向に付いている。内外面とも、幅の広いハケメによる調整である。胴部半ばには煤がめぐり、その下の部分は赤く焼けている。また、底部から6cm程度は被熱していないので、おそらく地面に埋めて固定した状態で煮炊きに使用したものと考えられる。この土器に付着した煤で放射性炭素年代測定を行った結果 2060 ± 30 yrBPという数値が得られた。暦年較正年代(1σ)は154～41cal BCの間に2つの範囲で示された。これは弥生時代中期頃に相当する結果である。詳細な自然科学分析の結果は第5節を参照されたい。48・49は同一個体である。48の口縁部は、口径60cmを超える。同一個体と思われる胴部破片は多数出土しているが、完形復元までには至らなかった。口縁部は長く、ゆるやかに立ち上がって外反し、内面の稜はあまりはっきりしない。口唇部は平坦である。鈎は短く上を向いて付いている。内外面とも煤の付着は見られない。49の底部はやや丸みを帯びた平底である。

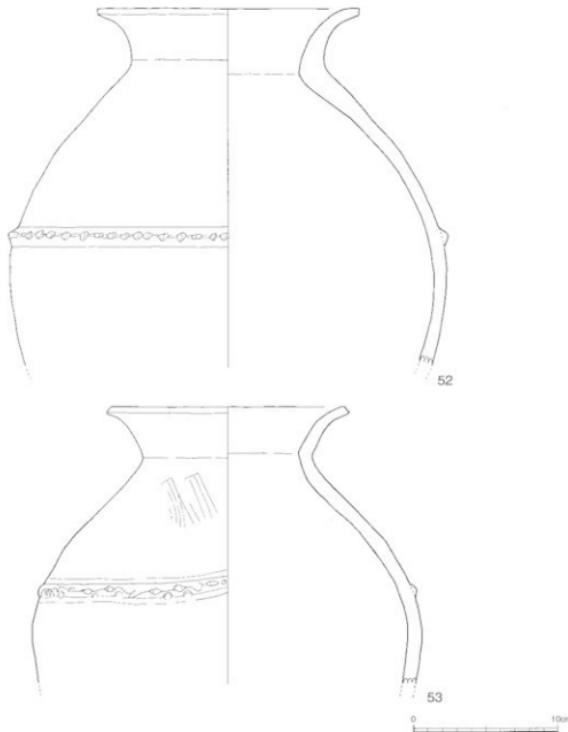


第29図 土器集中遺構5内出土遺物5

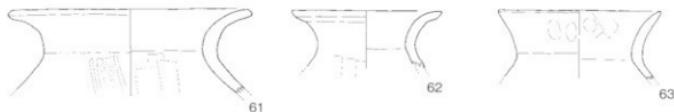
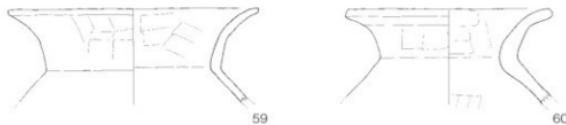
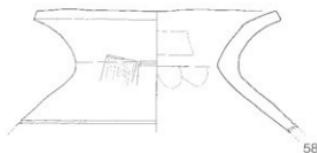
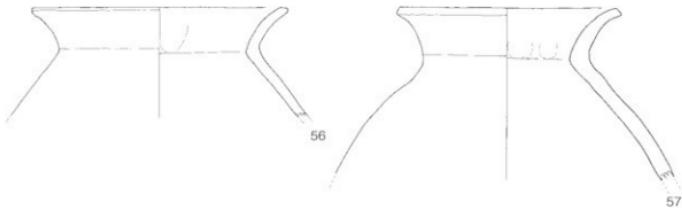
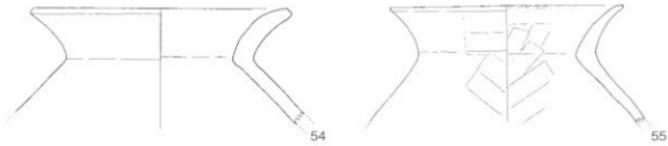
第30図 土器集中遺構5内出土遺物6



50～90は壺である。壺のなかには、一条刻目突帯をもつものが多く、他にも断面三角形や断面台形の突帯をもつもの、胴部に沈線や線刻をもつものなど、他の土器集中遺構と比べてヴァリエーションが豊富である。50は胴部が丸く張る形である。口縁部はゆるく外反し、内面の稜は強くはない。胴部上半に最大径を持ち、三角形の刻目突帯がめぐる。底部は平底である。51は、頸部の屈曲が強く、内面の稜もはっきりとしている。口縁端部の折れ曲がりは50よりも緩やかである。口唇部には凹みがある。胴部半ばに最大径を持ち、二条の断面三角形の刻目突帯が巡る。底部は丸底である。52・53は、胴部に一条三角刻目突帯が巡る壺である。頸が細く、口縁部は緩やかに外反する。口唇部は平坦である。内面にははっきりとした稜をもつ。54～63は壺の口縁部である。54～57は、口縁部が「く」の字に外反する。58～63は、口縁部が頸部から一度立ち上がった後、外反する形のものである。頸部からの立ち上がりが緩やかなもの、急で内面にははっきりとした稜を

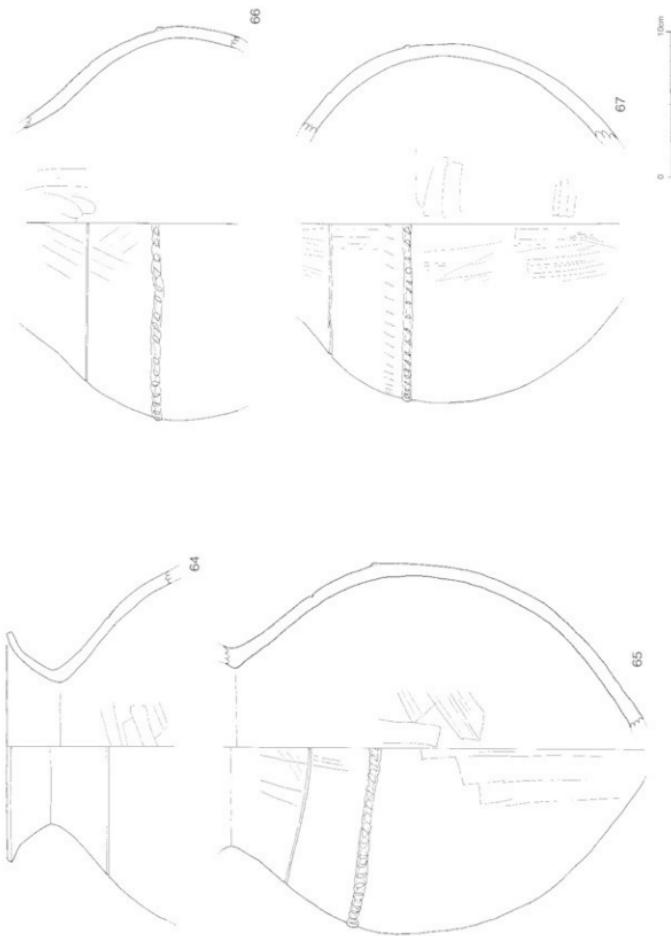


第31図 土器集中遺構5内出土遺物7

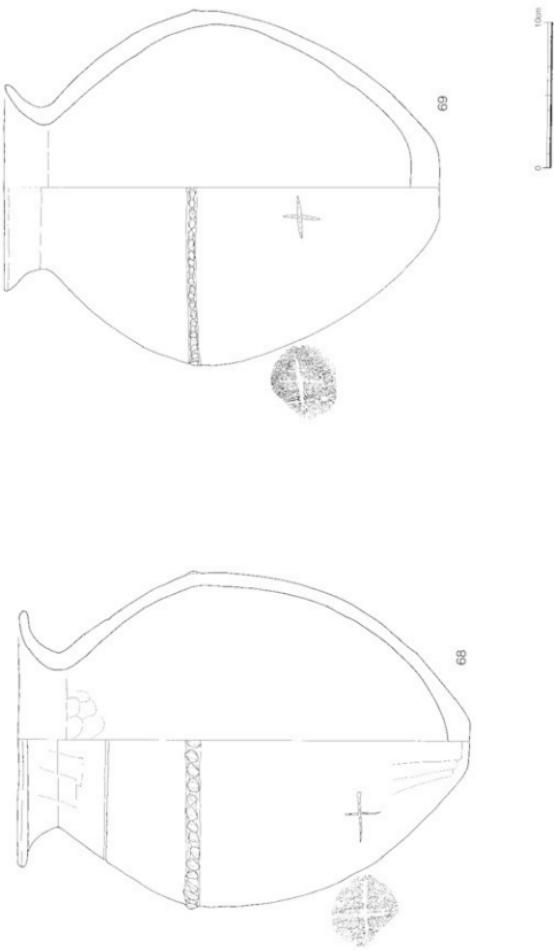


第32図 土器集中遺構5内出土遺物8

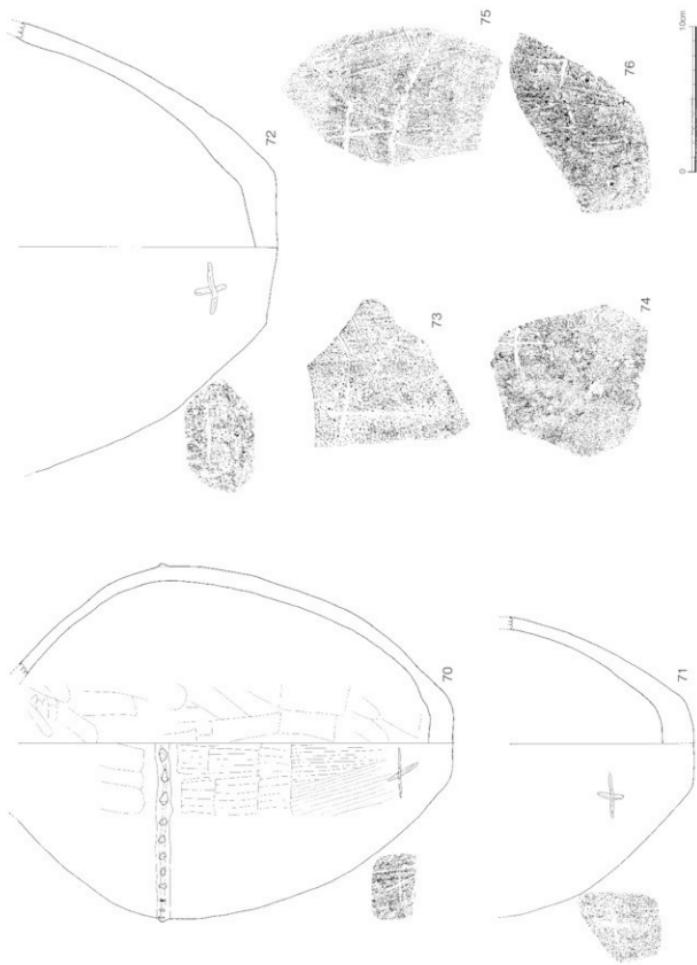
第33図 土器集中遺構5内出土遺物9



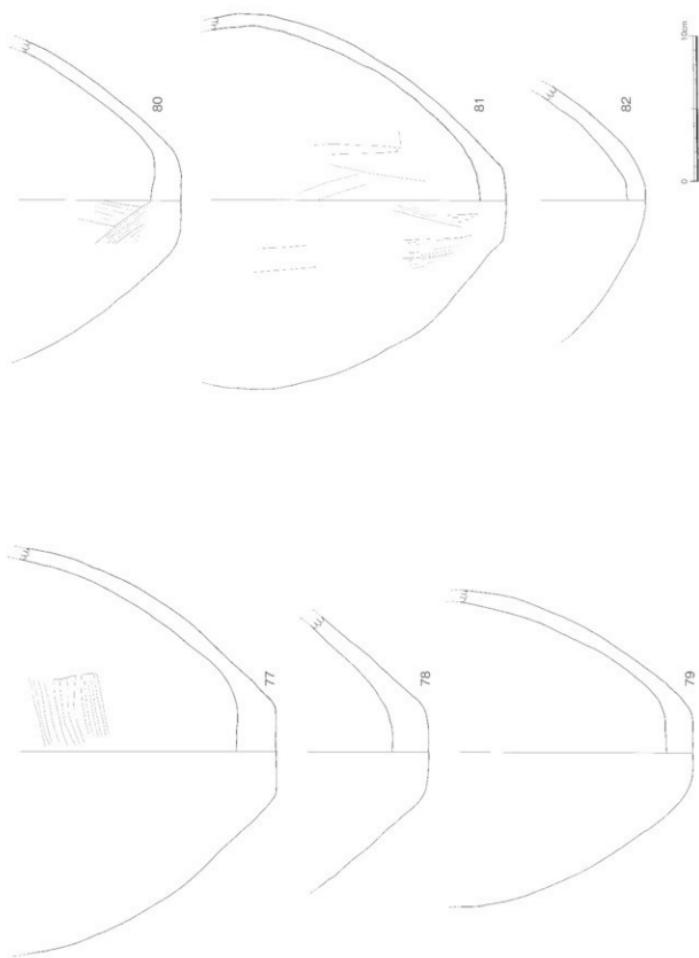
第34圖 土器集中遺構5內出土遺物10



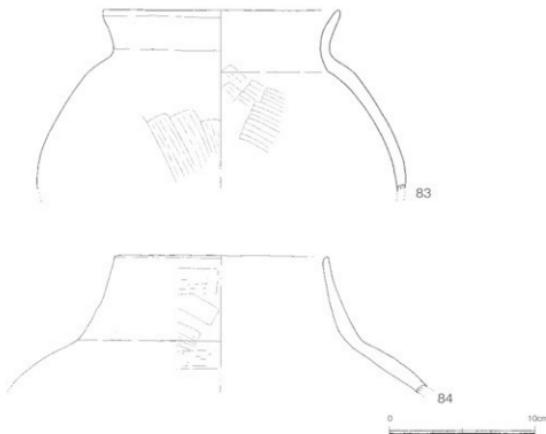
第35圖 土器集中遺構5內出土遺物 11



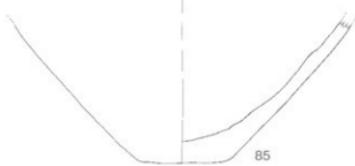
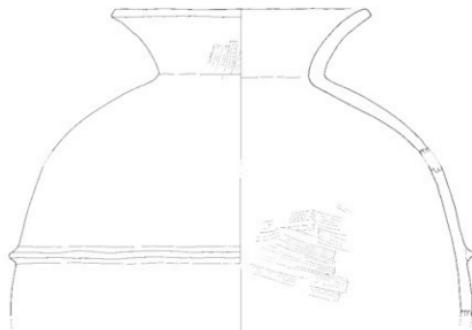
第36圖 土器集中遺構5內出土遺物 12



もつものがある。58は、頸部下に一条の沈線がめぐる。64～67は、頸部下に一条の沈線を巡らし、胴部に断面三角形刻目突帯をめぐらす壺である。64の口縁部は大きく外反するが、端部付近でさらに外に折れ曲がる。頸部内面の稜は強い。65の底部は小さい平底または丸底になると思われる。67は、突帯に刻目をつけた際の工具の痕が突帯上部にもついている。68・69は、胴部下半に「十」の線刻をもつ壺である。68は口縁部下に一条の沈線が巡り、胴部には断面三角形刻目突帯が巡る。「十」は焼成後線刻である。口縁部は大きくゆるく外反し、内面の稜は弱い。胴部はあまり張らず、底部は小さい平底である。69は68に比べて口縁部が短く、胴部は丸みを帯びて張る。底部は平底である。70～72は、胴部下半に「十」の線刻をもつ壺である。いずれも底部はやや平底である。70の胴部には、一条の断面三角形刻目突帯が巡る。73～76は、「十」の線刻がついた土器片である。土器片の厚みなどから、壺の底部付近の破片であると思われる。いずれも焼成後に線刻を施してある。77～82は、壺の底部である。平坦なもの（77）、底部の立ち上がりがやや丸みを帯びるが平底のもの（78～81）、丸底のもの（82）に分けられる。83・84は壺の口縁部～胴部である。83はほぼ直立する口縁部で胴部に丸みがある。土師壺に似た器形である。84は肩部からすばまる形で口縁部が直立する。外面はミガキ調整である。内面は摩耗・剥離が激しい。85は胴部に一条の台形突帯をもつ壺である。「く」の字の強く外反する口縁部で、肩部が張る。口唇部は平坦である。同一個体と思われる底部は平底である。86は4条の断面三角形突帯をもつ壺の胴部である。87是一条刻目突帯が胴部にめぐる壺である。底部は平底で、外面の底部付近はハケメが残る。88～90は壺の胴部である。88は刻目突帯が一条半めぐると思われる。89・90は、断面三角形の突帯がめぐる。両方とも内外面は丁寧に工具でナデである。

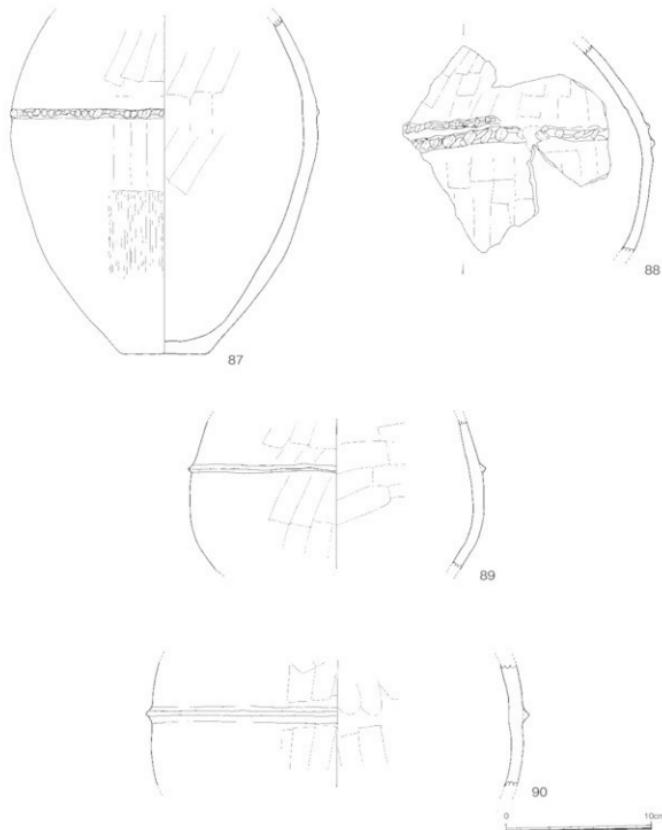


第37図 土器集中遺構5内出土遺物13



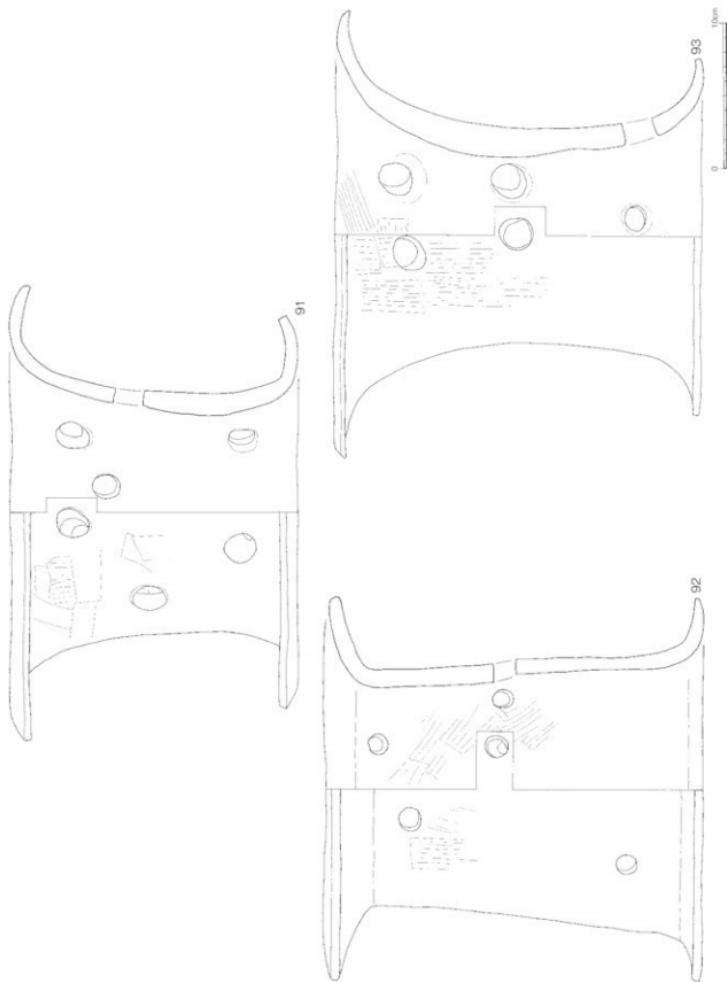
第38図 土器集中遺構5内出土遺物14

91～93は器台である。接合・復元できたものは3個体であるが、残りの破片から他にも数個体の器台があったと考えられる。表面の摩耗が激しく、ハケメ調整の方向は内外面とも胴部半ばから上下方向、外側に向けて調整している。91・93は、上段・中段・下段それぞれに5つずつ透かし孔がある。91は底部、口縁部ともに大きく外反する。92は、上段・下段が6つ、中段には5つの透かし孔がある。91・93は口縁部・底部が波打っているが、成型時あるいは焼成時にひずんだものであると思われる。

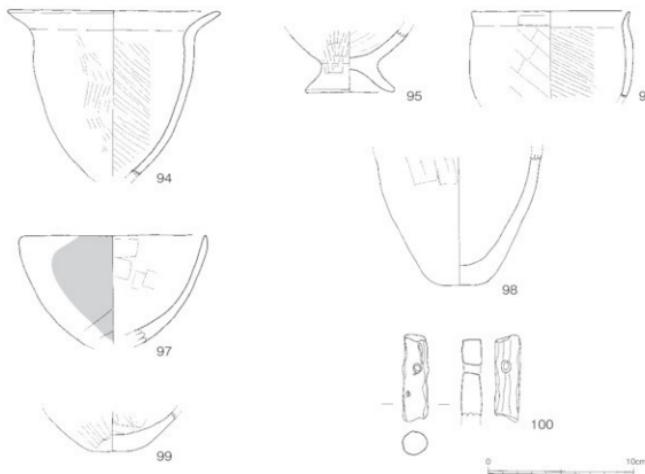


第39図 土器集中遺構5内出土遺物15

第40圖 土器集中遺構5內出土遺物 16



94・95は小型の壺である。94は口縁部が大きく外反するが、内面の稜はあまり強くはない。95は短く「ハ」の字に開く脚部である。天井部内面は丸く山形になる。96～99は鉢である。96は口縁部が短く、頸部からほぼ直立する形である。内面はハケメ調整である。97はボウル形になると思われる鉢である。98は平底の底部からまっすぐ立ち上がる形である。99の底部はやや丸みを帯びた平底である。小型の壺である可能性もある。100は双孔棒状土錘であると思われるが片側は欠損している。土器集中遺構内から出土したが土器に比べて胎土が緻密であり、古代に同じような土錘がよく見られることから、時期が異なるものである可能性も考えられる。



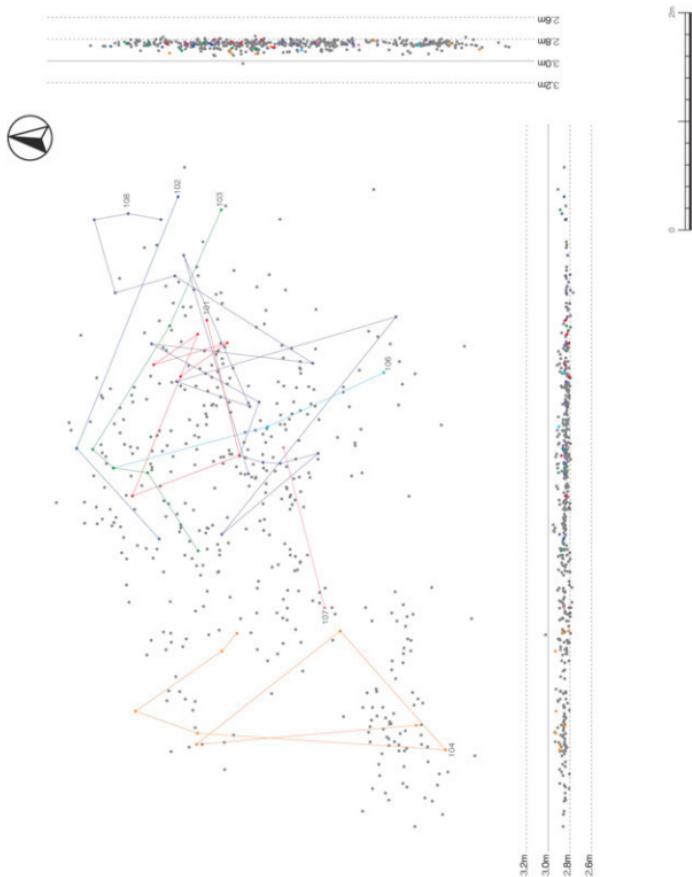
第41図 土器集中遺構5内出土遺物17

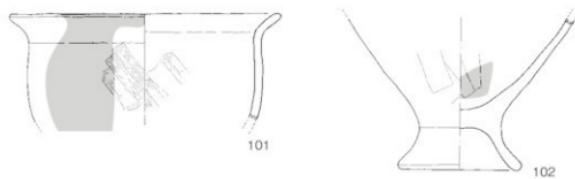
土器集中遺構6(第42・43図)

D・E・7区、V層上面で検出した。約 6×4 mの範囲に小片が広がっている。

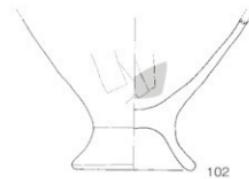
101は壺の口縁部～胴部である。「く」の字に外反する口縁部は内面に稜をもつ。口縁端部はやや丸みを帯びる。102～106は壺の脚部である。103は脚台内面の天井部が平坦で、端部は外反する。104の脚台内面の天井部は丸く、端部は「ハ」の字状に開く。105は鉢の脚部である。先細りの端部は「ハ」の字状に外反し、天井部はやや平坦である。106の脚台内面は104と同様であるが、端部はやや外反する。107は壺の口縁部である。頸部から直線的に立ち上がる口縁部はやや外反する。108は壺の胴部～底部である。底部はやや平坦である。

第42図 土器集中遺構6 ドット図





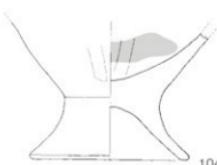
101



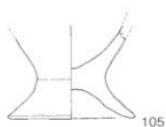
102



103



104



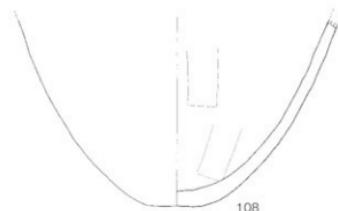
105



106



107



108



第43図 土器集中遺構6内出土遺物

第44図 土器集中遺構7ドット図

土器集中遺構 7(第 44 ~ 46 図)

H - 10 区, IV c 層～V 層上面で検出した。小型の土器や高坏, 免田式長頸壺の出土など, 他の土器集中遺構とは異なる器種がいくつか出土した。

109 は, 壺の胴部～底部である。平坦な底部から立ち上がる胴部はあまり張らない。110 は小型の壺の口縁部～胴部である。「く」の字状に外反する口縁部は屈曲が強く内面に稜をもつ。111・112 は小型の壺の胴部～脚部である。脚台内面の天井部は丸く, 端部は外反する。113 は, 免田式の長頸壺である。外面の重弧文は摩耗が激しいが, 胴部上半に 22 条の沈線と半弧を描く。底部は小さい平底である。114・115 は高坏の脚部である。114 は脚部下半に 4 つの孔がある。脚部端部は外反し, 接地面が大きい。116 は小型の鉢の脚部である。低く短い脚部は外反し, 内面天井部はやや平坦である。117 は小型の壺あるいは鉢の脚部である。充実脚台に近い細長い形で, 脚台内面の空間は低く小さい。外面は指ナデによる調整である。118 は器台である。全体的に器壁が分厚く, 重量もある。粘土紐を輪積みにして製作している様子が内面の観察からわかる。内面は指押さえによる調整であるが, 口縁部付近はミガキによる調整である。胴部のふくらみ部分は, 粘土を貼り付けている。底部の一部が剥落しており, 布目痕が看取できる。布目の上に置いて胴部を積み上げ, 後で脚部を貼り付けたと思われる。外面はミガキによる調整である。

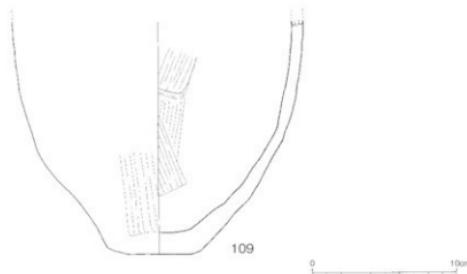
土器集中遺構 8(第 47・48 図)

D・E - 9 区, V 層上面で検出した。約 5 × 8 m の範囲に小片が広がっている。

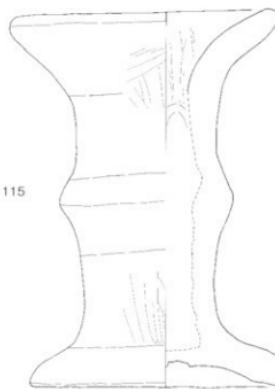
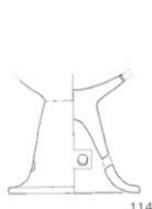
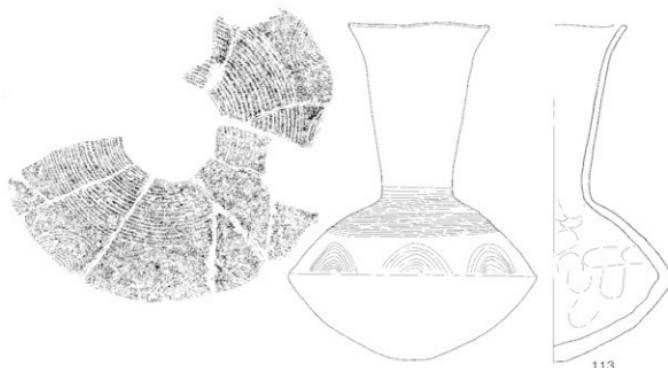
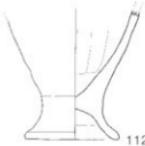
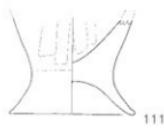
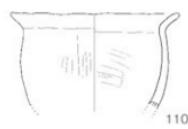
119～121 は壺の口縁部～胴部である。119 の口縁部は大きく外反し, 内面の稜は強い。120 は 119 に比べるとやや緩やかな立ち上がりをする口縁部であるが, 内面にはやや稜がある。胴部は丸みを帯びる。122・123 は壺の胴部～脚部である。122 の天井部内面は丸く山形で, 端部は「ハ」の字状に外反するが端部は反り返らない。123 の天井部には突起が見られる。脚部は外反する。124 は, 壺の底部である。平底で内面は指押さえによる調整である。

土器集中遺構 9(第 49・50 図)

E・F - 14 区の低湿地で検出した。低湿地部分は, 北から南に向かって傾斜しており, この傾斜

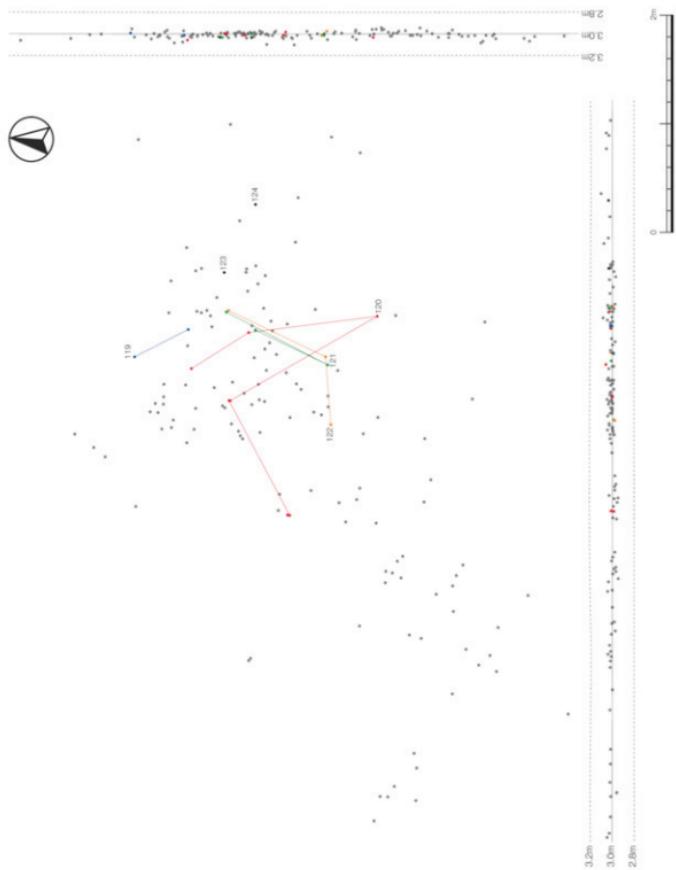


第 45 図 土器集中遺構 7 内出土遺物 1



第46図 土器集中遺構7内出土遺物2

第47図 土器集中遺構8 ドット図



に沿って土器が出土したことから、これらの土器は低湿地部分に廃棄されたものではないかと考えることができる。出土した土器を接合・復元したところ、甕1個体、壺1個体になった。低湿地の土層と同様、これらの土器の胎土も灰色化(グライ化)している。

125は甕である。口縁部は「く」の字状に外反するが稜はやや弱い。口唇部は平坦である。脚部内面の天井部は平坦である。126は、平底の壺の底部である。

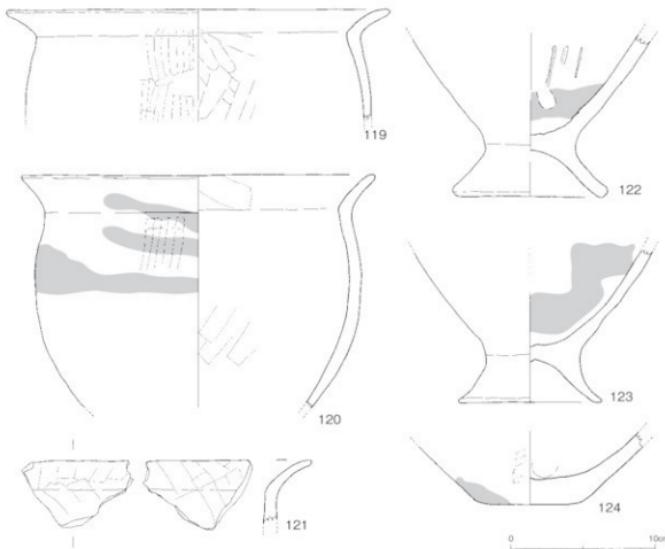
土器集中遺構 10(第 51・52 図)

E - 9・10 区、V 層上面で検出した。約 3×3 m の範囲に広がっている。

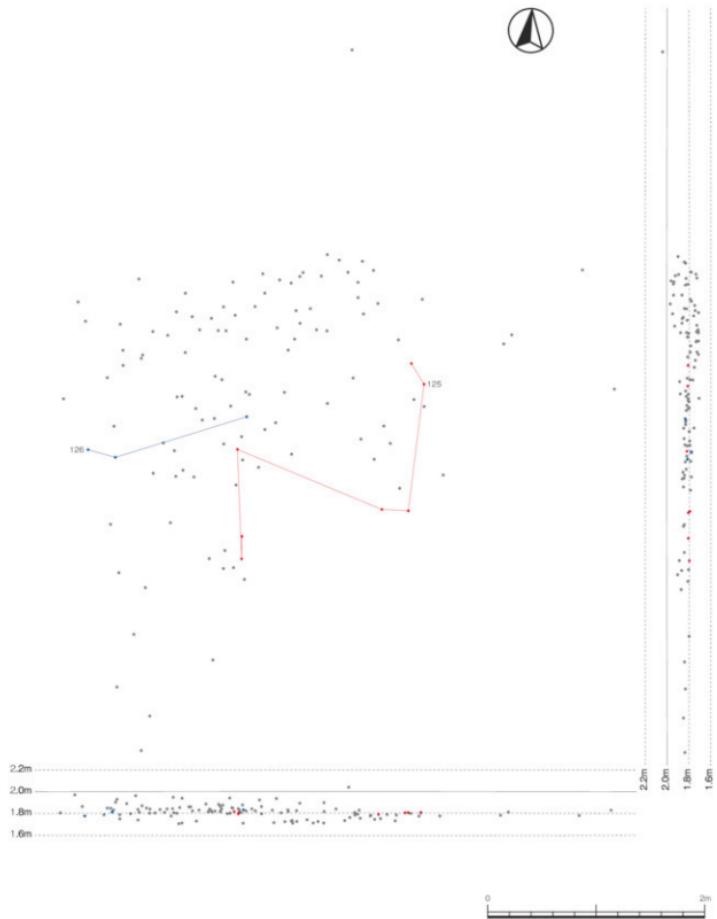
127は甕の胴部～脚部である。脚部内面天井部は平坦で、脚部は外反する。129は壺である。内面に稜は持つが、屈曲はきつくなく、ゆるやかに外反する。内面は指ナデによる調整である。底部は平坦でやや小さい。128は壺の底部である。平坦で小さめの底部から立ち上がった後、さらに外側に開きながら立ち上がる。130は壺あるいは鉢の胴部～底部である。

土器集中遺構 11(第 53・54 図)

D - 10 区、V 層上面で検出した。約 3×3 m の範囲に小片が広がっている。接合・復元できた個体は 2 個体である。



第 48 図 土器集中遺構 8 内出土遺物



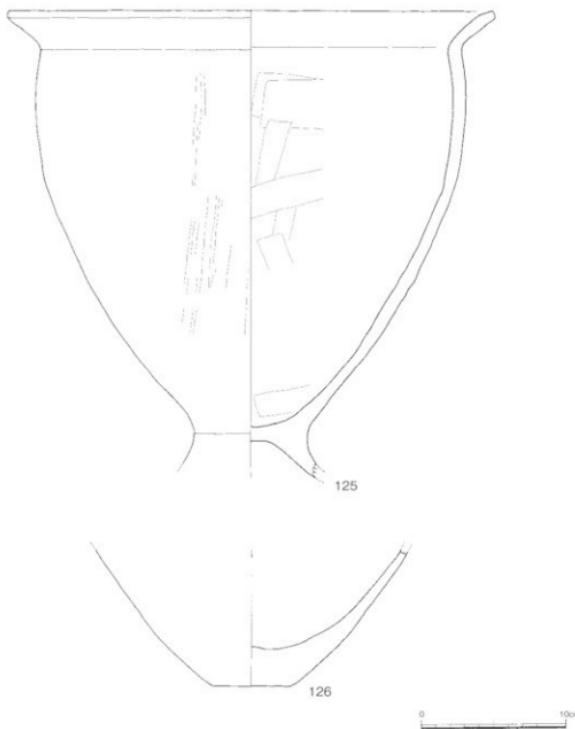
第49図 土器集中遺構9ドット図

131は壺の口縁部である。緩やかに立ち上がり、内面の稜は弱い。132は壺の脚部である。割れているため、脚部内面天井部の形状は不明である。脚部はやや外反する。

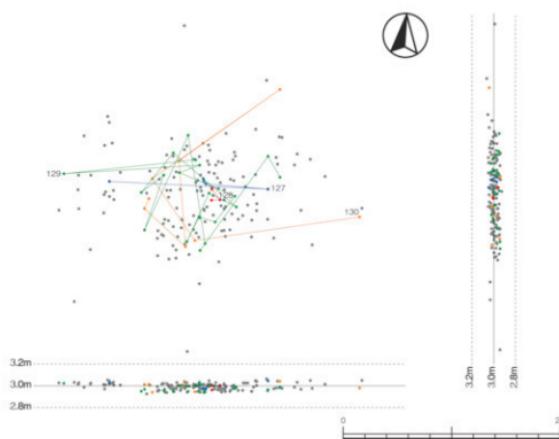
土器集中遺構 12(第 55・56 図)

D-9 区、V層上面で検出した。約 2×3 m の範囲に出土した破片は 40 個と少ない。その中で、2 個体が接合・復元できた。

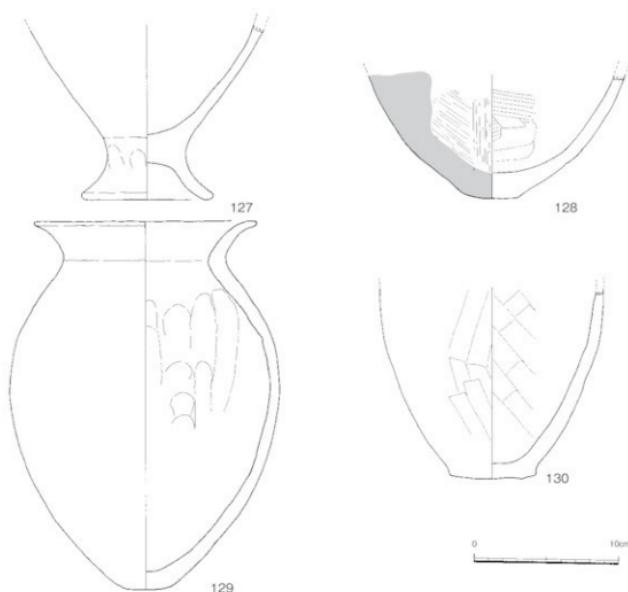
133は小型の壺の口縁部である。短く緩やかに外反する口縁部からあまり張らない胴部へと続く。口縁部外面には煤の付着が見られる。134は壺の脚部である。脚部内面天井部は平坦で、脚部は外反する。



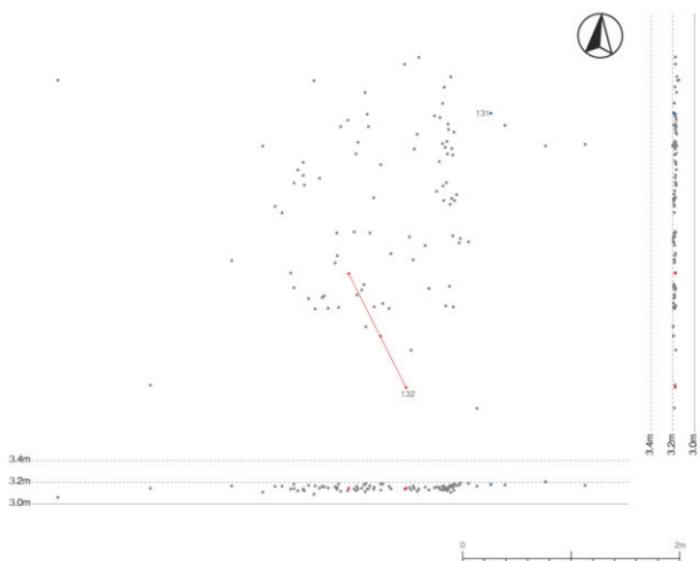
第 50 図 土器集中遺構 9 内出土遺物



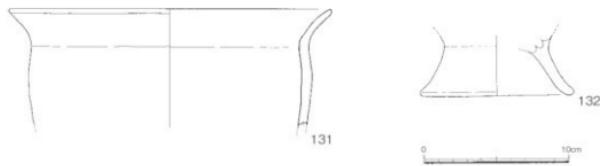
第51図 土器集中遺構10 ドット図



第52図 土器集中遺構10 内出土遺物



第 53 図 土器集中遺構 11 ドット図

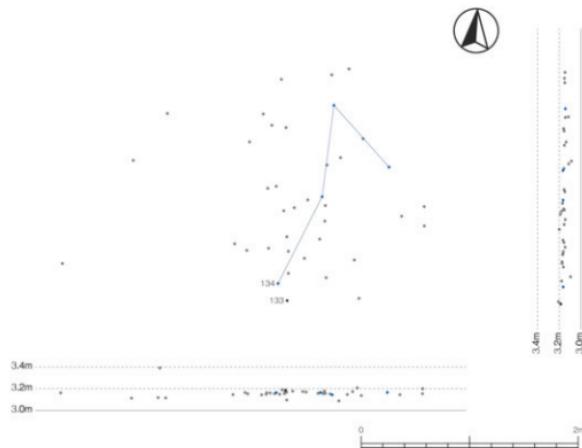


第 54 図 土器集中遺構 11 内出土遺物

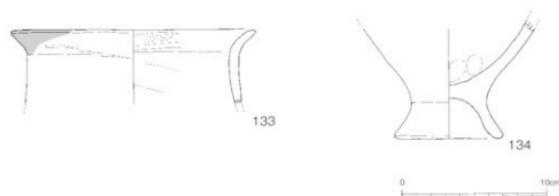
土器集中遺構 13(第 57・58 図)

C - 9 区, V 層上面で検出した。

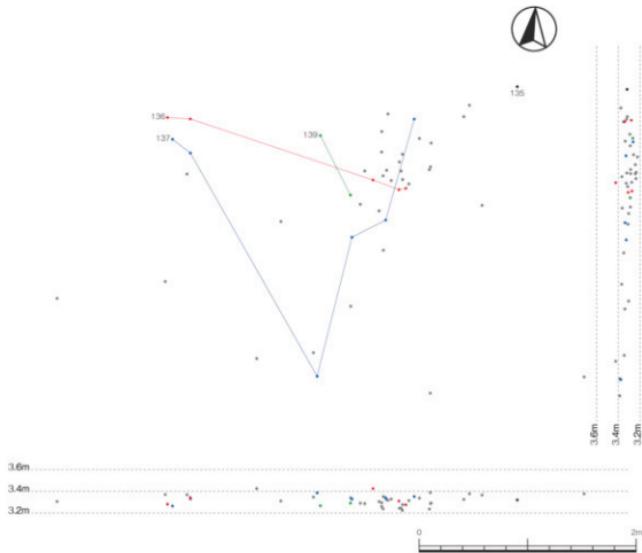
135 は、壺または鉢の脚部である。「ハ」の字にやや外反し、天井部は平坦である。136 は壺の口縁部である。大きく外反し、内面の稜がはっきりする。137 はやや平底の壺の底部である。138・139 は鉢の底部である。138 はやや上げ底の底部から外反しながら立ち上がる形、139 は平坦な底部から直線的に立ち上がる形である。



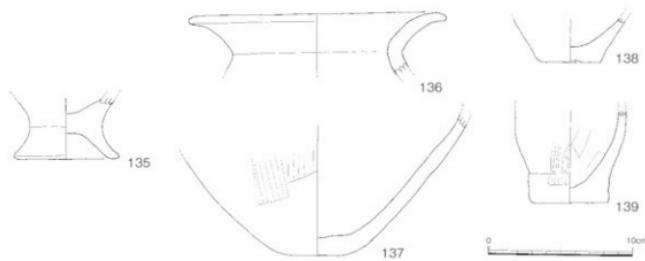
第 55 図 土器集中遺構 12 ドット図



第 56 図 土器集中遺構 12 内出土遺物



第 57 図 土器集中遺構 13 ドット図



第 58 図 土器集中遺構 13 内出土遺物

土器集中遺構観察表

博団 番号	遺構名	掲載 番号	注記 番号	器種	部位	色調		胎土			法量(cm)		調整		備考			
						内面	外面	石英	長石	角閃石	雲母	口径	底径	器高	内面	外面		
第 14 回	土器集中遺構 1	1	78.56, 15.01, 94.66, 252.4, 8240, 243.7, 66.63, 369.2, 49.75, 281.4, 9	壺	口縁部～ 底部	にぶい 橙	にぶい 黄橙	○				15.8	4.8	19.0	ナデ	ハケメ 後ナデ		
		2	126.1 18.13 8104. 103	壺	口縁部～ 胴部	明褐	明褐	○				17.2	—	—	ハケメ 後ナデ・ 指押さえ	ハケメ 後ナデ		
		3	3241 67.16 1.19	壺	胴部～ 底部	にぶい 橙	にぶい 黄	○		○	—	4.8	—	工具ナデ	工具ナデ			
		4	57.11, 282.2 80	鉢	口縁部～ 胴部	にぶい 黄	にぶい 黄					12.8	—	—	工具ナデ	工具ナデ		
		5	267	鉢	口縁部～ 胴部	にぶい 黄	にぶい 黄					—	—	—	ナデ	ハケメ 後ナデ		
		6	71.76	鉢	脚部～ 脚部	橙	橙	○				—	7.8	—	ナデ	ナデ		
		7	90	鉢	脚部～ 脚部	褐灰	にぶい 橙	○				—	7.7	—	—	指ナデ		
		8	38.65, 62	鉢	脚部～ 脚部	にぶい 黄	にぶい 黄					—	6.0	—	ハケメ 後ナデ	工具ナデ		
		9	281	鉢	脚部～ 底部	にぶい 黄	灰					—	4.2	—	工具ナデ	ハケメ 後ナデ		
		10	281	鉢	口縁部～ 底部	明黄褐	橙	○				11.0	3.2	5.3	ナデ	工具ナデ		
		11	177.1 77.14 5.109 323.1 58.15 2	鉢	口縁部～ 底部	にぶい 黄	にぶい 黄			○	19.4	8.6	7.4	ハケメ	ハケメ			
第 16 回	土器集中遺構 2	12	23.157, 83.131, 42.143.2 44.39.13 9.149	壺	口縁部～ 胴部	浅黄橙	浅黄橙	○				26.0	—	—	ハケメ 後ナデ	ハケメ 後ナデ		
		13	118	壺	口縁部～ 胴部	橙	にぶい 黄					—	—	—	ハケメ	ハケメ 後ナデ		
		14	191.239	壺	脚部～ 脚部	明黄褐	明黄褐		○	—	9.0	—	ナデ	ナデ				
		15	135	壺	脚部～ 脚部	にぶい 橙	にぶい 橙	○		—	9.2	—	ナデ	ナデ				
		16	35.109.1 01	壺	脚部～ 脚部	にぶい 黄	にぶい 黄			—	8.0	—	—	—	砂粒多			
		17	233.223, 239.206, 288.136	壺	口縁部～ 底部	にぶい 黄	にぶい 黄				13.6	3.5	22.0	工具・ 指ナデ	工具ナデ			
		18	70.289.2 31.224.2 73.272.2 32.126.2 32.126.1 25.50	壺	口縁部～ 底部	浅黄	橙	○			14.0	3.0	24.7	工具・ 指ナデ	ハケメ 後ナデ			
		19	48.106	壺	脚部～ 底部	にぶい 黄	にぶい 黄				—	4.0	—	ケズリ後 指ナデ	ケズリ後 指ナデ	火山灰 赤山灰		
		20	289.231, 213.205	壺	口縁部～ 脚部	にぶい 黄	にぶい 黄	○			16.0	8.0	17.0	ハケメ 後ナデ	ハケメ 後ナデ			
		21	157.62.1 55.15.15 9.130	壺	口縁部～ 底部	にぶい 黄	にぶい 黄	○			11.4	2.4	8.3	ナデ	ナデ	小形壺・ 鉢		
第 18 回	土器集中遺構 3	22	67.71.66 68.11.6 98.35.34 53.43.0 110.849 46.53.4 7.48.16 9.12.20 70.50.4	大壺	口縁部～ 底部	橙	明赤褐	○	○		31.6	5.0	47.6	ナデ	ハケメ			

土器集中遺構観察表

博物館番号	遺構名	掲載番号	注記番号	器種	部位	色調		胎土			法量(cm)		調整		備考		
						内面	外面	石英	長石	角閃石	雲母	口径	底径	器高	内面	外面	
第20回	土器集中遺構4	23	36,503, 77,99,51, 114,19, 114,20	甕	口縁部～ 胴部	にぶい 橙	にぶい 橙					30.8	—	—	ナデ	工具ナデ	
		24	59,126,1 24,125,1 02,137,5 8,103	壺	口縁部～ 胴部	にぶい 橙	浅黄橙	○	○			23.4	—	—	工具ナデ	工具ナデ	砂粒多
		25	79,109,12 9,68,71,12 0,69,45, 11,64,25 14,113,1 15,123	甕	口縁部～ 胴部	橙	浅黄	○	○			28.0	—	—	工具ナデ	工具ナデ	砂粒多
		26	94	壺	底部	浅黄	にぶい 黄橙					—	8.0	—	—	ナデ	火山灰 赤粒多
		27	53,152,23, 4,97,23 128,34,10 54,68,122, 19,87,78, 12,47,77,6 4,142,153	甕	胴部～ 底部	橙	明黄褐					—	4.0	—	—	—	
		28	1320	甕	口縁部～ 胴部	にぶい 黄橙	橙	○	○			24.2	—	—	ハケメ 後ナデ	工具ナデ	
第21回	土器集中遺構4	29	1367	甕	口縁部～ 胴部	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	○				17.0	—	—	ハケメ 後ナデ	工具ナデ	
		30	910,409	甕	口縁部～ 胴部	明黄褐	明黄褐					40.0	—	—	工具ナデ	工具ナデ	火山灰 赤粒多
		31	1299	甕	口縁部～ 胴部	明黄褐	明黄褐	○				30.0	—	—	工具ナデ		
		32	1299	甕	口縁部～ 胴部	浅黄	明黄褐					21.4	—	—	工具ナデ	ハケメ 後ナデ	
		33	1261,13 65,136	甕	口縁部～ 胴部	橙	橙	○				19.0	—	—	工具ナデ	ナデ	
		34	1378	甕	口縁部～ 胴部	にぶい 黄橙	橙					20.0	—	—	ハケメ 後ナデ	ハケメ 後ナデ	
第25回	土器集中遺構4	35	1300,13 06	甕	口縁部～ 胴部	橙	橙					19.0	—	—	ハケメ 後ナデ	ハケメ 後ナデ	火山灰 赤粒多
		36	18,1315 1318	甕	口縁部～ 胴部	橙	橙	○				27.4	—	—	工具ナデ	工具ナデ	火山灰 赤粒多
		37	129,12 49,1329 101,21 318	甕	口縁部～ 胴部	橙	橙	○	○			31.0	—	—	ハケメ	ハケメ	砂粒多
		38	1287,12 65	甕	口縁部～ 胴部	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	○	○			31.6	—	—	工具ナデ	ハケメ 後ナデ	砂粒多
		39	1329,13 18,1315 1320,1612	甕	胴部	にぶい 橙	橙	○	○			—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	
		40	1297	甕	胴部	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	○				—	—	—	ハケメ 後ナデ	ハケメ 後ナデ	火山灰 赤粒多
第27回	土器集中遺構5	41	1292,12 94,1297	甕	胴部～ 脚部	にぶい 褐	にぶい 褐	○				—	8.6	—	ナデ	ハケメ 後ナデ	
		42	1299	甕	胴部～ 脚部	橙	橙	○				—	8.6	—	ナデ	ハケメ 後ナデ	火山灰 赤粒多
		43	1074,12 99,666, 1300	甕	胴部～ 脚部	灰黄褐	にぶい 黄橙	○				—	8.5	—	ハケメ・ ケズリ	ハケメ 後ナデ	火山灰 赤粒多
		44	1161,93	甕	胴部～ 脚部	黑褐	にぶい 橙	○	○			—	9.0	—	—	砂粒多	
		45	1282,12 84,1273	甕	胴部～ 脚部	黑褐	にぶい 黄橙	○	○	○		—	10.7	—	—	砂粒多	
		46	1254,1327 1326,132 1252,13 40,1257,1 320,1231 1227,715, 279,717 14,123 226,1529 964,1528, 387	大甕	口縁部～ 底部	明赤褐	明赤褐						32.0	9.5	39.7	ケズリ・ ナデ	ハケメ
第28回	土器集中遺構5																

土器集中遺構観察表

博団 番号	遺構名	掲載 番号	注記 番号	器種	部位	色調		胎土			法量(cm)		調整		備考			
						内面	外面	石英	長石	角閃石	雲母	口径	底径	器高	内面	外面		
第 28 回					47	948469.6 38.658.66 1.670.643. 656.64 73.597.49 4.747.130 4.1306.10 70.1492.1 297.1804	大甕	口縁部～ 底部	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙			41.2	6.0	58.0	ハケメ	ハケメ	
第 29 回					48	4357057 9.362.118 6.310.11	大甕	口縁部	黄灰	にぶい 黄橙	○ ○ ○	60.8	—	—	工具ナデ	ハケメ	火山灰 赤粒多	
					49	93.394.11 93.1190	大甕	底部	黄灰	にぶい 黄橙	○ ○ ○	—	8.0	—	工具ナデ	ハケメ		
第 30 回					50	627.1296. 1329.1374 .1075.125 6.1273.11 20.128.11 244.1324	壺	口縁部～ 底部	にぶい 橙	明赤褐			17.0	4.8	33.6	—	ハケメ・ 工具ナデ	
					51	1260.219. 1266.931. 907.1141. 877.1171. 110.128.12 127.127 9.927.128 0.1128.12 07.437	壺	口縁部～ 底部	明黄褐	明黄褐			20.6	2.2	43.1	工具ナデ	ハケメ 後ナデ	
第 31 回					52	1288.755. 780	壺	口縁部～ 胴部	明黄褐	明黄褐			18.0	—	—	ナデ	ハケメ 後ナデ	
					53	1201.621. .1216.620	壺	口縁部～ 胴部	にぶい 黄橙	明黄褐			16.0	—	—	—	—	
土 器 集 中 遺 構 5					54	1320	壺	口縁部～ 胴部	明黄褐	明黄褐	○		17.4	—	—	ナデ	砂粒多	
					55	1266.125. 8.485.12 67	壺	口縁部～ 胴部	橙	橙	○ ○	16.0	—	—	工具ナデ	工具ナデ	砂粒多	
第 32 回					56	701	壺	口縁部～ 胴部	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙			17.4	—	—	ナデ	ナデ	
					57	1222.126. 8	壺	口縁部～ 胴部	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙			15.2	—	—	指押さえ	ナデ	
第 33 回					58	1261.692	壺	口縁部～ 胴部	褐	赤褐	○		17.0	—	—	指押さえ・ ナデ	ハケメ 後ナデ	
					59	1114	壺	口縁部～ 肩部	明黄褐	明黄褐	○		17.2	—	—	工具ナデ	工具ナデ	外面赤色 崩斜
第 34 回					60	1256.943. 1382	壺	口縁部～ 肩部	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙			14.0	—	—	ハケメ 後ナデ	ハケメ 後ナデ	砂粒多
					61	980.993	壺	口縁部～ 肩部	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙			16.0	—	—	工具ナデ	ハケメ 後ナデ	砂粒多
					62	162	壺	口縁部～ 肩部	明黄褐	浅黄			10.4	—	—	工具ナデ	ハケメ 後ナデ	
					63	1297.130. 3	壺	口縁部～ 肩部	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	○		11.2	—	—	工具ナデ	指痕	
					64	1320.124. 8.326.99 7.100.11 253	壺	口縁部～ 胴部	にぶい 黄橙	橙	○		15.3	—	—	工具ナデ	砂粒多	
					65	972.990. 9.67.97 1329.132 0.1296.67 2	壺	胴部	橙	橙			—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	砂粒多
					66	1253.131. 1.1121.1 368	壺	胴部	橙	橙			—	—	—	指ナデ	工具ナデ	火山灰 赤粒多
					67	1329.132. 0	壺	胴部	橙	橙	○ ○		—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	
					68	1288.451. 807.748 1.1121.1 327	壺	口縁部～ 底部	暗赤褐	赤褐			16.8	3.3	30.8	指ナデ	ハケメ 後ナデ	火山灰 赤粒多

土器集中遺構観察表

博団 番号	遺構名	掲載 番号	注記 番号	器種	部位	色調		胎土			法量(cm)		調整		備考			
						内面	外面	石英	長石	角閃石	雲母	口径	底径	器高	内面	外面		
第34 園		69	1320.1329 1291.123 R.123 25.1232.9 80	壺	口縁部～ 底部	にぶい 黄橙	浅黄	○				14.2	5.0	30.0	—	—		
		70	1374.641, 1254.129 1	壺	胴部～ 底部	橙	明黄褐					—	5.0	—	工具・ 指ナデ	ハケメ 後ナデ		
		71	750.1287	壺	胴部～ 底部	明黄褐	橙	○				—	6.0	—	—	ハケメ 後ナデ	砂粒多	
		72	174.1316, 713.291 23.1279.1 286.1095, 1264.1286 1316.728	壺	胴部～ 底部	明黄褐	明黄褐					—	10.0	—	ナデ	ナデ	火山灰 赤粒多	
		73	1324	壺	胴部	橙	にぶい 黄橙	○	○			—	—	—	ナデ	ハケメ 後ナデ		
		74	1285	壺	胴部	にぶい 黄褐	にぶい 黄橙					—	—	—	ナデ	ナデ		
		75	1257.1326	壺	胴部	橙	にぶい 橙	○	○			—	—	—	ハケメ 後ナデ	ハケメ 後ナデ		
第35 園		76	1330	壺	胴部	橙	橙					—	—	—	ナデ	ハケメ 後ナデ		
		77	1296.1320	壺	胴部～ 底部	明黄褐	橙					—	5.6	—	ハケメ	ハケメ 後ナデ	砂粒多	
		78	665	壺	胴部～ 底部	にぶい 橙	にぶい 黄橙	○				—	5.5	—	ナデ	ナデ		
		79	790.1320	壺	胴部～ 底部	橙	にぶい 橙	○	○			—	5.0	—	ナデ	ナデ	砂粒多	
		80	1164.1273	壺	胴部～ 底部	暗黄灰	にぶい 黄					—	4.8	—	ナデ	ハケメ 後ナデ	火山灰 赤粒多	
		81	275.1286, 1291.127 8416.8310 1328	壺	胴部～ 底部	にぶい 橙	にぶい 橙					—	4.7	—	工具ナデ	ハケメ 後ナデ		
		82	1278.1328	壺	胴部～ 底部	にぶい 黄橙	明黄褐					—	2.0	—	ナデ	ナデ	砂粒多	
第36 園	土器集中遺構 5	83	1257.580, 53.536.12 54.1329, 1320	壺	口縁部～ 胴部	橙	橙					—	16.4	—	ハケメ	ハケメ 後ナデ	細砂粒多	
		84	121	壺	口縁部～ 胴部	黃灰	明赤褐	○	○			—	14.8	—	—	工具ナデ	砂粒多	
		85	1282.225, 902.930	壺	口縁部～ 底部	にぶい 黄橙	にぶい 橙	○				—	24.0	8.4	—	ハケメ	ハケメ	
		86	1328	壺	胴部	明黄褐	明黄褐					—	—	—	ナデ	ハケメ 後ナデ	火山灰 赤粒多	
		87	650.1297 590.599, 594.587	壺	胴部～ 底部	明黄褐	にぶい 黄橙	○	○			—	6.0	—	工具ナデ	ハケメ 後ナデ		
		88	1096.128 9.1290	壺	胴部	明黄褐	明黄褐					—	—	—	工具ナデ	—		
		89	1297	壺	胴部	橙	浅黄橙					—	—	—	工具ナデ	工具ナデ		
第37 園		90	976.505.1 380.1319	壺	胴部	橙	橙	○	○			—	—	—	工具・ 指ナデ	ハケメ 後ナデ		
		91	1341.1298.12 17.1320.1173	器台	完形	橙	橙	○	○			—	27.4	23.0	19.9	ナデ	ハケメ 後ナデ	火山灰 赤粒多
		92	149.1320.327 101.1257.6 11.1257.6 53.1244.29 1.1215.36	器台	完形	橙	にぶい 橙	○	○			—	25.0	26.4	25.6	ハケメ	ハケメ 後ナデ	火山灰 赤粒多
		93	951.1308.1 29.1312.9 57.1374	器台	完形	橙	橙	○	○	○		—	28.0	24.4	25.3	ハケメ 後ナデ	ハケメ 後ナデ	
		94	521.967	鉢	口縁部～ 胴部	橙	橙					—	14.6	—	—	ハケメ	ハケメ 後ナデ	
第41 園																		

土器集中遺構觀察表

博団 番号	遺構名	複載 番号	注記 番号	器種	部位	色調		胎土			法量(cm)		調整		備考	
						内面	外面	石英	長石	角閃石	雲母	口径	底径	器高		
第41回	土器集中遺構5	95	1292	甕・鉢	脚部-脚部	にぶい 黄褐色	○					—	62	—	ハケメ ハケメ	
		96	1367	鉢	口縁部-脚部	橙	橙					11.0	—	—	ハケメ ハケメ	
		97	1297	鉢	口縁部-脚部	褐	明黄褐色					13.0	—	—	ハケメ ハケメ	
		98	1297	鉢	脚部-底部	灰黃	にぶい 橙	○	○			—	4.0	—	ナデ ケズリ・ ナデ	
		99	1373	壺	脚部-底部	にぶい 橙	にぶい 黄褐色					—	3.4	—	ヘラナデ ハケメ	
		100	一括	棒状土鉢	—	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色					—	—	—	ナデ 精製された 胎土	
第43回	土器集中遺構6	101	3287179 173323 73313	甕	口縁部-脚部	にぶい 橙	にぶい 黄褐色					18.2	—	—	工具ナデ ハケメ 後ナデ	
		102	564240	甕	脚部-脚部	橙	橙					—	84	—	工具ナデ 工具ナデ	
		103	3.65.726 7.35.99	甕	脚部-脚部	橙	橙	○	○			—	92	—	工具ナデ 工具ナデ	
		104	263.284.1 30.132.12 2.114.150 292	甕	脚部-脚部	にぶい 褐	橙	○	○			—	11.0	—	工具ナデ 工具ナデ	
		105	一括	甕	脚部-脚部	橙	橙					—	86	—	—	
		106	52.67.22	甕	脚部-脚部	黄橙	橙					—	82	—	工具ナデ 工具ナデ	
第45回	土器集中遺構7	107	76.108	壺	口縁部-脚部	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色					10.0	—	—	砂粒多	
		108	195.74.73 351.43.62 109.77.85 153.30.87. 305.38.11. 189	壺	脚部-底部	橙	明黄褐色	○	○			—	54	—	工具ナデ 火山灰 赤粒多	
		109	137.14.11 40.19.12. 159.19.1 7.18.196	甕	脚部-底部	にぶい 橙	明黄褐色	○	○			—	4.0	—	ハケメ 後ナデ ハケメ 後ナデ	
		110	220.19.11. 9.13.06.5.2 20.19.03.19 4.15.6.131	鉢	口縁部-脚部	明黄褐色	明黄褐色					11.6	—	—	工具ナデ 工具ナデ	
		111	12.23.39 204	甕	脚部	にぶい 橙	にぶい 橙	○				—	84	—	工具ナデ 工具ナデ	
		112	66.135	甕	脚部-脚部	黄灰	橙					—	65	—	工具ナデ	
第46回	土器集中遺構7	113	58.136.37 159.14.72. 88.81.219. 7.18.196. 21.22.36.1 21.13.71. 9.70.17.81. 191.25.96. 96.93	長腹壺	口縁部-底部	暗灰黄	橙					10.0	2.1	23.0	—	
		114	133	高坏	脚部	にぶい 橙	にぶい 橙	○	○			—	9.0	—	—	
		115	150	高坏	脚部	黄橙	黄橙					—	8.6	—	—	
		116	26	甕	脚部	にぶい 橙	にぶい 橙	○	○			—	6.1	—	ナデ ナデ 小形の甕	
		117	181	甕	脚部	明赤褐色	明赤褐色					—	4.0	—	工具ナデ ミニチュア	
		118	180	器台	完形	橙	橙					18.6	17.6	26.0	指揮え ミガキ ミガキ 火山灰 赤粒多	
第48回	土器集中遺構8	119	62.99	甕	口縁部-脚部	橙	橙					25.2	—	—	ハケメ 砂粒多	
		120	82.41	甕	口縁部-脚部	明黄褐色	橙	○	○			23.6	—	—	工具ナデ ハケメ 後ナデ 火山灰 赤粒多	
		121	19	甕	口縁部	明黄褐色	にぶい 黄褐色					—	—	—	工具ナデ 工具ナデ 砂粒多	

土器集中遺構観察表

博団 番号	遺構名	掲載 番号	注記 番号	器種	部位	色調			胎土			法量(cm)		調整		備考		
						内面	外面	石英	長石	角閃石	雲母	口径	底径	器高	内面		備考	
第48 図	土器集中遺構8	122	47.66.67. 135.50.5.1 6.7	壺	脚部～ 脚部	にぶい 場	赤褐	○	○			—	102	—	ナデ	—	砂粒多	
		123	17.95.80. 72	壺	脚部～ 脚部	明黄褐	棕					—	95	—	—	ナデ	砂粒多	
		124	21	壺	底部	にぶい 黄褐		○				—	7.0	—	指ナデ	ハラケズリ、 ナデ	内面朱？	
第50 図	土器集中遺構9	125	36.37.116. 115.50.5.1 6.7.104 105	壺	口縁部～ 底部	にぶい 黄橙	にぶい 程	○	○			33.4	—	—	工具ナデ	ハケメ 後ナデ	火山灰 赤粒多	
		126	2.22.65. 100	壺	脚部～ 底部	黄橙	黄橙	○	○			—	5.5	—	—	工具ナデ	火山灰 赤粒多	
		127	41.93.124. .156	壺	脚部～ 脚部	棕	浅黄橙	○				—	8.5	—	工具ナデ	工具ナデ、 指頭痕		
第52 図	土器集中遺構10	128	39.134.1 .35	壺	脚部～ 底部	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	○				—	2.7	—	ハケメ	ハケメ		
		129	48.83.169. 80.106. 71.89.129 74.85.32.8 33.37.0.11 55.91.64.6 5.140	壺	口縁部～ 底部	棕	棕					15.4	3.0	24.5	指ナデ	—	火山灰 赤粒多	
		130	145.153.1 54.121.68 34.150.1	鉢	脚部～ 底部	にぶい 黄褐	にぶい 黄橙					—	6.0	—	工具ナデ	工具ナデ	火山灰 赤粒多	
第54 図	土器集中 遺構集中11	131	3	壺	口縁部～ 脚部	棕	棕					22.2	—	—	—	—		
		132	31.38	壺	脚部	にぶい 黄橙	棕					—	10.6	—	—	—		
第56 図	土器集中 遺構集中12	133	31	壺	口縁部～ 脚部	明黄褐	明黄褐					16.8	—	—	ハケメ・ 工具ナデ	ナデ		
		134	4.821.33	壺	脚部～ 脚部	棕	にぶい 褐					—	7.5	—	指頭痕	—		
第58 図	土器集中 遺構集中13	135	3	壺	脚部	黄橙	明黄橙					—	7.3	—	—	—		
		136	22.18.19. 40.39	壺	口縁部	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙					16.6	—	—	—	—		
		137	32.9.27.28. 41.29	壺	底部	にぶい 棕	にぶい 黄橙					—	4.2	—	—	ハケメ		
		138	一括	鉢	底部	棕	棕					—	4.2	—	ナデ	ナデ		
		139	24.36	鉢	脚部～ 底部	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙					—	5.2	—	工具ナデ	ハケメ		

2 中世～近世の調査

中世～近世の遺構は1地点～4地点のI a層～V層上面において溝、掘立柱建物跡、鍛冶炉跡などが検出され、遺物はI a層～IV b層内から輸入陶磁器、肥前系陶磁器、在地系陶磁器のほか土製品、鉄滓などが出土した。以下、遺構・遺物にわけて述べる。



第59図 中世～近世遺構配置図

(1) 遺構

1 地点～4 地点にかけて中世～近世に相当すると思われる遺構が検出された。主に屋敷跡とそれに付随する遺構であると考えられる。

井戸跡1(第60図)

E - 1・2 区の境で I a 層にて検出された。板状に加工した熔結凝灰岩を 7 段縦に組み合わせて構築されている。それぞれの板はノミの加工痕が観察できる。板石と板石の間には粘土が塗り込まれておらず、接着されている。また最下段は木枠である。調査途中でも下から 2 段目あたりまで水が湧き出ていた。

井戸跡2(第60図)

E - 2 区において検出された。井戸 1 と同様に、ノミの加工が施された熔結凝灰岩を組み合わせて造られている。崩壊する危険があったため、上から 2 段目の途中までで調査を終了した。2 段目までの埋土中から、以下の遺物が検出された。

井戸跡2出土遺物(第60図)

140 は白磁の碗である。高台内面に「一」の墨書がある。141 は端反碗である。外面には山水文が描かれる。豊付きは釉剥ぎされる。142 は肥前系の中皿で、高台は短く、豊付きには砂が付着している。口唇部は口紅である。143 は、口縁部が外反する大型の鉢の胴部である。内外面とも白化粧土の刷毛目文様が描かれる。144 は土製品の焙烙である。煤の付着は見られない。口縁部下に焼成前の穿孔がある。持ち手がつく形ではなく、窯炉裏につるして使用する形のものと考えられる。

掘立柱建物跡

2 地点の自然堤防上において、13 棟の掘立柱建物跡が検出された。柱穴内の埋土は、I a 層および IV b 層であり、出土した遺物も土器や土師器、土製品に関してはローリングを受けているものが多くた。このことから、川内川の氾濫時にはこれらの建物跡周辺にまで川砂が流れ込んだと思われる。

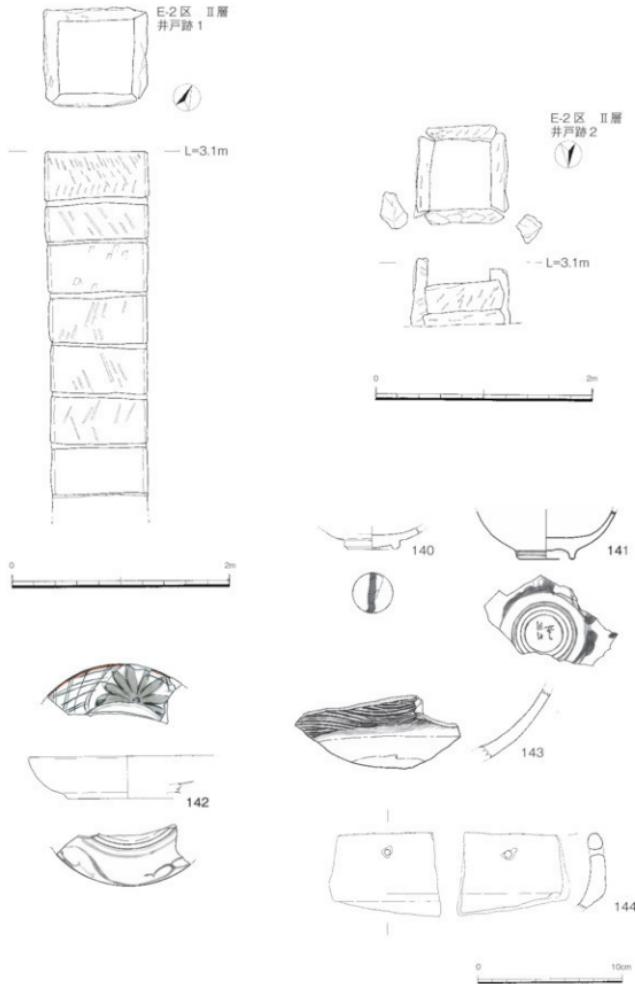
検出されたこれらの建物跡を軸方向で比較してみると、2 タイプに分けることができる。すなわち、軸を北東方向(N10° E)に持つ建物跡(以下、タイプ1 とする)と、北北西(N15° W)に軸を持つ建物跡(以下タイプ2 とする)である。

以下に、それぞれの掘立柱建物跡について述べる。なお、梁行き、桁行き及び柱間などについてはそれぞれの計測表を参照されたい。

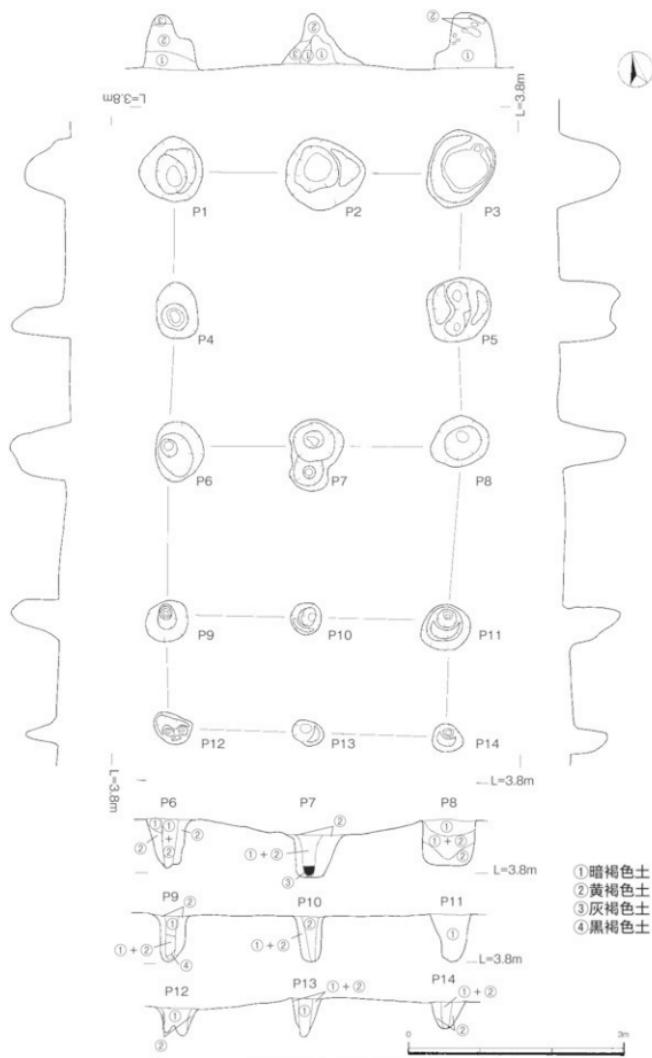
〈タイプ1〉

掘立柱建物跡1(第61図)

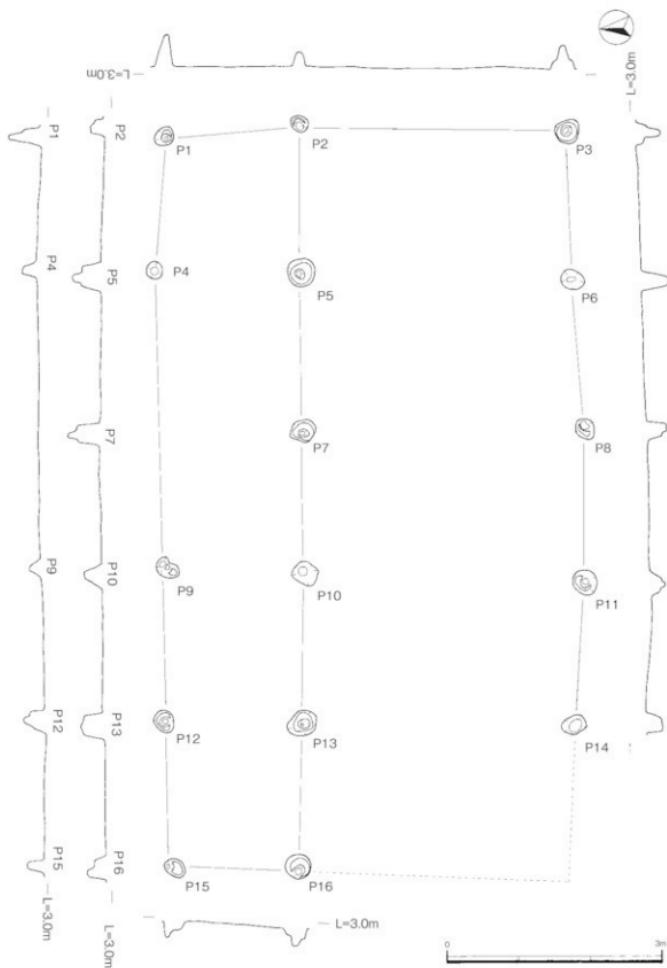
H - 10・11 区、V 層上面で検出した。14 基の柱穴からなる 2 × 4 間の建物跡である。柱穴の底から根石と思われる人頭大の石が検出されたものもある。



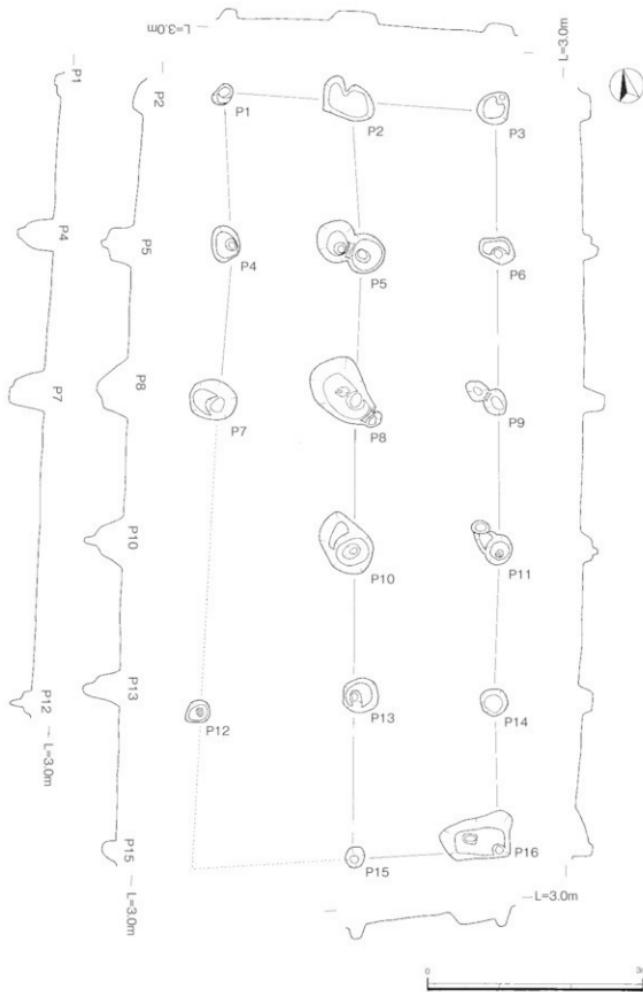
第 60 図 井戸跡および出土遺物



第 61 図 掘立柱建物跡 1



第 62 図 掘立柱建物跡 2



第 63 図 挖立柱建物跡 3

掘立柱建物跡 1

柱穴番号	柱穴 (cm)		
	長径	短径	深さ
1	91	90	75
2	112	102	70
3	104	97	75
4	79	59	79
5	90	88	83
6	83	66	67
7	73	70	58
8	81	71	64
9	60	55	63
10	42	40	62
11	70	64	66
12	53	41	37
13	43	35	52
14	44	39	37

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1 - 2	2	1 - 4	1.95
2 - 3	2	4 - 6	1.8
6 - 7	2	6 - 9	2.3
7 - 8	2.05	9 - 12	1.65
9 - 10	2	3 - 5	1.95
10 - 11	1.9	5 - 8	1.75
12 - 13	1.9	8 - 11	2.5
13 - 14	2	11 - 14	1.6

掘立柱建物跡 2

柱穴番号	柱穴 (cm)		
	長径	短径	深さ
1	30	28	50
2	24	20	20
3	36	34	34
4	26	22	20
5	38	38	42
6	32	28	40
7	34	30	44
8	28	24	30
9	26	20	20
10	38	32	26
11	36	34	25
12	30	28	34
13	40	38	34
14	36	28	23
15	30	20	26
16	36	32	24

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1 - 2	1.85	1 - 4	1.82
2 - 3	3.68	4 - 9	4.05
15 - 16	1.8	9 - 12	2.18
		12 - 15	2
		2 - 5	2.04
		5 - 7	2.2
		7 - 10	1.92
		10 - 13	2.1
		13 - 16	2.05
		3 - 6	2.06
		6 - 8	2.05
		8 - 11	2.16
		11 - 14	2

掘立柱建物跡 3

柱穴番号	柱穴 (cm)		
	長径	短径	深さ
1	30	28	14
2	68	40	18
3	46	44	16
4	42	40	50
5	56	54	44
6	50	36	22
7	66	54	50
8	96	56	42
9	36	32	32
10	68	66	58
11	42	36	22
12	34	32	30
13	50	48	52
14	38	38	22
15	32	24	22
16	90	58	30

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1 - 2	1.7	1 - 4	2.14
2 - 3	2.02	4 - 7	2.24
15 - 16	2	2 - 5	2.1
		5 - 8	2
		8 - 10	2.1
		10 - 13	2
		13 - 15	2.24
		3 - 6	2
		6 - 9	2.06
		9 - 11	2.1
		11 - 14	2.06
		14 - 16	2.1

掘立柱建物跡2(第62図)

F・G-10・11区、V層上面で検出した。16基の柱穴からなる建物跡である。ピット5から土師器(145)が出土している。

掘立柱建物跡3(第63図)

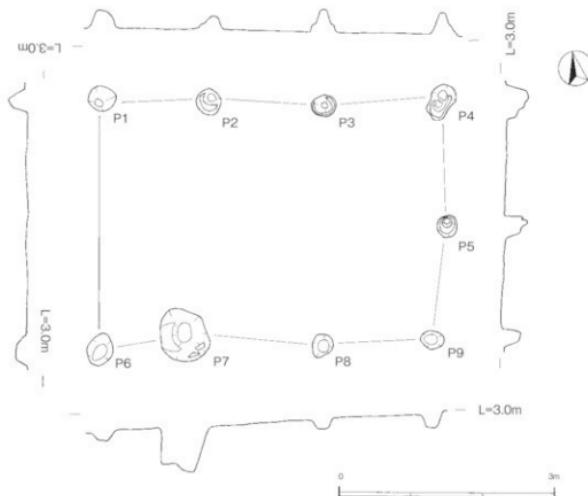
F・G-10・11区、V層上面で検出した。16基の柱穴からなる 2×5 間の建物跡である。

掘立柱建物跡4(第64図)

F-10・11区、V層上面で検出した。8基の柱穴からなる 1×4 間の建物跡である。

掘立柱建物跡5(第65・66図)

E-10・11区、V層上面で検出した。東西に庇をもつ、 3×5 間の建物跡である。

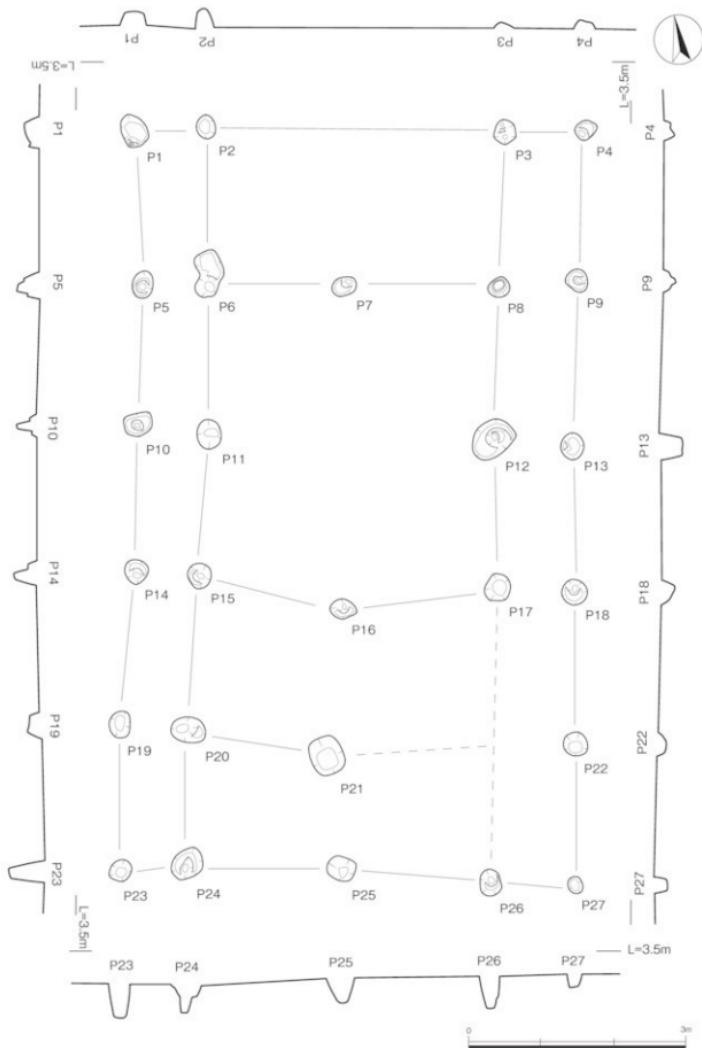


第64図 掘立柱建物跡4

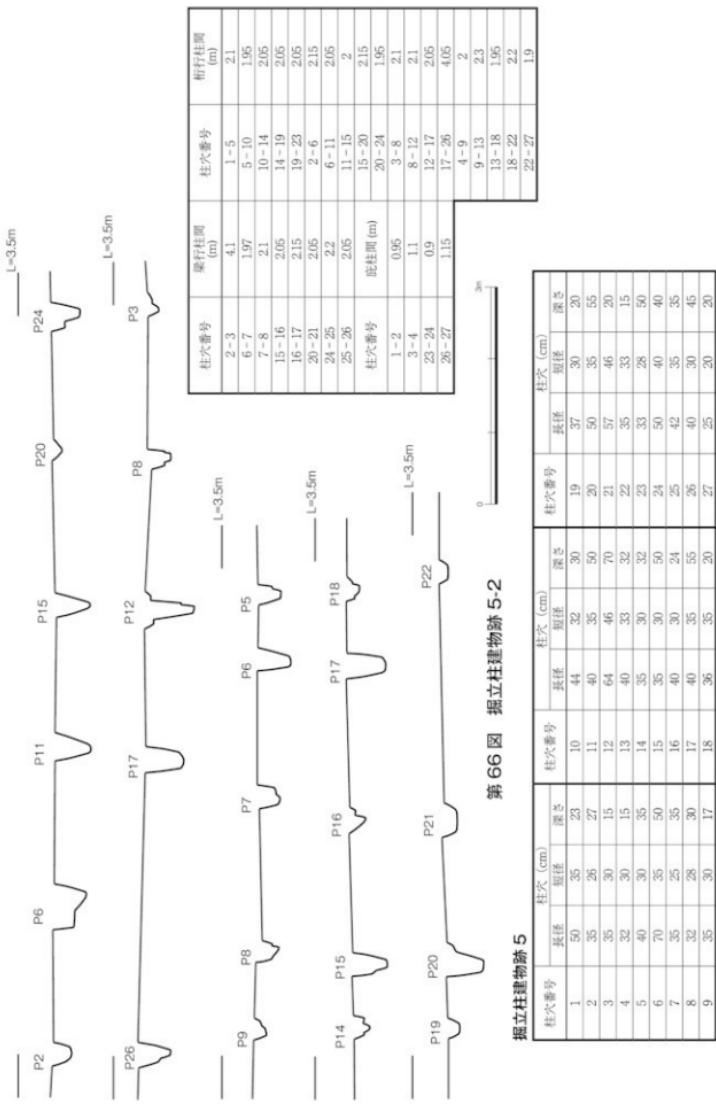
掘立柱建物跡4

柱穴番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	36	36	28
2	38	36	20
3	34	30	34
4	50	30	30
5	30	28	33
6	46	36	18
7	74	72	64
8	36	30	16
9	33	26	25

柱穴番号	梁行柱間(m)	柱穴番号	桁行柱間(m)
1-6	3.44	1-2	1.58
4-5	1.74	2-3	1.56
5-9	1.64	3-4	1.64
		6-7	1.2
		7-8	1.9
		8-9	1.5

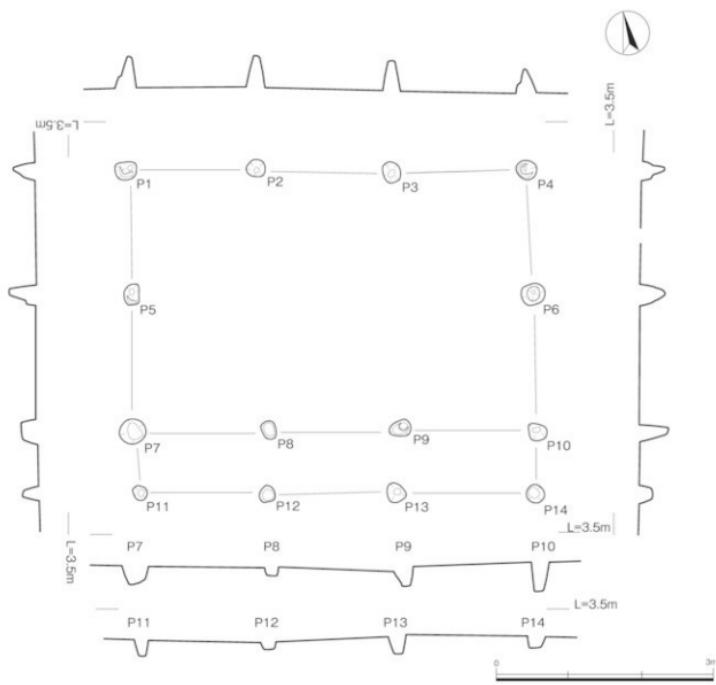


第65図 掘立柱建物跡 5-1



第 66 図 掘立柱建物跡 5-2

掘立柱建物跡 5



第 67 図 掘立柱建物跡 6

掘立柱建物跡 6

柱穴番号	柱穴 (cm)		
	長径	規径	深さ
1	30	25	42
2	27	25	45
3	30	25	40
4	30	30	32
5	30	25	36
6	35	30	35
7	40	35	25
8	25	21	15
9	30	25	25
10	25	25	40
11	23	23	20
12	25	23	15
13	38	27	25
14	27	25	18

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1 - 5	1.7	3 - 4	1.87
5 - 7	1.9	2 - 3	1.87
4 - 6	1.7	1 - 2	1.75
6 - 10	1.9	11 - 12	1.75
平均値	1.8	12 - 13	1.75
柱穴番号	庇柱間 (m)	13 - 14	1.9
7 - 11	0.85	8 - 9	1.85
10 - 14	0.9	9 - 10	1.85

掘立柱建物跡6(第67図)

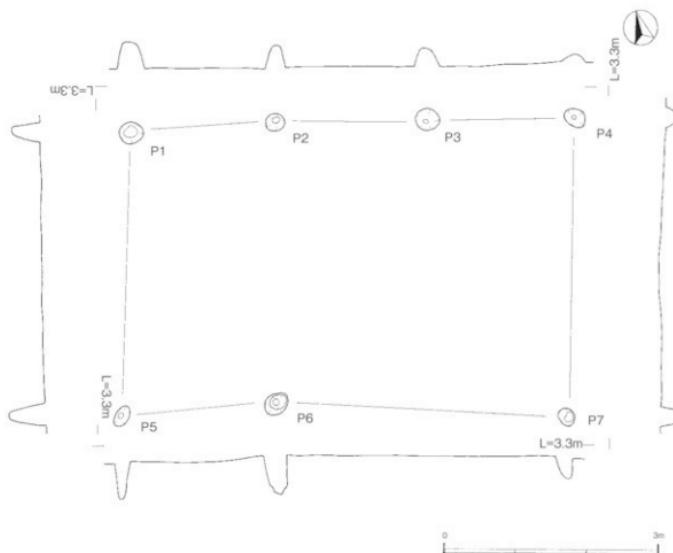
D・E - 21・22区、V層上面で検出した。南側に庇をもつ3×3間の建物跡である。ピット8から布目瓦(146)が出土している。

掘立柱建物跡7(第68図)

E・F - 21・22区、V層上面で検出した。1×3間の建物跡である。

〈タイプ2〉

掘立柱建物跡8～14は自然堤防の際に位置し、ピットの埋土は砂混じりで下層は水成堆積になっていた。

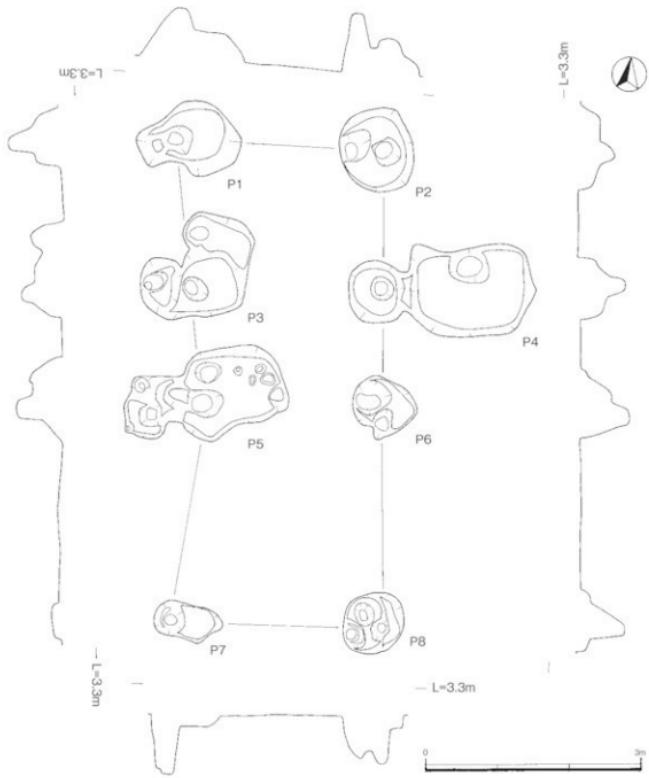


第68図 掘立柱建物跡7

掘立柱建物跡7

柱穴番号	柱穴(cm)		
	長径	短径	深さ
1	35	32	36
2	28	26	30
3	35	32	25
4	30	27	10
5	30	19	50
6	36	32	53
7	26	20	29

柱穴番号	乗行柱間(m)	柱穴番号	乗行柱間(m)
1-5	3.9	1-2	2.05
4-7	4.15	2-3	2.05
		3-4	2.05
		5-6	2.15
		6-7	4.05



第 69 図 掘立柱建物跡 8

掘立柱建物跡 8

柱穴番号	柱穴 (cm)		
	長径	短径	深さ
1	146	66	72
2	112	100	50
3	156	148	68
4	254	80	66
5	224	116	69
6	90	62	70
7	94	48	16
8	82	78	70

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1 - 2	2.9	1 - 3	2.06
7 - 8	2.95	3 - 5	1.6
		5 - 7	3
		2 - 4	1.9
		4 - 6	1.88
		6 - 8	2.8

掘立柱建物跡 8(第69図)

F - 7区, V層上面で検出した。ピット1で薩摩焼の土瓶(147)が出土している。

掘立柱建物跡 9(第70図)

F - 7区, V層上面で検出した。ピット2で薩摩焼苗代川系と思われる蓋(148)が出土している。

掘立柱建物跡 10(第71図)

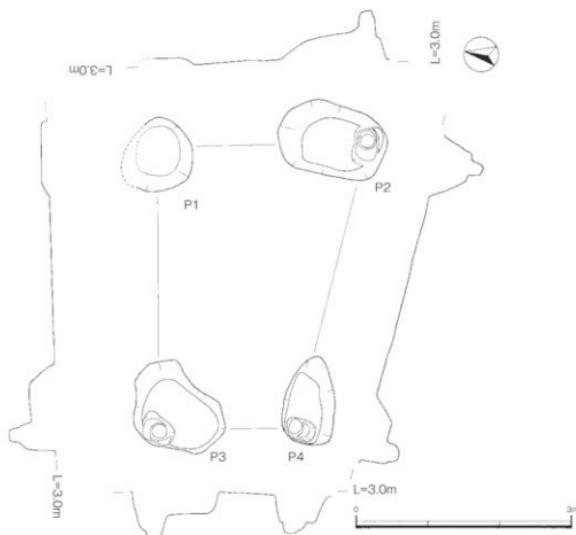
F - 7区, V層上面で検出した。1×2間の建物跡である。

掘立柱建物跡 11(第72図)

E - 6・7区, V層上面で検出した。1×2間の建物跡である。ピット5から16世紀代と思われる青花の皿(149)が出土した。

掘立柱建物跡 12(第73・74図)

D～F - 8区, V層上面で検出した。4×1間の建物の横に1×2間の建物が付随する。



第70図 掘立柱建物跡 9

掘立柱建物跡 9

柱穴番号	柱穴 (cm)		
	長径	短径	深さ
1	100	(60)	12
2	158	84	70
3	120	100	65
4	120	68	52

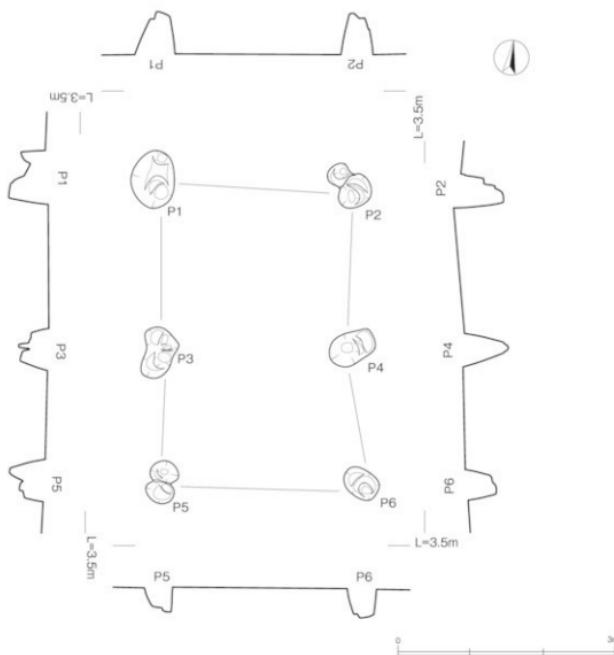
柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	2.9	1-3	3.9
3-4	1.83	2-4	4.05

掘立柱建物跡 13(第 75 図)

E・F - 9・10 区, V 層上面で検出した。3 × 4 間の建物跡である。

掘立柱建物跡 14(第 76 図)

C・D - 10・11 区, V 層上面で検出した。

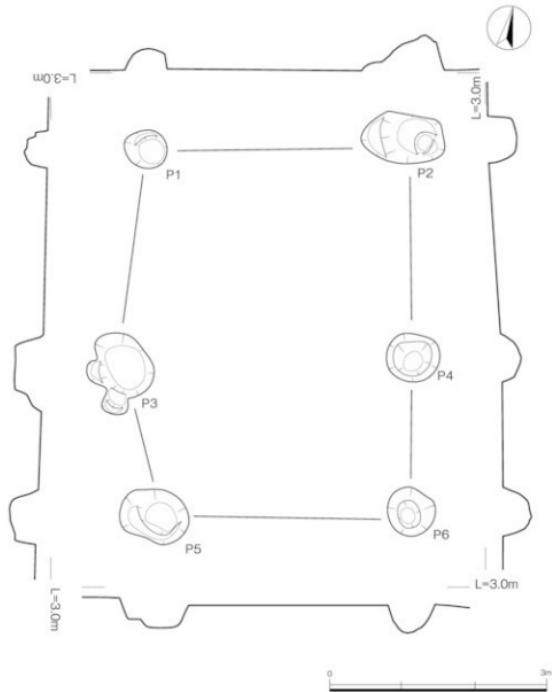


第 71 図 掘立柱建物跡 10

掘立柱建物跡 10

柱穴番号	柱穴 (cm)		
	長径	短径	深さ
1	80	60	60
2	50	45	65
3	75	40	40
4	65	45	63
5	65	25	48
6	55	40	40

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	2.6	1-3	2.3
5-6	3.05	2-4	2.25
		3-5	1.7
		4-6	2

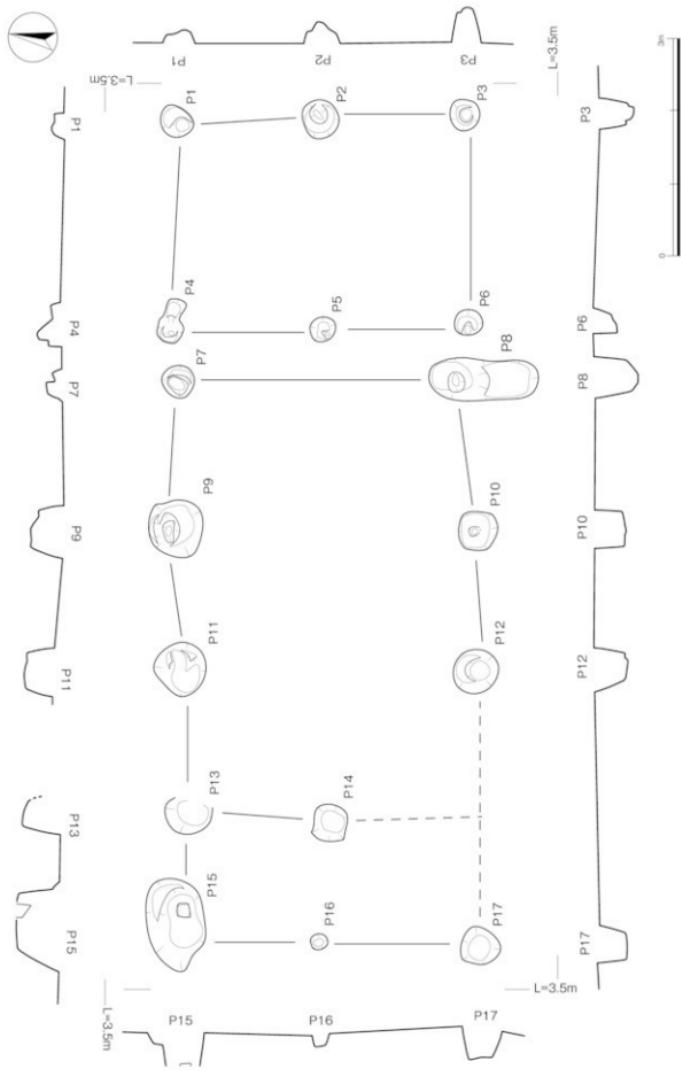


第72図 掘立柱建物跡 11

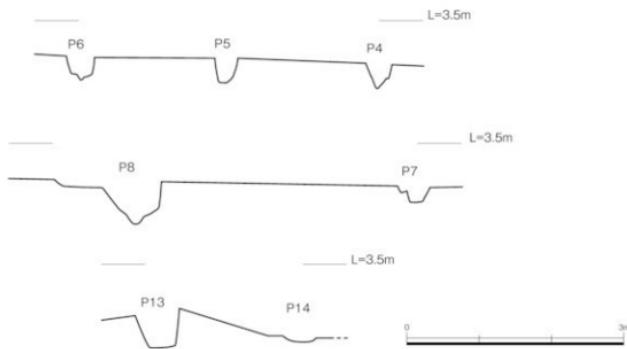
掘立柱建物跡 11

柱穴番号	柱穴 (cm)		
	長径	短径	深さ
1	60	55	35
2	115	60	50
3	110	75	40
4	75	65	30
5	95	70	40
6	70	65	40

柱穴番号	梁行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1-2	3.75	2-4	3
5-6	3.45	4-6	2.15
		1-3	3
		3-5	2.1



第73図 据立柱建物跡 12-1



第 74 図 堀立柱建物跡 12-2

掘立柱建物跡 12

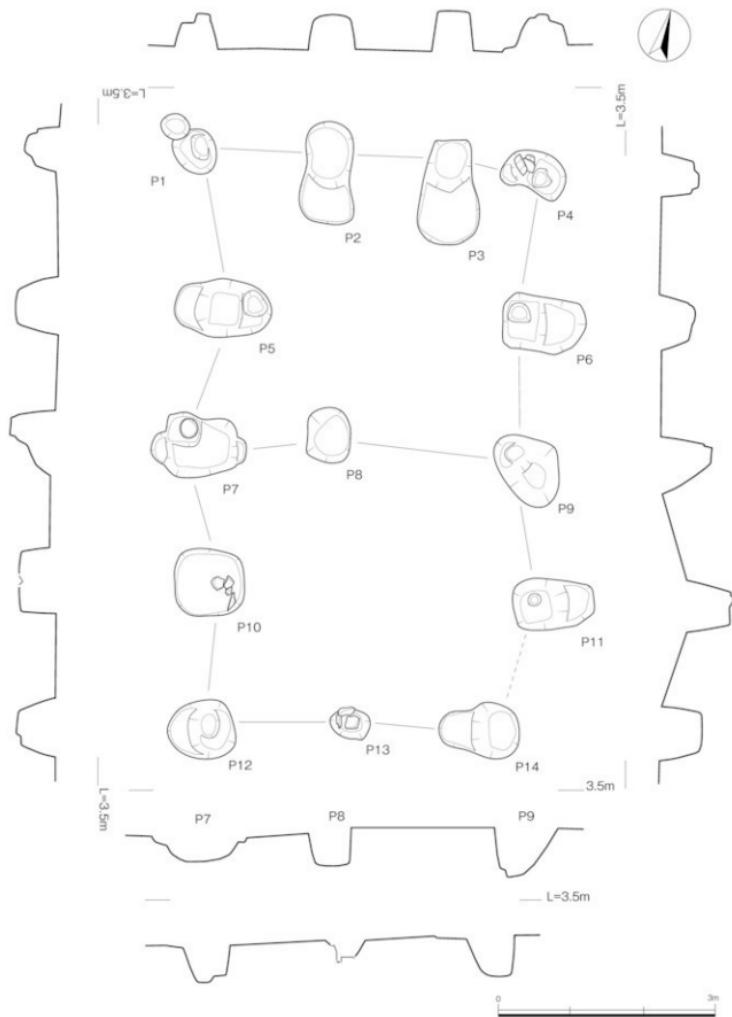
柱穴番号	柱穴 (cm)		
	長径	短径	深さ
1	50	40	20
2	55	50	30
3	45	45	50
4	65	35	35
5	35	35	35
6	40	36	35
7	50	45	25
8	150	55	60
9	85	75	45
10	60	55	45
11	75	65	40
12	65	56	50
13	(65)	(60)	55
14	55	46	10
15	125	75	60
16	25	23	20
17	55	50	45

柱穴番号	棟行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
15 - 16	1.95	1 - 4	2.9
16 - 17	2.25	7 - 9	2.05
13 - 14	1.95	9 - 11	2
7 - 8	3.85	11 - 13	1.95
5 - 6	1.95	13 - 15	1.8
4 - 5	2.1	10 - 12	1.95
2 - 3	2.05	8 - 10	2.1
1 - 2	1.9	3 - 6	3
12 - 17	3.8		

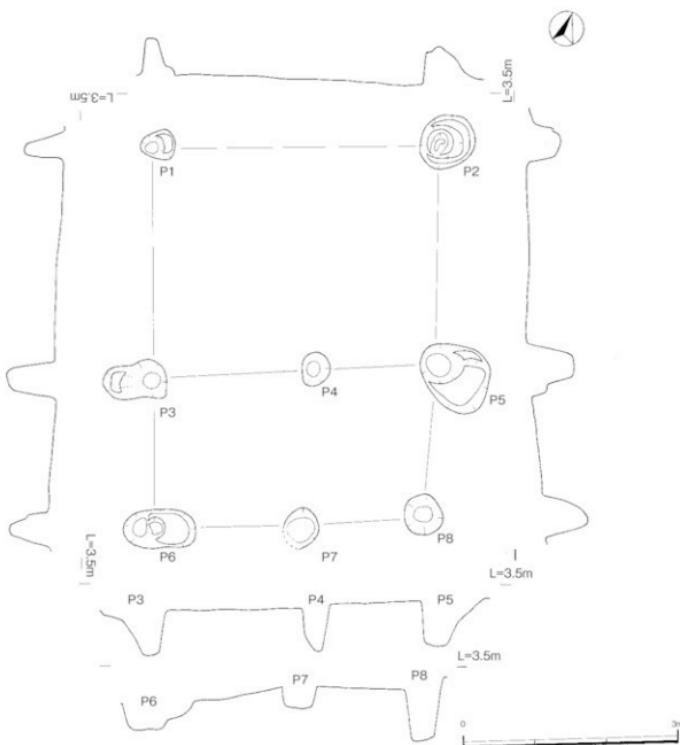
掘立柱建物跡 13

柱穴番号	柱穴 (cm)		
	長径	短径	深さ
1	65	57	50
2	141	65	50
3	145	60	55
4	90	55	50
5	135	80	60
6	115	80	50
7	100	85	60
8	80	60	50
9	110	60	70
10	110	95	50
11	113	70	65
12	90	85	55
13	55	45	30
14	110	75	57

柱穴番号	棟行柱間 (m)	柱穴番号	桁行柱間 (m)
1 - 2	1.8	1 - 5	2.3
2 - 3	1.7	4 - 6	1.9
3 - 4	1.25	5 - 7	1.75
7 - 8	2.0	6 - 9	1.95
8 - 9	2.55	7 - 10	2.05
12 - 13	2	9 - 11	2.05
13 - 14	2.1	10 - 12	2



第75図 掘立柱建物跡 13



第 76 図 掘立柱建物跡 14

掘立柱建物跡 14

柱穴番号	柱穴 (cm)		
	長径	短径	深さ
1	48	35	54
2	82	68	55
3	88	46	68
4	47	40	66
5	110	60	65
6	100	52	54
7	58	44	33
8	56	50	88

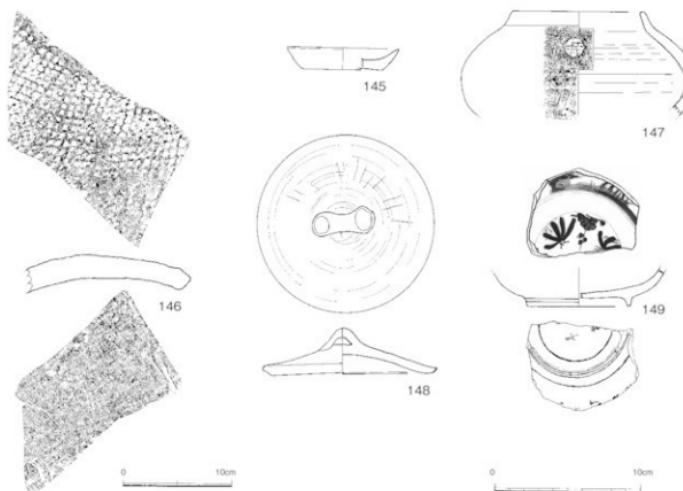
柱穴番号	築行柱間 (m)	柱穴番号	築行柱間 (m)
1-2	4	1-3	32
3-4	22	3-6	204
4-5	1.7	2-5	3.04
6-7	2	5-8	21
7-8	1.7		

掘立柱建物跡出土遺物（第 77 図）

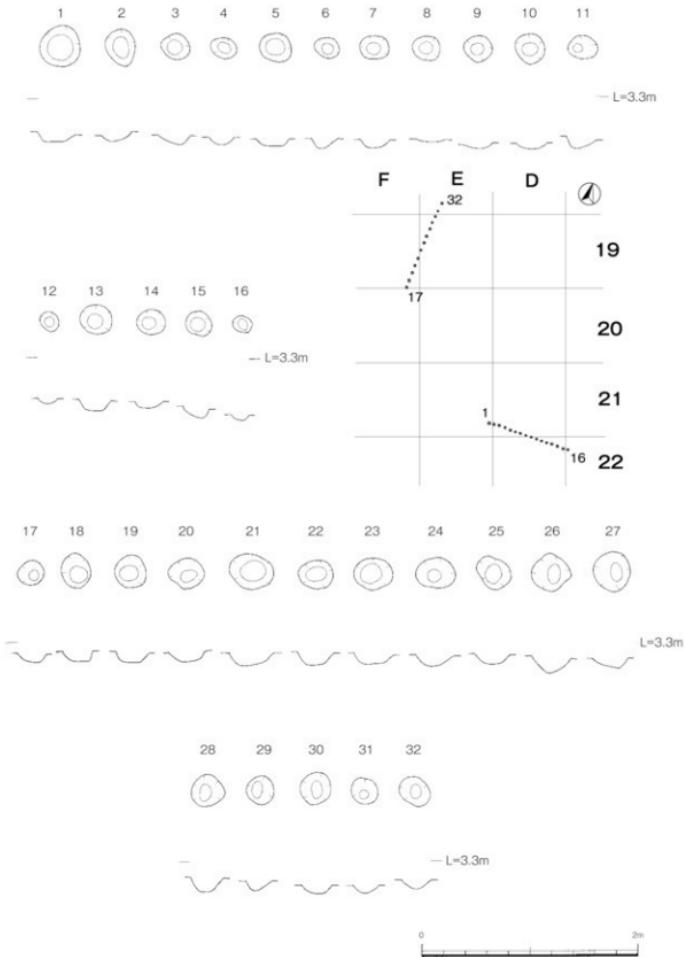
145 は土師器の小皿である。底部は糸切りで、口径 7.8cm、底径 5.5cm、器高は 1.5cm である。146 は布目瓦である。薩摩国分寺に使用されていた瓦と類似している。表面は格子目叩きの後、一部を指でナデて調整している。大きく焼き歪んでおり、実際に瓦として使用されたものではなく、船のバラストなどとして使われたものであると考えられる。147 は、いわゆる筋土瓶と呼ばれるものである。口縁部は内傾しながら立ち上り、口唇部は細くなっている。肩部に格子目のスタンプが施されている。148 は、薩摩焼苗代川系の蓋である。リボン状のつまみが付き、内面はドーム形にふくらみ、口唇部はやや外側に反る。149 は青花の皿である。内面には花文が描かれ、高台内面にはおそらく「大明年製」と思われる文字が書かれている。墨付は釉剥ぎしてある。

柵列状遺構（第 78 図）

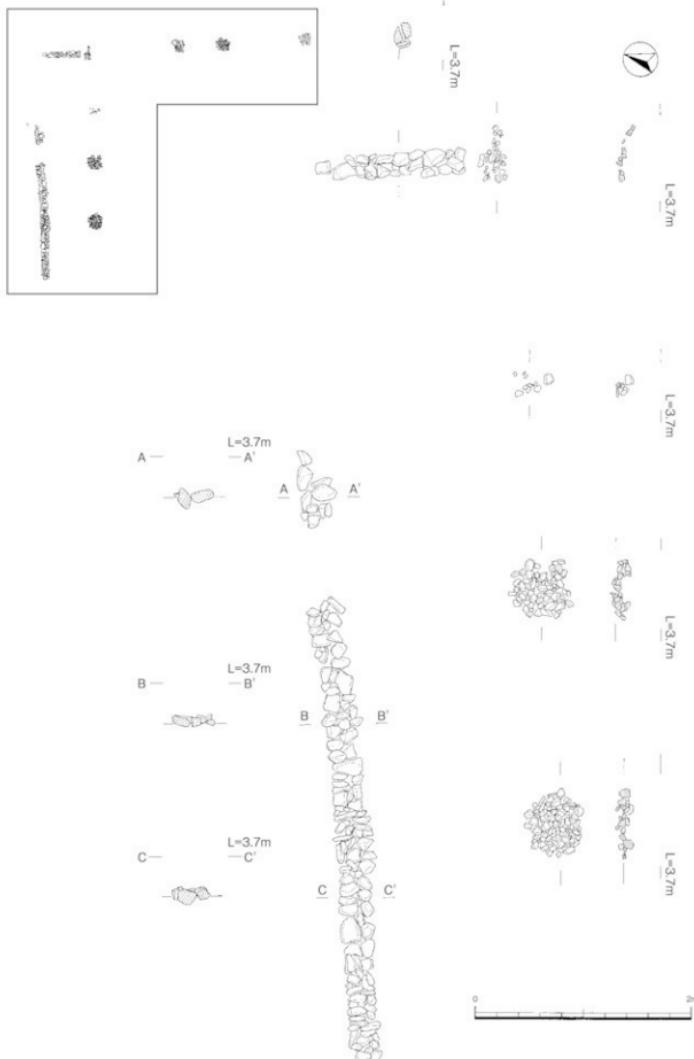
E・F - 18・19 区、V 層上面で 1 条、C ~ E - 21・22 区、V 層上面で 1 条、それぞれ 16 基の柱穴が並んで検出された。いずれも埋土は I a 層である。それぞれを南、西方向へ延長していくと F - 21 区で直行する。上部が削平されているためか、全体的に深さが 6 ~ 10cm 程度と浅い。溝状遺構 3 と切り合っており、柵列状遺構のはうが新しい。建物などの囲いの柵であると考えられるが、柵列状遺構に囲まれた部分において、建物跡は確認されなかった。



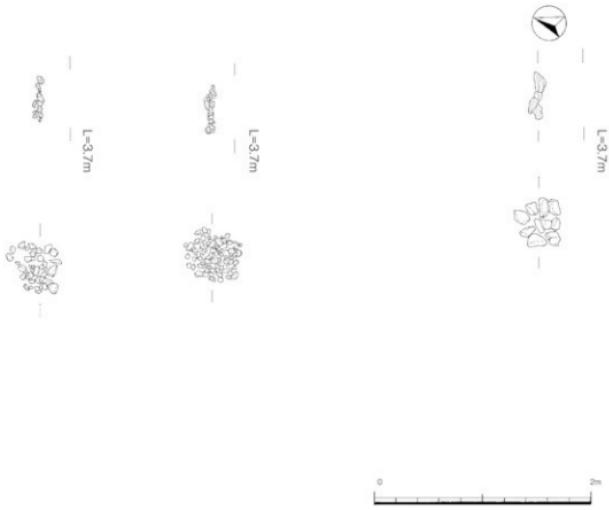
第 77 図 掘立柱建物跡内出土遺物



第 78 図 桁列状遺構



第 79 図 布基礎 1



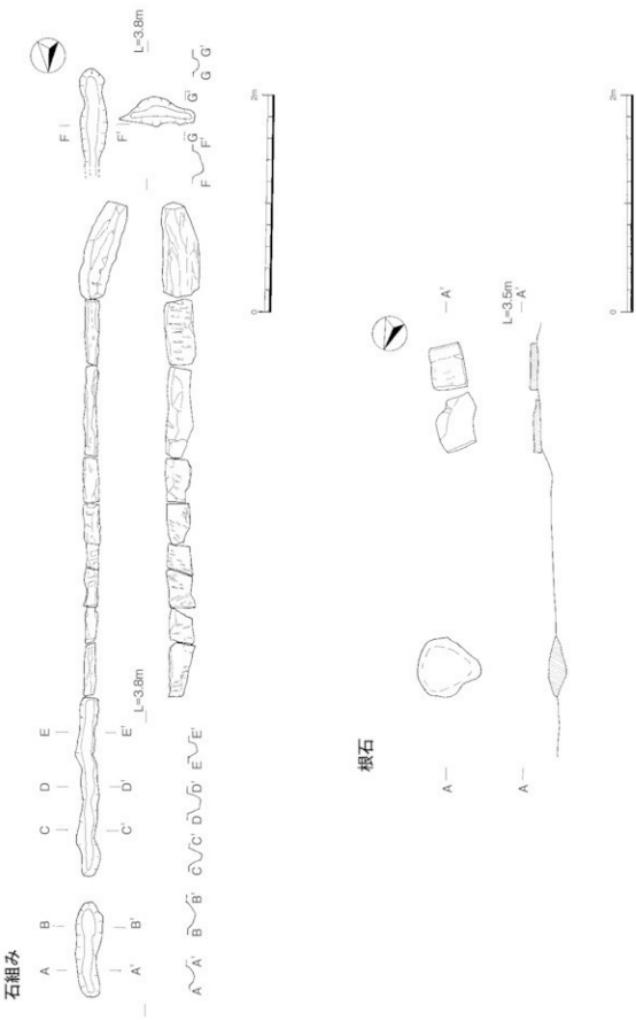
第 80 図 布基礎 2

布基礎(第 79・80 図)

F・G-3・4 区において検出された。列状と円形の基礎である。どちらも掘り込みは確認できなかった。列状のものは、東西方向と南北方向の 2 方向に向かい、円形の基礎と対応していると思われる。列状の基礎を構成している石は人頭大のもので、川原にある石のように角がとれている。円形の基礎を構成している石は小さめの川原石であるが、F-4 区で検出された円形の基礎は列状の基礎と同様の大きさの石で構成されていた。どちらの基礎も平面的に構築されており、深さはない。円形の基礎間は、1.2 m～1.8 m である。列状の基礎と円形の基礎は近接しすぎている部分があり、軸が描わないので、異なる時期の建物跡である可能性も考えられる。

石列(第 81 図)

C・D-2 区、I a 層中で検出した。東西方向に延びる、二本の間の幅が約 65cm の石列である。盤で加工された熔結凝灰岩で構成されている。石列を抜き取ったと思われる掘り込みを、石列の統きで検出した。



第81図 石組み・根石

根石(第81図)

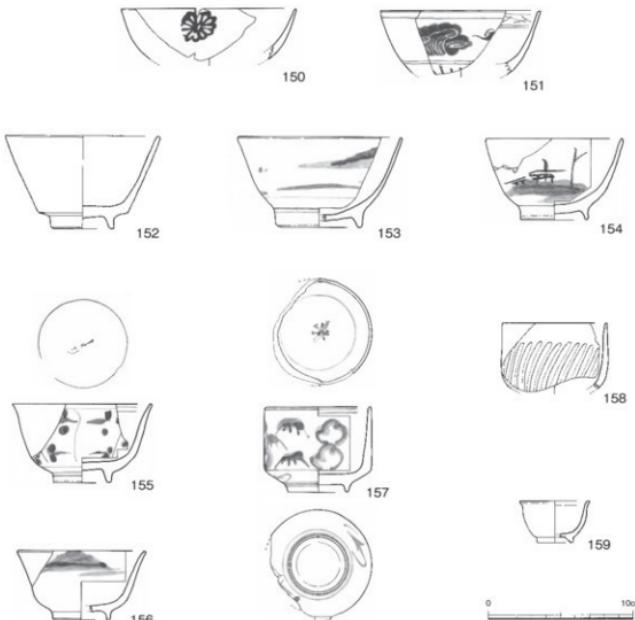
E-2区、I-a層中において検出した。南北方向で、厚さ10~20cmほどの平らな石が三枚並んで検出された。建物の基礎の根石として使用されていたものであると考えられる。

石垣

I-a層掘り下げ途中の、D-E-13区で検出された。人頭大ほどの大きさの石を組み合わせた石垣で、遺物は石と石の間に挟まった状態で出土した。残存していた長さは、約84m、幅約50cm、うらごめを含めた幅は約1.5m、高さは約60cmである。現在においても遺跡周辺の家屋と道路の境には同様の石垣が存在する。また、出土した遺物が18世紀代~19世紀代のものであることから、この遺構が18世紀後半以降に築かれていることがわかる。

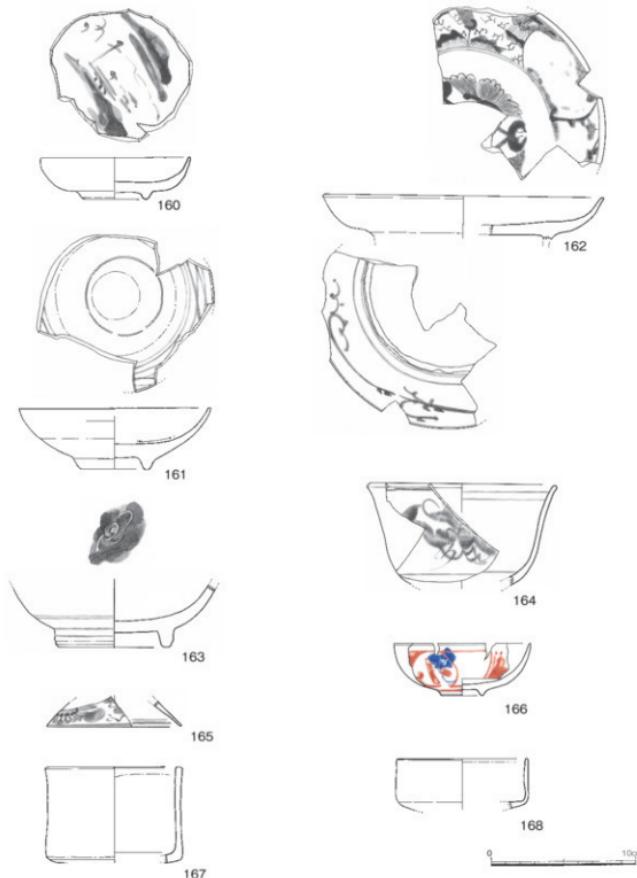
石垣出土遺物(第82~84図)

150・151は丸碗である。150は外面にコンニヤク印判で菊文が押される。151は、濃による文様が描かれる。内面は四方攢文である。152は朝顔形の白磁である。153・154は広東碗であるが、一般的な広東碗に比べて高台が短く、外側に開いている。どちらも外面に山水文が描かれる。



第82図 石垣内出土遺物1

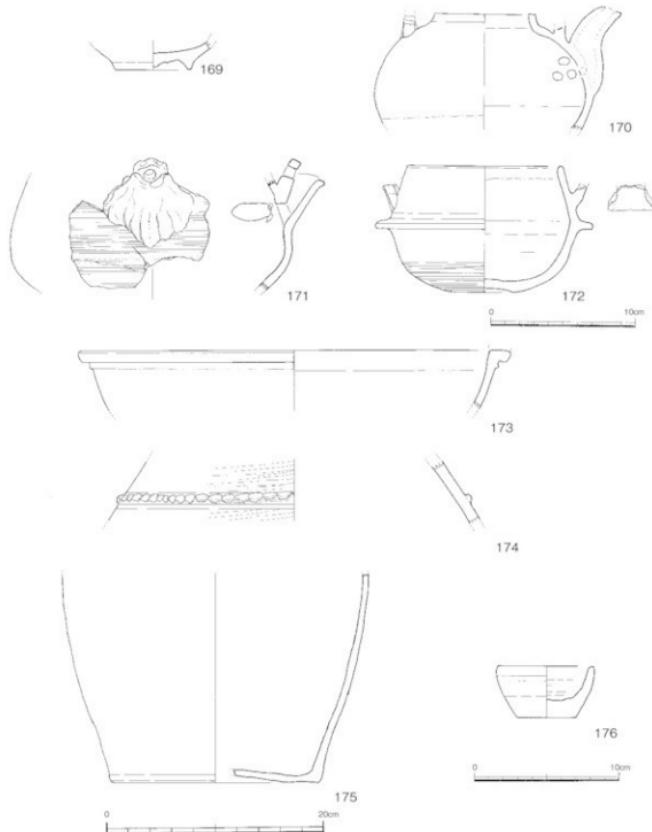
154は胴部下半がやや丸みを帯びて立ち上がる。155は端反碗である。外面には省略された四弁花文が描かれる。156は小形の端反碗である。高台径が小さく、口径は大きい。外面に山水文が描かれる。肥前系であると思われる。157は筒形碗である。外面には雪持筆文、見込みには虫文が描かれる。体部には別の製品の破片が接着している。158は半筒形の小碗である。外面には、斜位の縞文を施す。体部から口縁部は直線的に立ち上がる。159は小坏である。口縁部が短く外反する。在



第83図 石垣内出土遺物2

地系であると思われる。

160は在地系の小皿である。見込みには山水文が描かれており、高台は分厚く短い。161は中皿である。全体的に厚手である。見込みは蛇目釉剥ぎされている。162は在地系の大皿である。二次的な被熱を受けたと思われ、内面は黒く変色している。口縁部は短く外反する。18世紀後半に相当すると考えられる。高台は意図的に打ち欠かれたような痕があり、加工して二次利用しようとしたものと思われる。163・164は鉢である。163は大形で厚手の鉢で、見込みに濃による文様が施される。164は体部が口縁部に向かってゆるやかに開き、口縁部は短く外反する。165は端反碗の



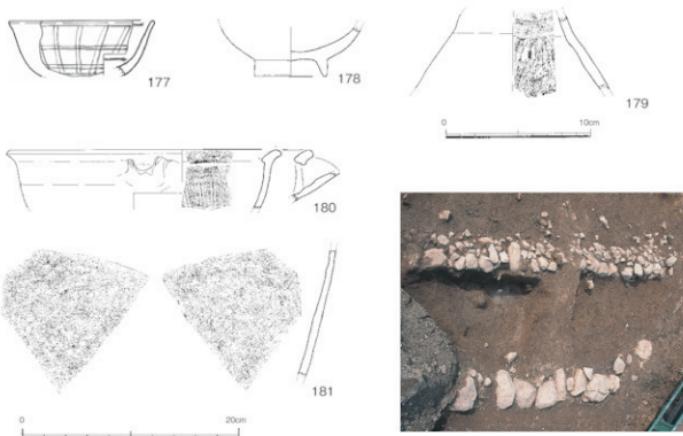
第84図 石垣内出土遺物3

蓋であるが、やや小振りのものである。外面には芙蓉が描かれる。166は色絵の小碗である。体部は丸みをおびるが、やや浅い。高台は低く、口縁径に比べて高台径が小さい。染付の花文の上に、赤い窓絵が描かれる。167は白磁の火入れである。口縁部内面まで釉がかかり、内面は無釉である。168は髮蓋であると思われる。口唇部は釉が剥いでいる。

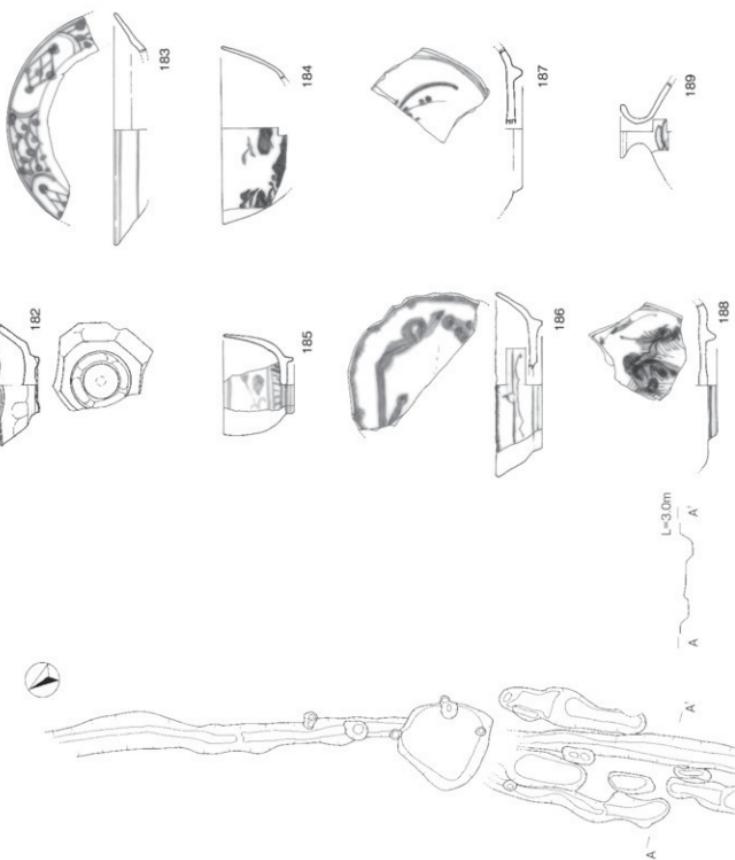
169は薩摩焼の苗代川系の碗である。豊付は釉を剥いであり、高台内底面は巴状に削られている。170は薩摩焼の土瓶である。器形は胴部がやや下垂した丸形である。内外面に褐釉がかけられているが、口唇部は釉が剥いであり、他の製品を重ね焼きした痕が看取できる。171は鍋である。外面にはヘラ状工具による横筋が観察される。172は羽釜である。底部には、円形の台に据えて使用したと思われる、筋状に黒く変色した部分があり、比熱した箇所は赤変している。产地は薩摩焼苗代川系である。173は薩摩焼苗代川系の鉢である。口縁部断面はL字状を呈し、口唇部は釉が拭き取られて無釉となっている。174は、いわゆる半胴壺と呼ばれる肥前の大壺の胴部である。胎土はマーブル状を呈し、内外面とも鉄釉がかけられている。175は壺の胴部～底部である。底部および底部内面に、貝目が看取できる。176は磁製のチャツである。底部にはアルミナが付着している。近世以降のものであると思われる。

石組み遺構

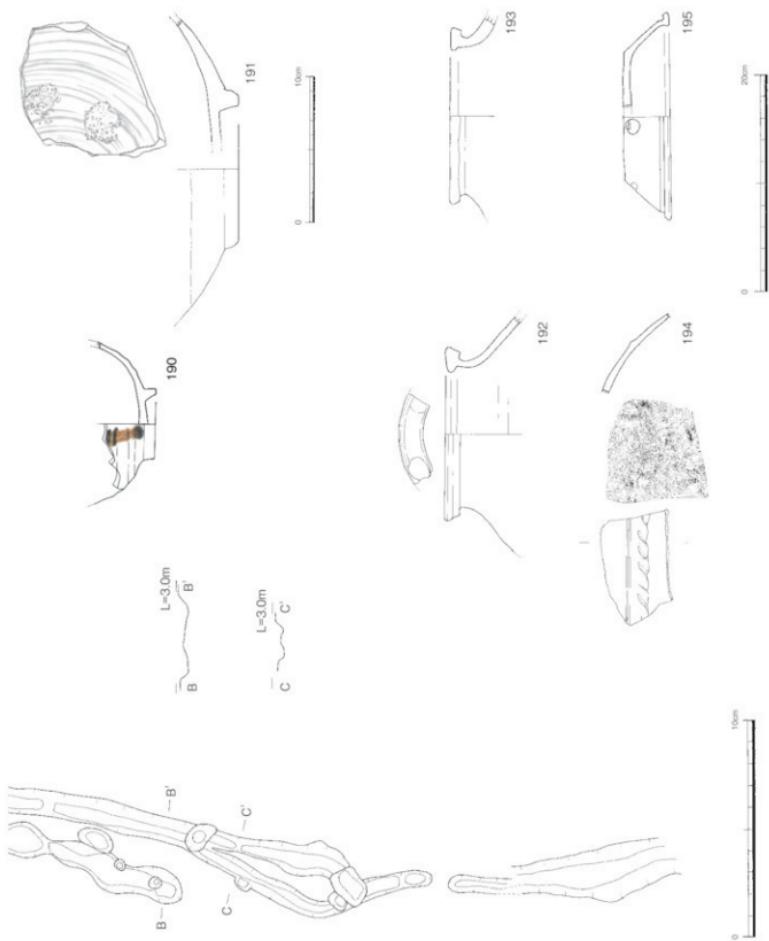
F・G - 14・15区で検出された。全て繋がっているわけではないが、石が並ぶ方向などから、同一の遺構であると考えられる。D・E - 13区で検出された石垣とは異なり、石を積み上げたものではなく、石を平面的に並べて配置してある。



第85図 石組み遺構内出土遺物



第86図 溝状遺構1および出土遺物1



石組み遺構出土遺物(第85図)

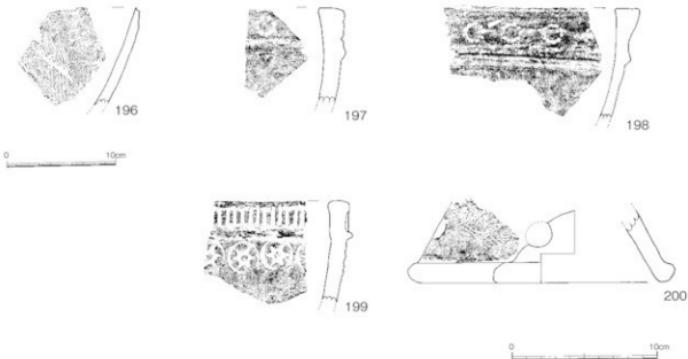
主にG-14区で検出した石組み遺構から出土した遺物である。177はやや小振りの端反碗である。外面の文様は格子目で内面には界線をめぐらす。178は白薩摩の碗である。高台はまっすぐに作られている。豊付は袖剥ぎである。179は、中国産と思われる瓶である。内面はケズリの後、指でナデて調整している。180は片口の擂鉢である。181は、壺または壺の胴部である。内面には同心円状のタタキ目が見られる。中国南部産であると思われる。

溝状遺構1(第86図)

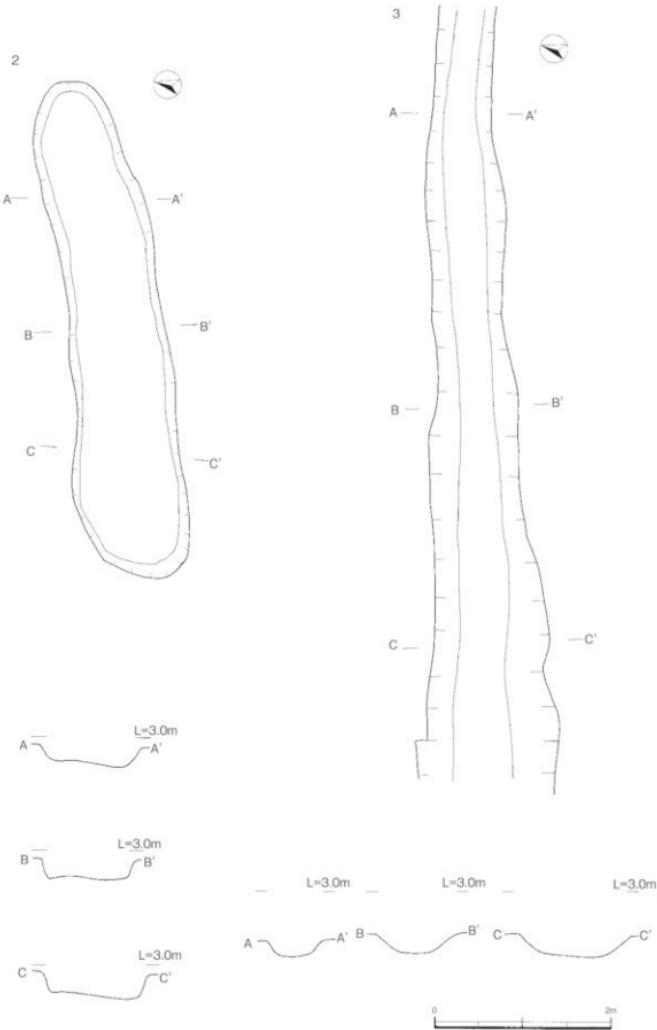
C-10～H-14区、V層上面で検出した。H-14区で一度途切れているが、方向が同じであること、出土遺物の時期がほぼ同じであることなどから同一の遺構として扱う。埋土はIa層であつたが、下層においては水成堆積もみられ、水が流れていた可能性もある。

溝状遺構1内出土遺物(第86・87図)

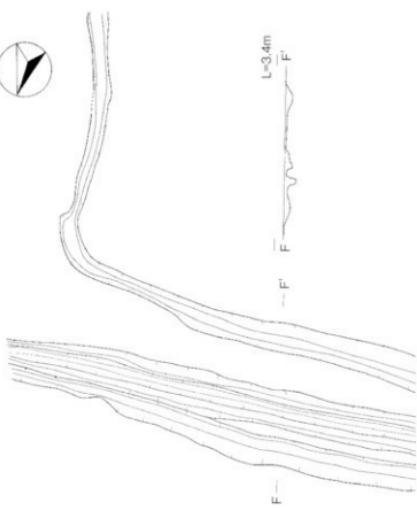
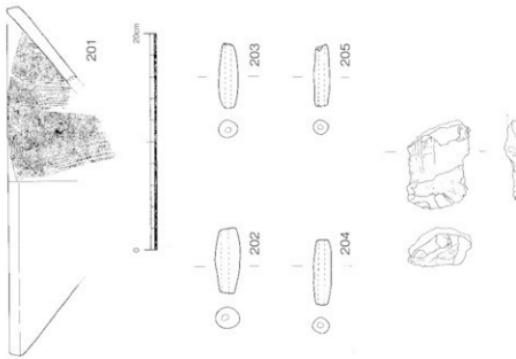
182は、切り出し高台の白磁八角形の稜花小皿である。釉は腰部までかかる。内面は、同じ製品を重ね焼きしたと見られ、4つの高台跡が残っている。183は青花の中皿である。外面は界線、内面は菱形の模様が描かれる。同じ規格の皿の破片が数個体分出土したことから、組物皿であったと思われる。184は、丸碗である。外面の文様は山水文である。185は、在地系の丸形の湯飲み碗である。やや小振りである。186・187は中皿である。186は、蛇ノ目凹形高台の稜花皿である。窯内で焼成時に接着した別の製品の破片が胴部に付着している。18世紀後半～19世紀に相当する。187は1650～1670年代に相当する。高台は釉を剥いでおり、砂が付着している。189は油壺である。頸部が短く、くびれが急で、肩が張っている。190は堂平窯の製品と思われる白磁の碗である。鉄釉で胴部に一筋景が描かれる。胴部にはロクロ跡が残り、高台は直立、豊付は平坦で、高台内面は若干斜めに入っている。高台脇には釉薬が溜まり、薄い水色を呈している。191は刷毛目唐津



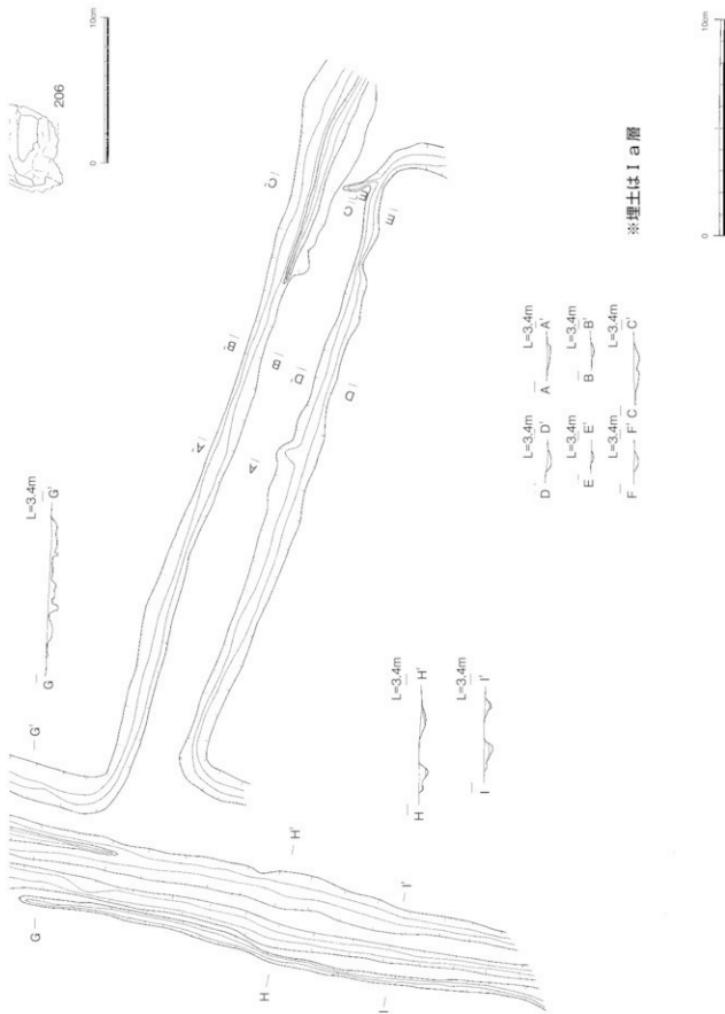
第87図 溝状遺構1内出土遺物2



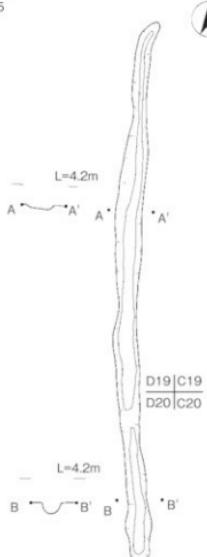
第 88 図 溝状遺構 2・3



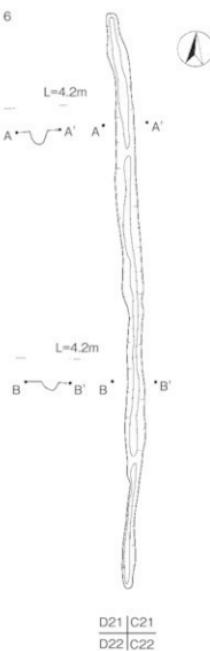
第89図 溝状遺構4および出土遺物



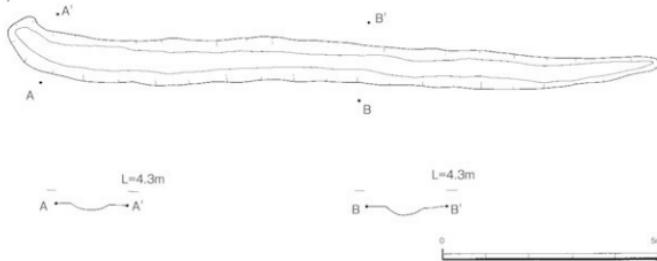
5



6


 $\frac{D21 | C21}{D22 | C22}$

7



第90図 溝状遺構5・6・7

の皿である。見込み部分には、粗い砂目が残る。17世紀後半に相当する。192・193は薩摩焼の壺である。192の口唇部には貝目が、193の口唇部にはコマ目がある。194は壺の胴部である。内面には同心円状のタキがみられる。堂平窯の製品であると思われる。195は薩摩焼の蓋である。胴部には貝目がある。17世紀後半に相当する。196は瓦質の擂鉢である。197～199は火鉢である。197・198の外面はスタンプで花文が施文されている。煤などの付着は見られない。199の外面には、格子と花の文様のスタンプが施文されている。200は植木鉢の高台部分である。外面に型押しで文様が施され、穿孔が一か所確認される。

溝状遺構2(第88図)

C・D-4区で検出した。埋土は、砂混じりのIa層である。長さ×幅=5.5m×1.2mである。深さはほぼ同じで約20cmである。

溝状遺構3(第88図)

C・D-5区で検出した。深さ10～20cmの浅い溝である。埋土は砂混じりのIa層である。

溝状遺構4(第89図)

D～H-20～24区、V層上面で検出された。埋土は全てIa層である。畠境などの溝であると思われる。溝内からは、ほとんど遺物は出土しなかった。

溝状遺構4内出土遺物(第89図)

201は、瓦質の擂鉢である。刷り目は6条である。202～205は土錘である。202は他の土錘と比べて分厚く、胎土に砂が多く混じる。粘土を棒状のものに巻き付けて指で押さえて成形した痕が観察できる。203～205は、土師器と同様の胎土で、薄く軽い。206は輪の羽口である。残存部片側には熔鉄が付着している。

溝状遺構5～7(第90図)

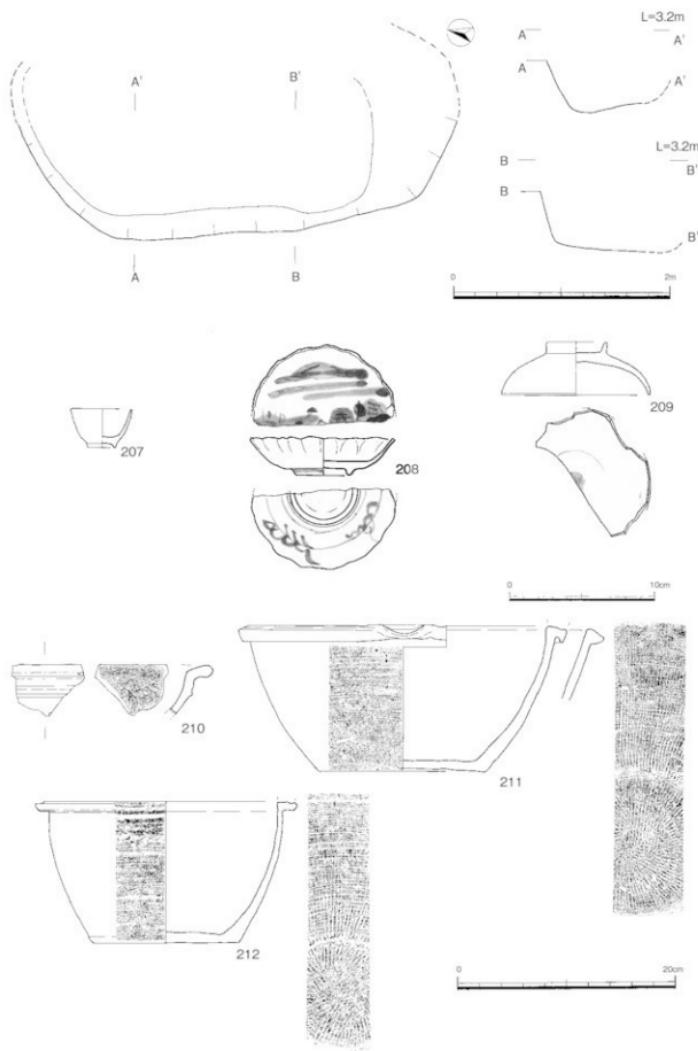
4地点、V層上面において検出した。埋土はIa層である。5・6は溝状遺構4と同一の遺構であるが、7は方向が異なるため、時期差があると考えられる。いずれも浅い。遺構内から遺物は出土しなかつたため、時期の特定はできない。

大型土坑(第91図)

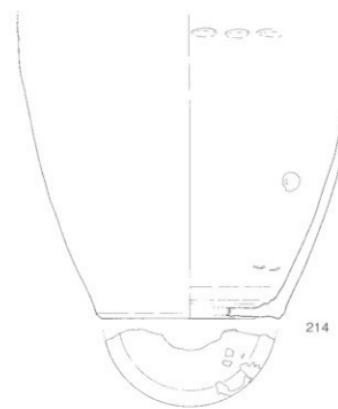
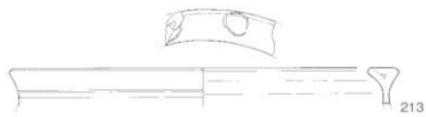
B・C-2区において検出された。検出された規模は、長径約4m、短径約1.1m、深さ50cmである。調査区内で検出できた範囲は約半分であり、この遺構は調査区外にも広がる可能性がある。埋土中からは薩摩焼の壺や擂鉢などが出土している。

大型土坑内出土遺物(第91・92図)

207は小壺である。口縁部はやや内湾する。208は後花の小皿である。内面は山水文である。豊付きは釉を剥いである。209は青磁染付の碗蓋である。内面は五弁花のスタンプ文様で、豊付きは釉剥ぎである。210～212は薩摩焼の擂鉢である。外反する口縁部と小さめの突帯から、18世紀に相当するとおもわれる。212は底部にコマ目跡が見られる。213・214は薩摩焼の壺である。口唇部には貝目跡がある。214は、底部および胴部内面に貝目跡が見られる。215の土製品は、内側に突起があり、七輪か火舎のようなものであると思われる。



第91図 大型土坑および出土遺物 1

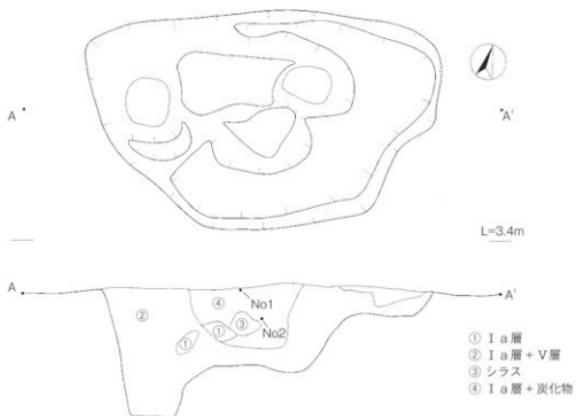


0 20cm

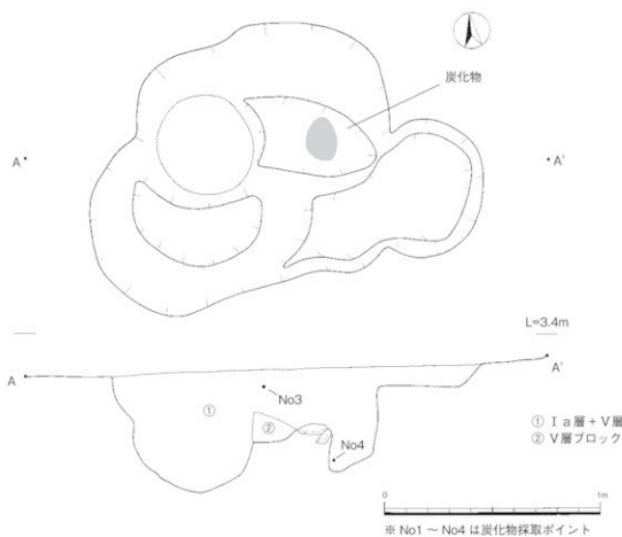


0 10cm

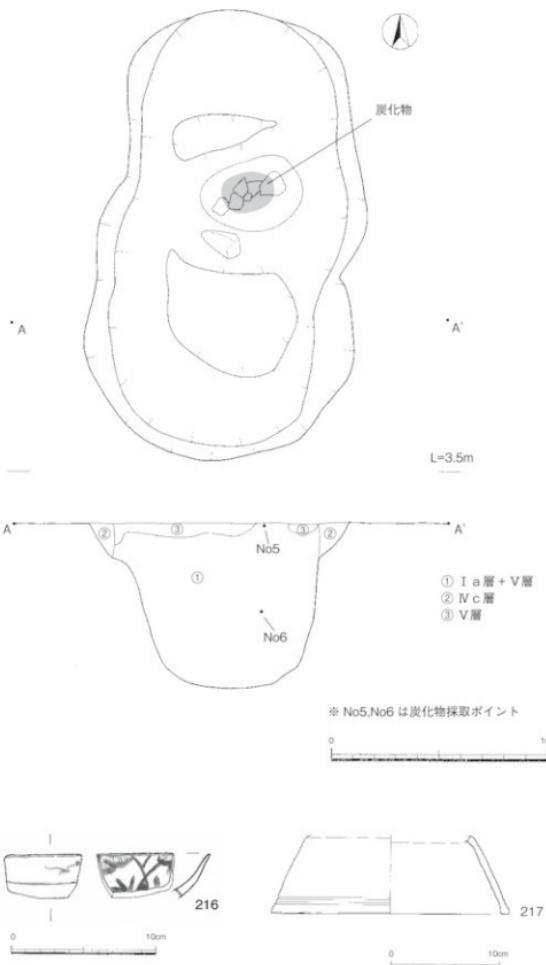
第92図 大型土坑内出土遺物2



第93図 錫冶炉1



第94図 錫冶炉2



第95図 鋼冶炉3および出土遺物

鍛冶炉跡

2 地点において 1 ~ 4 の鍛冶炉が並ぶように検出された。またやや離れた位置から検出された鍛冶炉 5 は、溝状遺構 3 を切っており、他の 4 基とは形態が異なる。鍛冶炉の中からは、鉄滓や製品は出土しなかったが、遺跡全体から碗形滓や鉄滓が出土している。

鍛冶炉 1(第 93 図)

E - 11 区、V 層上面で検出された。長径 × 短径 × 深さ = 160cm × 100cm × 60cm である。

鍛冶炉 1 から出土した炭化物による放射性炭素年代測定の結果は、上部で 120 ± 30 yrBP、下部で 150 ± 30 yrBP なので、18 世紀後半～19 世紀にかけて使用されていたことになる。

鍛冶炉 2(第 94 図)

E - 11 区、V 層上面で検出された。長径 × 短径 × 深さ = 170cm × 115cm × 55cm である。

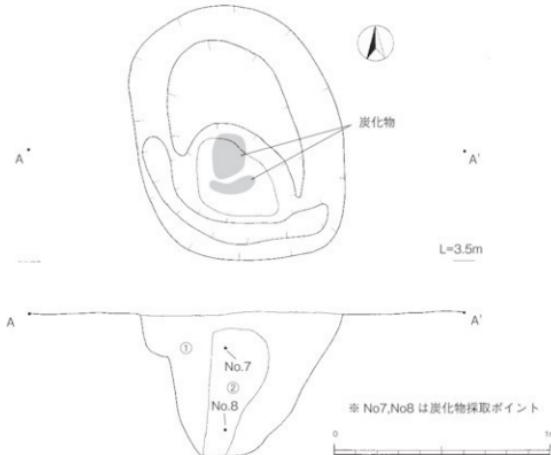
鍛冶炉 2 から出土した炭化物による放射性炭素年代測定の結果は、上部で 200 ± 30 yrBP、下部で 230 ± 30 yrBP である。この鍛冶炉は 18 世紀後半～19 世紀初頭にかけて使用されていたことになる。

鍛冶炉 3(第 95 図)

D - 11 区、V 層上面で検出された。長径 × 短径 × 深さ = 210cm × 120cm × 75cm である。鍛冶炉 3 から出土した炭化物による放射性炭素年代測定の結果、上部と下部では 100 年の差があるが、17 世紀前半～19 世紀前半にかけての年代が算出されている。このことと、出土遺物の年代から考えると、鍛冶炉 3 は江戸時代中頃～後半にかけて使用されていたものである。

鍛冶炉 3 内出土遺物（第 95 図）

216 は、肥前系染付の棗花皿である。内面には草花文が描かれている。18 世紀前半に相当すると



第 96 図 鍛冶炉 4

思われる。217は薩摩焼苗代川系の蓋である。19世紀代に相当すると思われる。

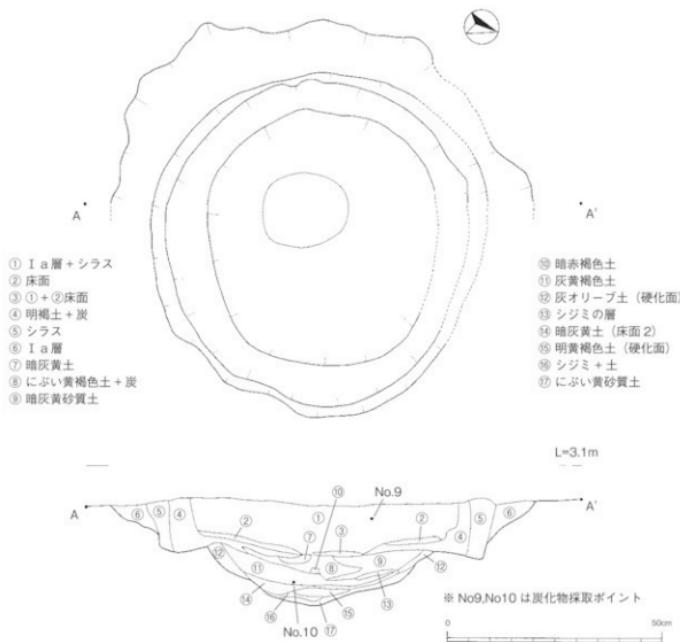
鋳冶炉4(第96図)

D-11区V層上面で検出された。長径×短径×深さ = 120cm × 95cm × 65cmである。鋳冶炉4から出土した炭化物による放射性炭素年代測定によると、上部で 200 ± 30 yrBP、下部で 160 ± 30 yrBPである。18世紀～19世紀にかけて使用されていたものである。

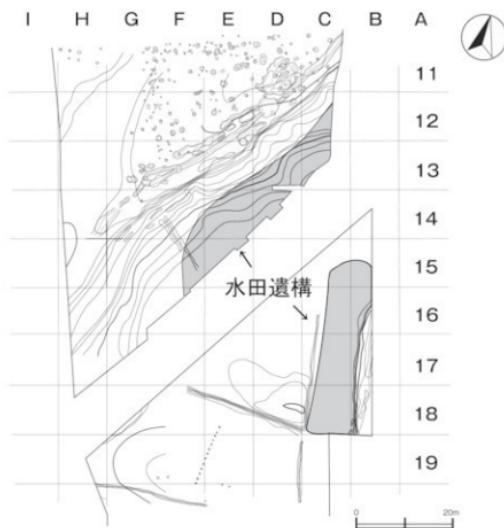
鋳冶炉5(第97図)

E-12・13区で検出された円形の鋳冶炉である。長径×短径×深さ = 195cm × 180cm × 50cmである。炉壁が2層存在することから、少なくとも2回の炉の構築があったものと考えられる。1層目の下層及び2層目の下層にはシジミのような小型の貝殻が敷き詰められて層をなしている。鋳冶炉5から出土した炭化物による放射性炭素年代測定によると、上部が 210 ± 30 yrBP、下部が 110 ± 30 yrBPという結果が出ており、18世紀後半～19世紀にかけて使用されていたものである。

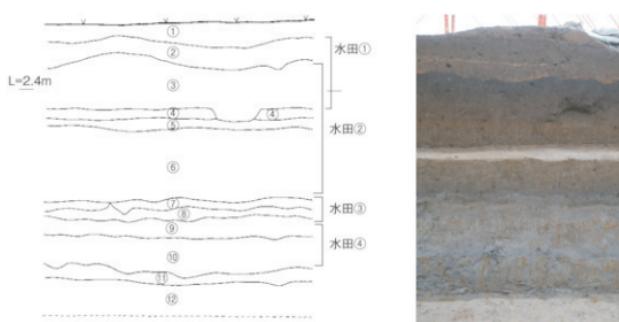
以上、鋳冶炉跡1～5における放射性炭素年代測定の詳細な結果は、第5節を参照されたい。



第97図 鋳冶炉5



第98図 水田遺構位置図



- | | |
|------------------|-----------------|
| ① 補土 | ⑦ 灰色粘質土 |
| ② 黒褐色土 | ⑧ 灰色砂 |
| ③ 黄褐色土 | ⑨ 灰黄色土 (酸化鉄を含む) |
| ④ 明黄褐色土 (酸化鉄を含む) | ⑩ 灰色シルト |
| ⑤ 黄褐色土 (マンガンを含む) | ⑪ 灰黄色粘質土 |
| ⑥ 灰黄褐色土 (酸化鉄を含む) | ⑫ 灰色粘質土 |

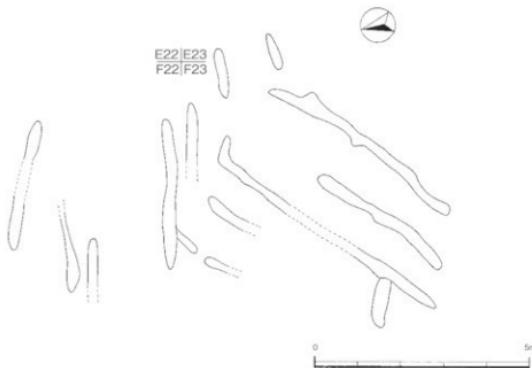
第99図 水田遺構土層断面図

水田遺構(第98・99図)

3地点・4地点の低湿地部分では、水田遺構が確認された。3地点の水田遺構においては、畦や水口といった水田に伴う遺構は確認されなかったため、範囲をはっきりと確定することはできなかつたが、堆積している土壤の観察(低湿地部分の土層断面は錆管状の鉄分・マンガンの堆積層(鋤床層)、黒色土(耕作土層)の繰り返しがみられた。)および植物珪酸体分析の結果から、水田遺構であると認定した。また、4地点の諏訪山に近い部分からも近世～近代の水田跡と思われる、酸化鉄を含む土壤が面で確認された。この部分には、畦のような土の盛り上がりがみられた。植物珪酸体分析の詳細な結果は第5節に掲載する。

畝間状遺構(第100図)

E・F-22・23区V層上面で検出された。深さは非常に浅く、数mm～数cmしか残存していない。削平が激しく、検出できた規模が当時のものであるとは言い難い。東西方向と南北方向に重なって検出されたので、おそらく比較的短い間で何時期かの遺構が重なっているものであると考えられる。埋土の植物珪酸体分析の結果、稻作、ムギの栽培が行われていた可能性が認められた。また、当時の調査区周辺は、ススキ属やチガヤ属などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であり、部分的にヨシ属が生育するような湿地的なところも見られたということであった。また、イスノキ属を主体として、シイ属、クスノキ科なども生育する照葉樹林が分布していたと推定される。これは、低湿地のV層における植物珪酸体分析の結果とほぼ同じであり、Ⅲ層～V層の時期と同時期にこの畝間状遺構が存在していた可能性も考えられる。自然科学分析の詳細な結果については、第5節を参照されたい。



第100図 畝間状遺構

(2) 遺物

中世～近世の出土遺物については、1区から4区において大量の陶磁器が検出された。この時期に相当する層位はⅡ～Ⅳa・b層であるが、中世と近世の時代区分は層位的に困難で、中世から近世にかけての遺物がどの層位からも混在して出土する状況であった。そのため、ここでは、中世から近世の出土遺物を一括して取り扱い報告する。

中世に相当する遺物は、輸入磁器（白磁、青磁、青花）、滑石製石鍋が出土しているが、これらの出土量は約350点と多くはない。それに対して、近世に相当する遺物は約10,300点と多い。主なものとしては、肥前陶磁器、薩摩焼、瓦質土器、土師質土器、土製品等が出土している。

分類方法については、輸入陶磁器、国内産磁器、国内産陶器、その他（瓦質土器・土師質土器・土製品・滑石製品・瓦・金属製品・古銭等）に大分類し、さらに種別、器種に細分類した。また、器形や產地（判別できるもの）についても考慮し分類を行った。（以下参照）

輸入陶磁器	白磁	皿
	青磁	椀・皿・盤・香炉・瓶
	青花	碗・皿・その他
	陶器	徳利

国内産磁器（白磁・色絵を含む）

碗・小杯・皿・鉢・蓋・瓶・仏具・その他

国内産陶器
碗・小杯・皿・鉢（食膳具）・蓋（浅鉢形以外のもの）・水注・土瓶・徳利・片口・鉢（調理具）・擂鉢・鍋・釜・蓋（浅鉢形のもの）・壺・壺・灯明具・仏具・その他

その他
土製品（土人形・土錘）、瓦質土器（火鉢）、土師質土器（焙烙）、鉄製品（坩埚・鉄滓）、滑石製品（石鍋）、金属製品、古銭

また、近世の遺物とともに近代以降の遺物も出土した。鍛冶炉遺構が近世から近代のものと想定されるため、近代以降の出土遺物として、中世～近世の出土遺物の次に報告しておきたい。

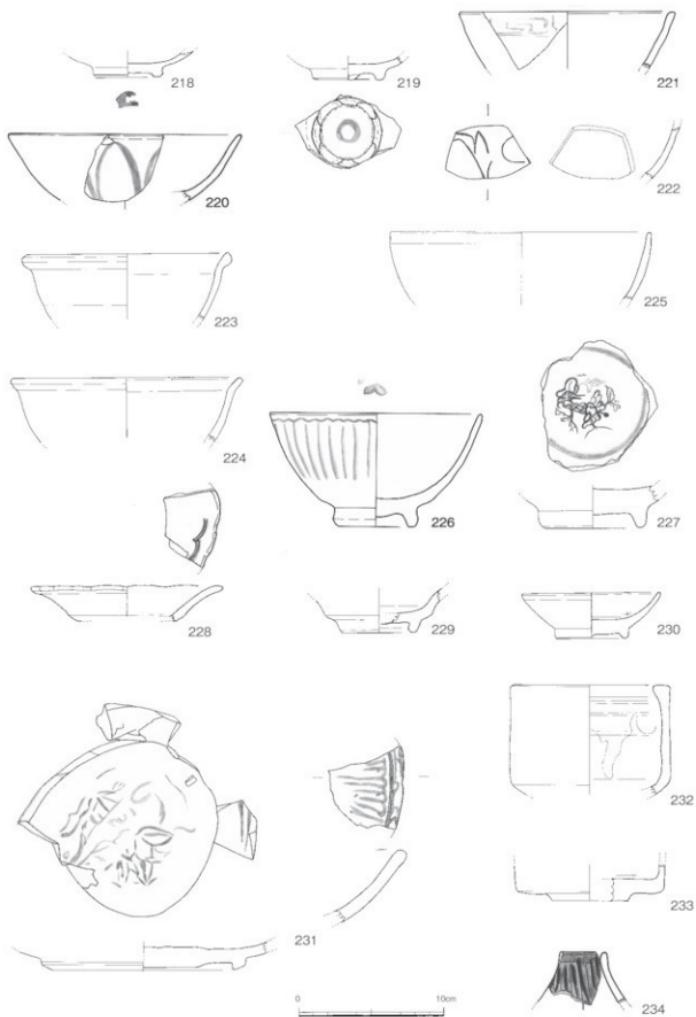
輸入陶磁器

白磁（第101図）

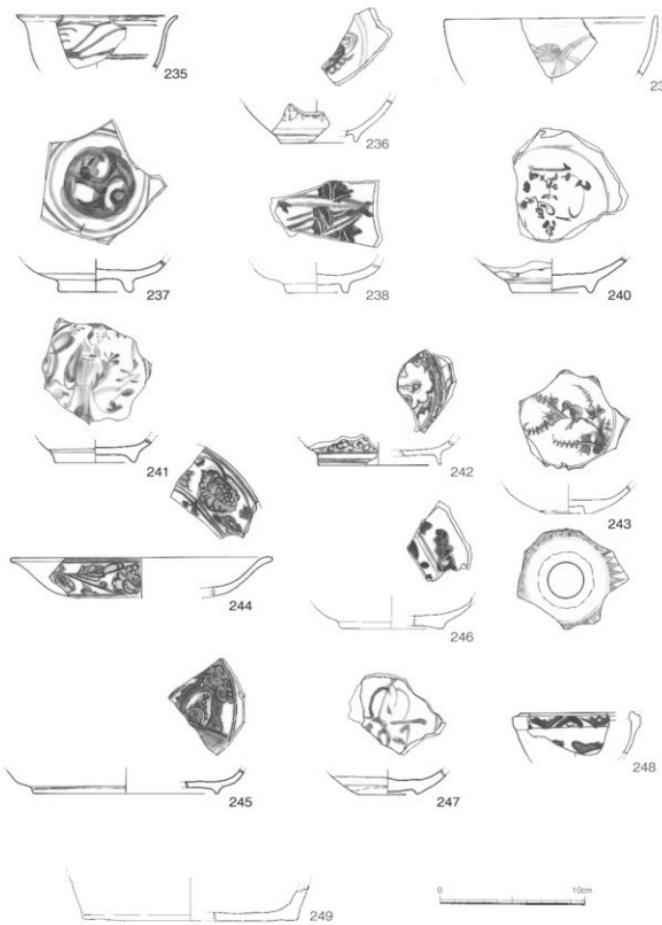
218・219は皿である。黄白色の粗い胎土に、白濁した釉薬が内面と外面腰部までかかる。2点とも高台内底面には、墨書が書かれている。219の高台は抉り高台を呈する。

青磁（第101図）

220～234は龍泉窯系の青磁である。220～227は椀である。220は外面に片彫りで連弁文が描かれる。連弁の中央に稜はみられない。221は外面口縁部にやや崩れた雷文帯を有するものである。222は口縁部が欠損しているが、外面に雷文帯を有するものと考えられる。223・224は口縁端部が外反するものである。223は口縁端部が丸くつくられ、小形の玉縁状を呈する。224は口縁端部が丸くつくられるが、223のように玉縁状にはならない。225は口縁部がやや内湾するもので、内外面とも無文である。226は外面に細蓮弁文を描くものである。細線と剣頭をそれぞれ別々に描いて



第 101 図 中世～近世の出土遺物 1 輸入陶磁器



第 102 図 中世～近世の出土遺物 2 輸入陶磁器

いるが、蓮弁文としての単位は意識して描かれる。227は底部である。見込みには印花文がスタンプされる。釉は比較的厚く、豊付も含め高台全てにかかり、高台内底面は輪状に釉剥ぎされる。

228～230は皿である。228は稜花皿である。内面には線彫りによる文様が施される。229は腰部が強く屈曲するもので、稜花皿の底部と思われる。高台内底は輪状に釉剥ぎされる。230は見込みと高台内底が円状に釉剥ぎされるものである。

231は盤である。口縁部と底部の2点で、同一個体と思われる。口縁端部は丸みを帯び、見込みには印花文が施される。高台内底面の釉は輪状に釉剥ぎされる。焼成不良のためか、胎土・釉薬ともに灰黄色を呈する。龍泉窯系のものでない可能性も考えられる。

232・233は香炉である。232は口縁部で、釉は外面と口縁部内面上位までかかり、以下は露胎する。233は底部である。高台は充実高台状になるものと思われる。

234は瓶の頸部である。

青花（第102図）

235～240は碗である。235～238は景德鎮窯系のものである。235は端反口縁を呈する。236は蓮子碗の底部である。高台はやや内傾し、豊付は尖る。237は見込みが饅頭心を呈する。豊付には褐色の砂粒が付着する。238は腰が張る形状を呈する。239・240は漳州窯系のものである。胎土は黄白色の色調を呈し、具須の発色も鈍い。

241～247は皿である。241～246は景德鎮窯系のものである。241は底部で、見込みに人物文が描かれる。242は口縁部が欠損しているが、端反口縁になるものと思われる。243は底部が基筒底を呈するものである。244は端反口縁を呈する。245は高台が斜めに面取りされており、一部に砂粒が熔着する。246は高台が充実するもので、中心に向けてレンズ状に凹む。247は漳州窯系のもので、底部が基筒底を呈する。

248は景德鎮窯系の蓋物と思われる。口唇部の蓋受け部は、釉剥ぎされる。

陶器（第102図）

249は中国南部産の瓶もしくは壺と思われる。外面は体部に黒釉がかかり、外底面に目跡がみられる。内面は無釉である。

国内産磁器

国内産磁器については、肥前系磁器の染付・白磁・色絵と、薩摩磁器の平佐系と思われる在地産の染付・白磁が出土している。

碗（第103～107図）

碗については、形状から次の7つに細分化した。

丸形 体部が丸みを帯び、口縁部は直口もしくはやや内湾するもの。

朝顔形 腰部で内側に屈曲し、体部は逆ハの字型にまっすぐのびるもの。

小広東形 小形の碗で、体部はやや丸みを帯びながら立ち上がるが、口縁部に向けてハの字状に開く。